

# 講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5

## 南講武草田遺跡

1992年3月

島根県 鹿島町教育委員会

# 講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5

## 南講武草田遺跡

## 序

ご存じのように鹿島町講武地区は、数多くの埋蔵文化財のあるところとして知られていますが、この地区で圃場整備事業が計画され、工事実施に先立って埋蔵文化財調査を実施してまいりました。

昭和63年度には、南講武での圃場整備事業に伴ない、南講武草田遺跡の発掘調査を実施いたしました。調査では弥生時代の終わり頃から古墳時代の初めにかけての墳墓などが発見されました。このお墓に大量に供えられた土器から、近畿地方の人々がこの講武地区を訪れていたことがわかり、この地が古墳時代にいたる大きな歴史の一こまに位置付けることができたように聞いております。

関係者のご協力を得、こうした貴重な調査例を現地の地下に保存できたことは、まことに喜びにたえません。この記録をとおして、先人の労苦に思いをいだし、私達の明日への展望を開きたいものと思います。

終わりになりましたが、この南講武草田遺跡の調査をもって、講武地区県営圃場整備事業に関する発掘調査は終了いたしましたが、長期間にわたる調査にご協力いただきました土地所有者の方々、ご指導いただいた島根県教育委員会をはじめとする関係各位に厚くお礼申し上げて、報告書発行のごあいさつとさせていただきます。

平成4年3月

鹿島町教育委員会

教育長 袖本重幸



## 例　　言

1. 本書は、鹿島町教育委員会が実施した講武地区県営圃場整備事業に伴う南講武草田遺跡の発掘調査の記録である。
2. 遺跡は、島根県八束郡鹿島町大字南講武424-3、425、432-1、434-1に所在する。
3. 調査は、昭和63年11月9日から平成元年3月17日まで実働91日をかけて実施した。遺物整理は調査と平行して開始したが、大量な遺物のため、平成3年度までの4年間断続的に行った。調査から整理までの体制は以下のとおりである。

事務局　鹿島町教育委員会教育次長　山本林市、青山一春、曾田　稔  
同　社会教育係長　曾田　稔、青山俊太郎

調査指導　田中義昭（島根大学法文学部教授）  
石井　悠（松江市立第二中学校教諭、調査当時）  
勝部　昭（島根県教育庁文化課課長補佐）  
鳥谷芳雄（島根県教育庁文化課主事、調査当時）

調査員　赤澤秀則（鹿島町教育委員会主事）

調査補助員　石橋淳一、佐藤雄史、宮本正保

作業員　袖本富至、石橋静枝、石橋積枝、石橋寿子、曾田芳子、中村美代子、古瀬玉子、古瀬智恵子

調査協力者　吾郷雄二、稻田信、内田雅己、瀬古諒子、中村明夫、西尾克己、原俊二、原田敏照、守岡正司

遺物整理参加者　中村暢夫、朝山千鶴（以上町立歴史民俗資料館職員）、青山善之、石橋淳一、岡　泰道、小笠恵子、川上美智恵、杉田ますみ、瀬古諒子、瀬田明子、曾田秀穂、丹羽野輝子、松山智弘、山本幸二

4. 調査にあたっては、土地所有者袖本義弘、袖本陽治、袖本富至、佐野富士夫の各氏には終始多大なご協力をいただいた。また、松江農林事務所耕地第一課にも協力いただいた。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

5. 報告書の作成にあたっては、以下の方々に有益なご助言をいただいた。記して感謝の意を表させていただきます。（敬称略）

足立克己（島根県教育庁）、置田雅昭（天理大学）、龟田修一（岡山理科大学）、川原和人（島根県教育庁）、久保智康（京都国立博物館）、澤野啓一（東邦大学医学部）、白石太一郎（国立歴史民俗博物館）、鈴木敏則（浜松市博物館）、申 敏徳（慶星大学校）、昌子寛光（松江市教育委員会）、椿真治（岡山県教育庁）、平野芳英（八雲立つ風土記の丘）、広江耕史（島根県教育庁）、松本岩雄（島根県教育庁）、柳田康雄（福岡県教育庁）

6. 遺構の略称は次のとおりとした。

SD—水路、溝　SX—墓塚・土器棺　SB—建物　SK—土坑

7. 遺構・遺物の時期については、今回暫定的に草田形式を設定して説明した。第Ⅳ章第1節を参考されたい。

# 目 次

序			
I. 調査の経過	1	DE-3区土器漁り ..... 46	
II. 位置と歴史的環境	2	F-3区土器漁り ..... 51	
III. 調査の概要	4	C-3・4区土器漁り ..... 54	
1. 第1調査区	4	D-5区土器漁り ..... 54	
2. 第2調査区	6	E・F-2区土器漁り ..... 58	
3. 第1調査区	6	E・F-4区土器漁り ..... 59	
土層	6	G-6区出土遺物 ..... 59	
SD01上層水路	11	H-2・3区土器漁り ..... 62	
SD01下層水路	11	H-5区土器漁り ..... 64	
SD02	15	D-4区上層出土遺物 ..... 68	
SD03	18	その他の地点出土遺物 ..... 68	
吉備系遺物	22	4. 第2調査区	71
土器漁り	26	第2調査区出土遺物	71
SX01・03	26	IV. 小 結	73
SX04	30	1. 出土遺物・時期	73
SX05	31	2. 土器漁り	78
SX06	32	3. 敷入遺物	78
SX07	32	4. 墳墓群	79
SX08	36	5. 水路	80
SX09	37	出土遺物観察表	82
SX10	39		
SB01	40		
SB02	40		
SK13~17	42		
SD05	43		
CD-4区土器漁り	43		

## 挿 図 目 次

図1 鹿島町位置図	1
図2 南譲武小道遺跡・出土土器	2
図3 南譲武草田遺跡と周辺の遺跡	3
図4 南譲武草田遺跡調査区配置図	5
図5 1区平面図	7~8
図6 1区土層図	9~10
図7 SD01上層水路実測図	11
図8 SD01下層水路実測図	11
図9 SD01出土遺物実測図(1)	12
図10 SD01出土遺物実測図(2)	13
図11 SD01出土遺物実測図(3)	14
図12 SD01出土遺物実測図(4)	14
図13 SD02実測図	16
図14 SD02出土遺物実測図(1)	17
図15 SD02出土遺物実測図(2)	18
図16 SD03実測図	19
図17 SD03出土遺物実測図(1)	20
図18 SD03出土遺物実測図(2)	21
図19 SD03出土遺物実測図(3)	22
図20 吉備系土器実測図	23
図21 土器溜り出土状況平面図(1)F~E区	24
図22 土器溜り出土状況平面図(2)E~C区	25
図23 SX01~03実測図	27~28
図24 SX03出土遺物実測図	29
図25 SX04実測図	30
図26 SX05実測図	31
図27 SX06実測図	33
図28 SX06出土遺物実測図(1)	34
図29 SX06出土遺物実測図(2)	35
図30 SX07実測図	35
図31 SX08実測図	36
図32 SX08出土遺物実測図	36
図33 SX09出土遺物実測図	37
図34 SX09実測図	38
図35 SX10出土状況断面図	39

図36	SX10出土遺物実測図	39
図37	SB01出土遺物実測図	40
図38	SB01実割図	41
図39	SB02実割図	42
図40	SB02出土遺物実測図	43
図41	SK13~17実測図	44
図42	SD05実測図	45
図43	CD-4区出土遺物実測図(1)	47
図44	CD-4区出土遺物実測図(2)	48
図45	CD-4区出土遺物実測図(3)	49
図46	CD-4区出土遺物実測図(4)	50
図47	CD-4区出土遺物実測図(5)	50
図48	DE-3区出土遺物実測図(1)	52
図49	DE-3区出土遺物実測図(2)	53
図50	F-3区出土遺物実測図(1)	55
図51	F-3区出土遺物実測図(2)	56
図52	F-3区出土遺物実測図(3)	57
図53	F-3区出土遺物実測図(4)	58
図54	F-3区出土遺物実測図(5)	59
図55	C-3・4、D-5、EF-2区出土遺物実測図	60
図56	EF-4、G-6区出土遺物実測図	61
図57	土器溜り出土状況平面図(3) H-2・3区	62
図58	H-2・3区出土遺物実割図	63
図59	土器溜り出土状況平・立面図(4) H-5区	65
図60	H-5区出土遺物実測図(1)	66
図61	H-5区出土遺物実測図(2)	67
図62	H-5区出土遺物実測図(3)	68
図63	D-4区上層出土遺物実測図	69
図64	その他の地点出土遺物実測図	70
図65	2区平面図	71
図66	2区土層図	72
図67	2区出土遺物(1)	72
図68	2区G-1出土木製品実測図	72
図69	草田各期遺物変遷図(1)	74
図70	草田各期遺物変遷図(2)	75
図71	草田各期遺物変遷図(3)	76

## I. 調査の経過

鹿島町講武地区は、島根半島部有数の水稲耕作地帯であり、町全体の水田面積270haのうち、183haを占めている。このうち約半分については昭和30年代に区画整理事業が行われたが、依然として排水、道水路網に不備な点が残されており、同地における圃場整備事業の実施は関係者の強い要望であった。この要望のもと、昭和59年度から講武地区県営圃場整備事業が133haを対象として開始されるにいたった。

一方、この事業計画地内には、点々と遺跡の存在が知られていたため、関係者のたび重なる協議を経て、昭和59年度から以下のような発掘調査を実施してきている。

名分塚田遺跡第1次調査（昭和60年1月）

名分湯戸遺跡群発掘調査（昭和61年2～3月）

名分塚田遺跡第2次調査（昭和61年6～7月）

講武地区遺跡分布調査（南講武草田遺跡、南講武大日遺跡、昭和61年10～12月、国庫補助事業）

講武地区遺跡分布調査（講武川流域条里制遺跡、昭和62年11～12月、国庫補助事業）

北講武氏元遺跡発掘調査（昭和63年4～8月）

昭和61年度の講武地区遺跡分布調査事業によって、南講武草田遺跡を確認、昭和62年度の同事業により北講武氏元遺跡を発見した。協議の結果、昭和63年度中に北講武氏元遺跡の調査は松江農林事務所からの受託事業、南講武草田遺跡調査は鹿島町の単独事業として実施することとなった。

南講武草田遺跡の発掘調査は、昭和63年11月9日に着手したが、予想を上まわる遺物が出土し、調査期間を延長して翌平成元年3月17日まで実施した。これにより、弥生時代末前後の墳墓群が検出されるなど、貴重な成果をあげた。

出土遺構、遺物の重要性、調査区外に

も遺跡が広がっていることなどから、取扱いについては協議の結果、当該地での圃場整備事業は水田面の出来高を高くする設計の変更をしていただき、工事によって遺跡を傷つけることがないように配慮いただくこととなった。

この協議が整った後の8月5日、現地説明会を開催し、約60名の参加を得た。

この後、遺跡は再び埋め戻された。



図1 鹿島町位置図

## II. 位置と歴史的環境

島根半島のほぼ中ほどに位置する講武盆地は、面積180haの水田を有しており、半島部では持川津平野とならぶ広い耕地面積を有する。この盆地は、谷奥から流れ出す講武川によって作られた肥沃な地味により、古くから水稻耕地として格好の条件を備えていたものと考えられる。

南講武草田遺跡は、この盆地のほぼ中央部の南寄りの扇状地に位置している。

この盆地をめぐっては、縄文時代早期から中期にかけての佐太講武貝塚が知られており、これは現在の佐陀川沿いに開けていた潟湖をそれぞれ南と西にひかえた立地であり、こうした潟湖からヤマトシジミなどの魚介類を採集し、周辺の山野に鳥獣や堅果類を求めていたものと思われる。

弥生時代前期には、日本海沿いの砂丘地に古浦砂丘遺跡が成立し、引き続いて講武盆地西端に位置して佐太前遺跡が成立している。また、北講武氏元遺跡では、縄文時代晩期の遺物が出土している。さらに弥生時代のうちには、この盆地から少し離れるが「恵雲破」の南岸の山ふところに銅鐸

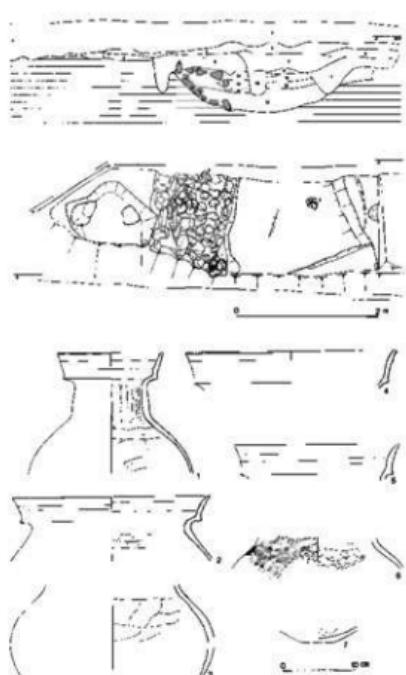


図2 南講武小廻遺跡・出土土器

2、銅劍 6 を埋納した志谷奥遺跡がある。再び講武盆地内に目を転ずると、弥生時代中期の遺物を出土した名分塚田遺跡、弥生時代後期から古墳時代前期の南講武大日遺跡など、点々と集落遺跡の存在が明らかになりつつある。また、南講武草田遺跡の近くでは、四隅突出型墳丘墓の可能性のある石列を検出した南講武小廻遺跡が知られている。

古墳時代には講武盆地をめぐる丘陵上に数多くの古墳が築造されており、この時代までに盆地内の開発が進んだことを示している。特に名分地域には、名分丸山古墳群、奥才古墳群、鶴舞山古墳群など前半期にさかのぼる古墳群が、北講武地域には、石棺式石室の講武岩屋古墳や、須恵器子持壺を出土した向山古墳など後期古墳が多く分布する傾向がある。

これら以外にも、横穴墓が多数知られており、古墳時代後期の段階には現在の集落の原形ができあがるものと考えられる。

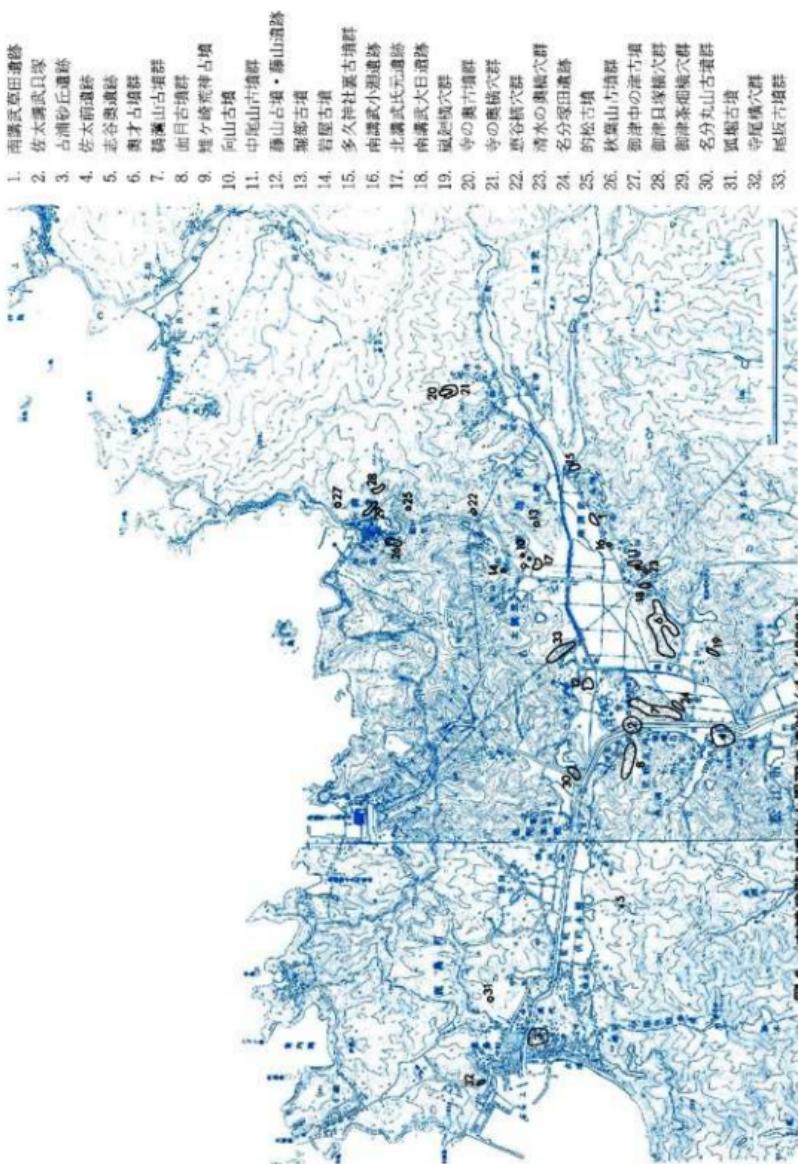


図3 南講武草田遺跡と周辺の遺跡 (1/50000)

### III. 調査の概要

昭和63年度、南講武草田遺跡の調査をもって5年間7次にわたる講武地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査は最終年度を迎えていた。同遺跡は、昭和61年度の講武地区遺跡分布調査で弥生時代末から古墳時代初頭にかけての遺物をかなりの密度で包含する層の存在を確認しており、これについて発掘調査を実施したものである。

遺跡は、講武盆地の南辺に位置する扇状地上にあり、周辺の標高は19~20mである。この地点に東西30m×南北12mの第1調査区、東西20m×南北5mの第2調査区をそれぞれ設定し、講武地区遺跡分布調査での知見にもとづき、包含層にいたるまでの土砂を重機で除去して調査を開始した。1区では4m区画の方眼を設けた。

#### 1. 第1調査区

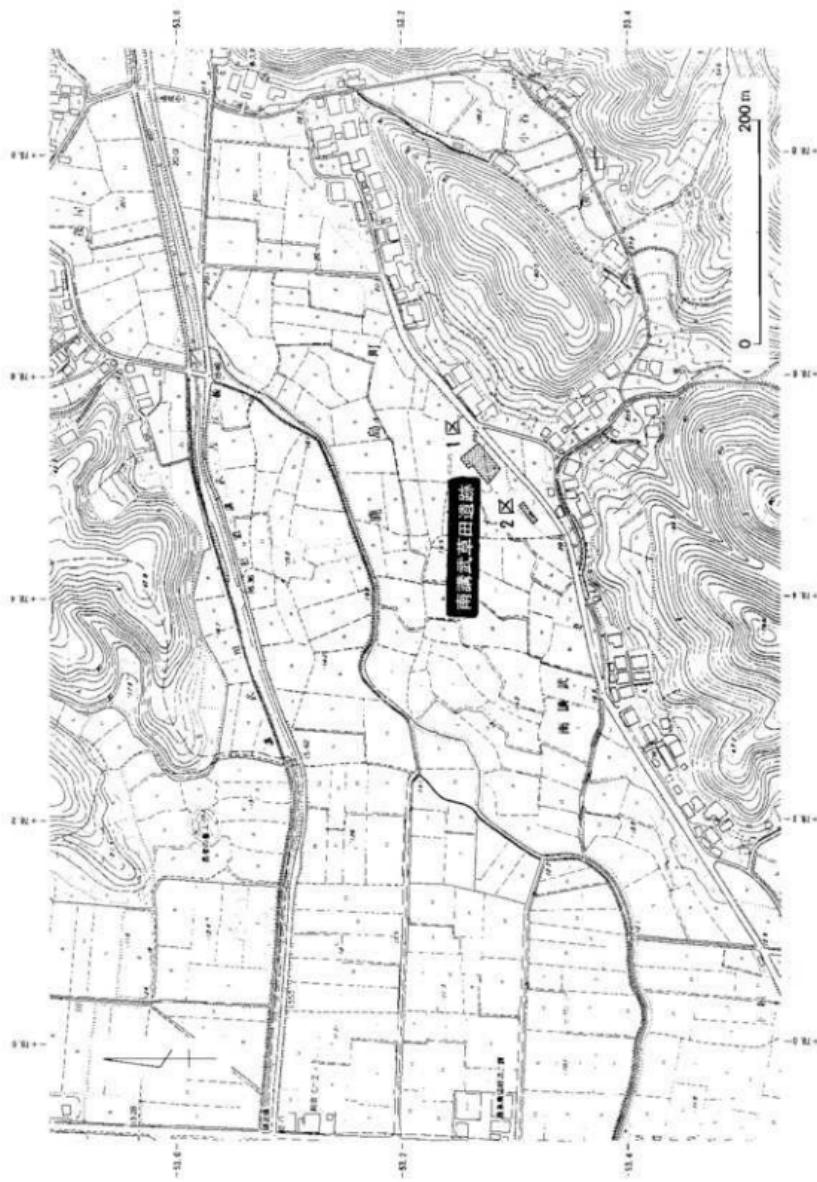
まず調査区南東隅で古墳時代後期の水路（SD01）を検出。上下2層に分かれることを確認。直近に位置し、なだらかに降ってゆく丘陵裾部に水路をめぐらせ、水田に給水していたものと考えられる。

次いで調査区全面を覆っていた礫層を除去してゆく過程で、調査区西辺沿いに古墳時代前半期の水路（SD02）があることを確認し、さらにその下層にも水路（SD03）を検出した。調査区を覆っていた礫層は、これら水路を埋没させた洪水によってあふれたものであった。SD03は幅4~5m、深さ約1mの非常にしっかりとしたもので、一直線に延びることから、計画的に掘られたものと考えられる。これら3水路はいずれも大量の砂礫によって埋没しており、その除去に難済した。

また、SD02、03検出の過程で、これら水路西側に近畿地方庄内式の遺物を多量に含む特異な土器窯（H-5区）を検出、遺跡の特異性が明らかとなった。また、SD02を中心として吉備地方から搬入された小形壺形土器などの吉備系土器も見つかり、特異性が強調されていった。

SD02、03からあふれた礫層の下に黒褐色の遺物包含層が存在する。この層の掘削に入った途端、足の踏み場もない状態で遺物が出土しあり、調査方法に苦慮した。冬季の調査でもあり、土器窯の下層に存在が予想された遺構の精査ができず、とりあえず4m四方の区画ごとに遺物を図化しながら取り上げ、その後遺構の検出につとめることとした。この過程で、比較的地盤の固かった地点で、土器窯の下に木棺墓（SX01、03）があることが判明し、ある程度のまとまりをもって検出されていた土器窯は、その下にある木棺墓に伴うものであることがわかった。また、これら土器窯の遺物中にもH-5区ほどの密度ではないが近畿庄内式の遺物が含まれており、この遺跡の特異性はますます強まっていった。さらにこの土器窯の中からは、庄内式期の遺物に混じって朝

図4 南浦武草田整備調査区配置図



鮮半島製と考えられる瓦質土器も検出された（CD-4 区土器溜り）。

このようにして遺物を取上げ、遺構の精査に入ったが、この時点ですでに出土遺物はコンテナ150杯を超えており、調査費予算の組替えを行って対応せざるをえなくなっていた。結果的に遺物はコンテナ約250杯に達した。

精査によって調査区内から、8基の木棺墓、1基の壺棺、掘立柱建物、竪穴住居各1棟を検出した。まとめるところでは、弥生時代後期のものと考えられる木棺墓3基、弥生時代終末の木棺墓3基、時期の不明のもの2基となる。掘立柱建物は弥生時代後期、竪穴住居は古墳時代前期のものである。調査の最終段階を迎える、町教育委員会では、遺跡の重要性に鑑みて、圃場整備事業の設計変更を求めるところとなり、調査区内では土器溜りの状況から、さらに木棺墓など遺構の存在が予想されたが、その時点までに検出していたものののみの調査を行い、それ以上の遺構精査は行わなかった。よって、調査区内の墓塚数は確定したものではない。

## 2. 第2調査区

こちらの調査区では、第1調査区での調査に時間をとられたため、当初予定していたような調査は実施できず、G1からG3までのテストピットを3か所設定し、1区同様の遺物包含層が存在することを確認するにとどめた。

## 3. 第1調査区

### 土層

圃場整備開始以前の地表は標高約20mで、遺構検出面の標高は18.5m前後である。土層は、遺物包含層まで基本的に水平に堆積している。遺構検出面から現代の水田面まで粘質土と砂礫の層がサンドイッチ状に堆積し、繰り返される水害にしばしば水田面を埋没されながらも、耕地として現代まで維持されてきたことが観察できている。調査区を設定する以前に水田耕作土、床土を除去していたので、土層図の上端は旧地表を示してはいない。

遺構直上に堆積する礫層は、前述したようにSD01～03の水路が氾濫した際の土砂で、調査区全面を覆っている。この下層に黒褐色の土層があり、この層が遺跡の中心をなす弥生時代終末から古墳時代初頭の遺物包含層となっている。

後述する遺構を検出した基盤層は、礫を混える淡緑灰色の粘質土で、比較的安定した地盤となっている。

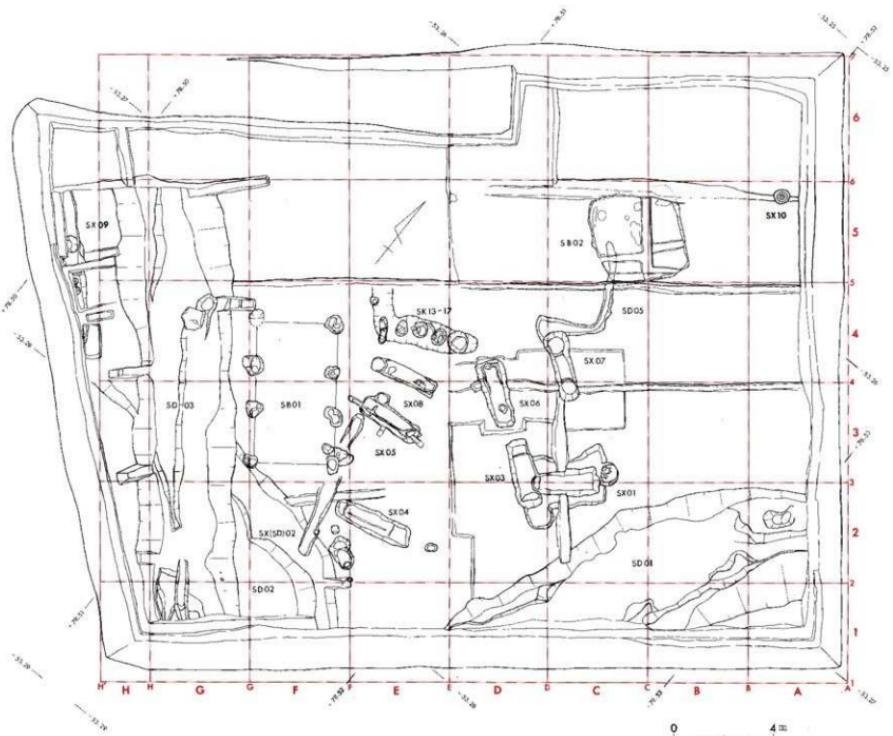
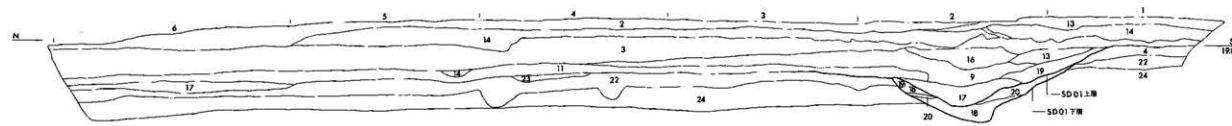
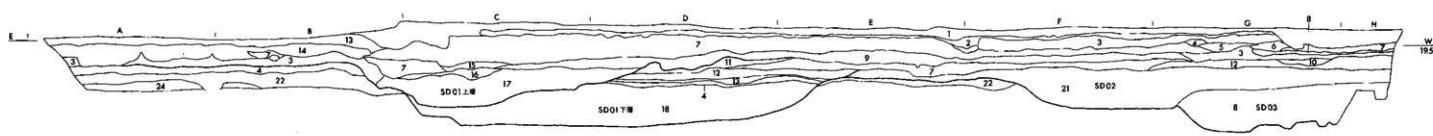


图 5 南靖武草田遗址 1 区平面图 (1 / 160)



- |            |             |                   |
|------------|-------------|-------------------|
| 1. 暗灰色粘土   | 9. 淡綠灰色砂砾   | 17. 黑色砂砾          |
| 2. 綠灰色砂質粘土 | 10. 暗灰色泥鰌粘土 | 18. 带青灰色砂質粘土      |
| 3. 青灰色砂質粘土 | 11. 暗灰色砂質粘土 | 19. 带次色有機粘土       |
| 4. 暗灰色泥鰌粘土 | 12. 茶褐色膠    | 20. 黑次色有機粘土       |
| 5. 青灰色泥鰌粘土 | 13. 灰色粘土    | 21. 級色砂砾          |
| 6. 黑灰色砂砾   | 14. 級色砂     | 22. 黑褐色土(包含層)     |
| 7. 青灰色粘土   | 15. 暗褐色砂質粘土 | 23. 带褐色土          |
| 8. 綠色壤     | 16. 淡綠灰砂質粘土 | 24. 淡紅灰色泥鰌粘土(基盤層) |

圖 6 1區土層圖 (1/80)

### SD 01 上層水路

調査区南東隅のABC-1・2区で検出した。古墳時代後期に中心がある水路で、上下2層に分かれる。上層のものは延長約8m、幅2.3~3.6m、深さ約0.5mである。土壌が軟弱な西の岸に沿って、20~30cm間隔で打ち込まれた杭が0.7mの間隔をおいて2列残っており、水路の岸を補強した土手状の遺構が存在したものと考えられる。東

岸は丘陵裾から続く基盤層となり、杭列などの施設はない。溝底は北へゆくほど深くなってしまっており、扇状地奥から流れ出す水を丘陵裾部に導き、下位に存在した水田に給水する水路と考えられる。水路内には砂礫が充満している。

この層中から古墳時代後期を中心に奈良・平安時代頃の糸切り底をもつ須恵器杯を最新とした須恵器、土師器1~46が出土している。また、石製の劔鎌車85も出土している。外面に三角形を基調にした文様が線刻されている。土師器には外面に赤色顔料を塗布した高杯36、37、38がある。

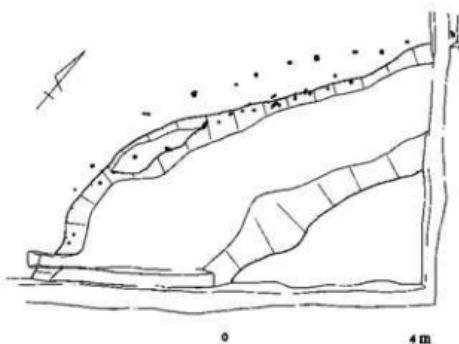


図7 SD 01 上層水路実測図

### SD 01 下層水路

ABCD-1・2区で検出した。上層水路の下面にあった水路で、延長約12m、幅5m前後、深さ約1mである。非常にしっかりした作りの水路で、上層水路同様、水田に給水するための水路と考

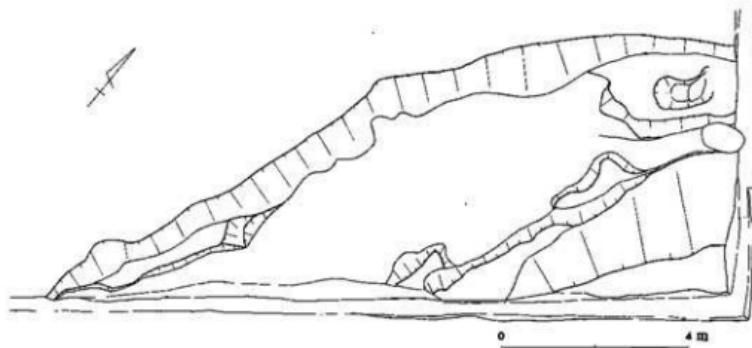


図8 SD 01 下層水路実測図

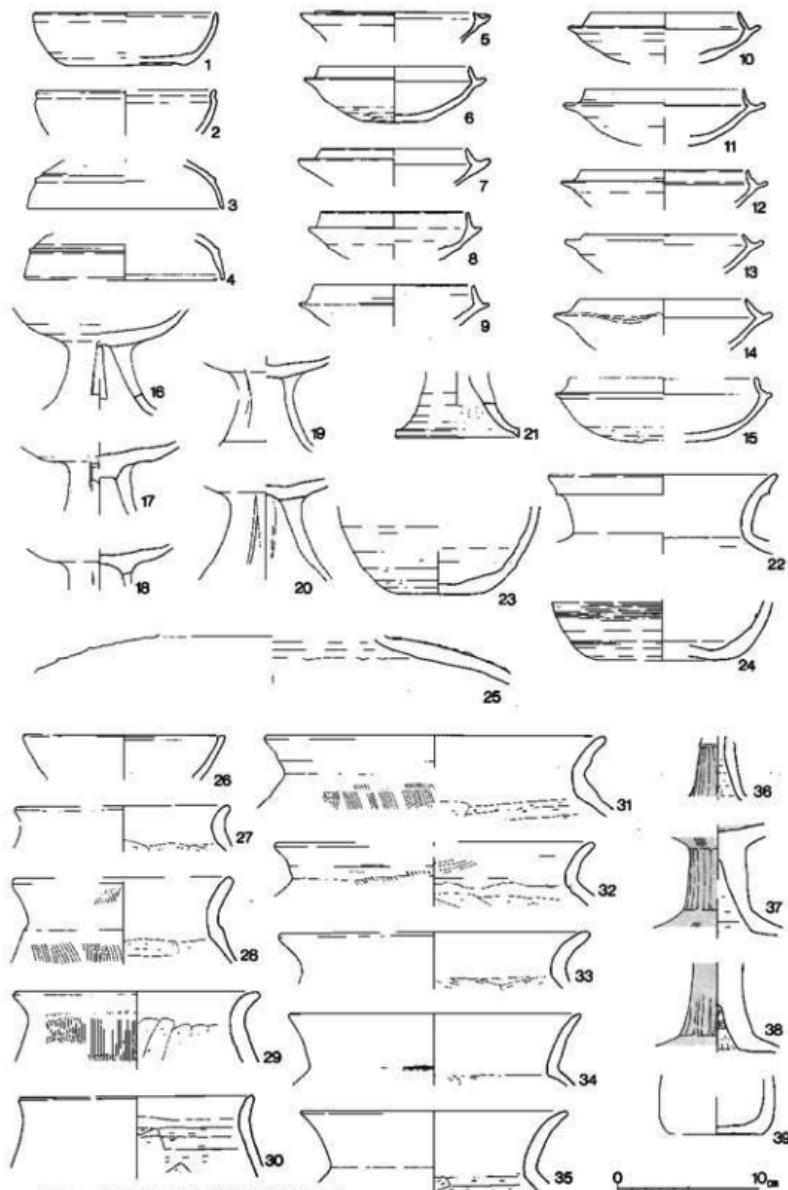


図9 SD 01出土遺物実測図(1)

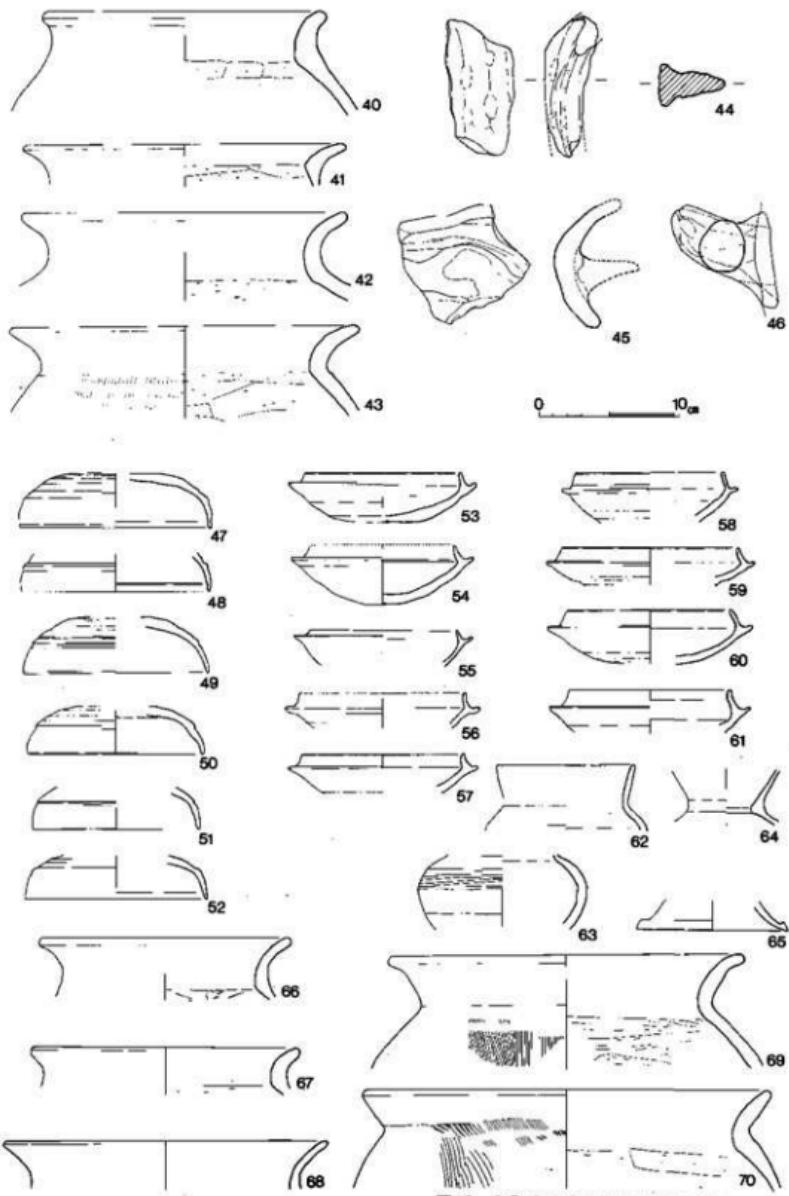


図10 SD01出土遺物実測図(2)

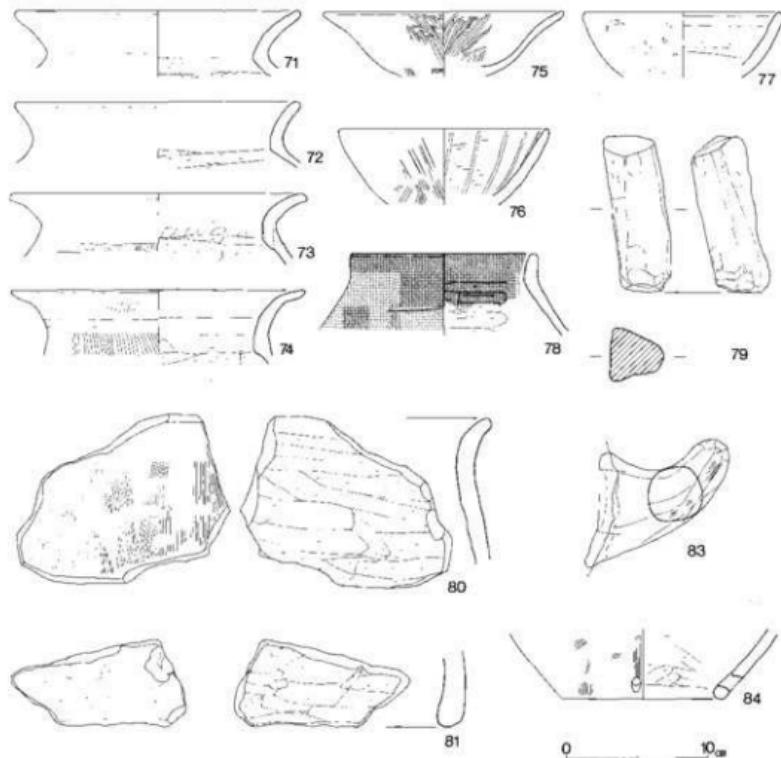


図11 SD01出土遺物実測図（3）

えられる。上層水路は、この下層水路が洪水により埋没した後、堆積した砂礫を部分的に掘り起こし、再使用したものであろう。

この水路中からも、古墳時代後期を中心とした須恵器、土師器47~84が出土している。須恵器には蓋杯、壺、土師器には甕、高杯、カマド、コシキなどがある。壺78は外面と口縁内面に赤色顔料を塗布している。

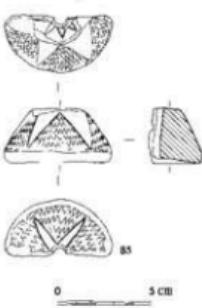


図12 SD01出土遺物実測図（4）

## SD02

調査区西辺に沿ってFGH-1～5区で検出した水路で、やはり砂礫によって埋没している。調査区内での延長は約18mである。ゆるやかなカーブをもって掘られている。幅は4.5～6.5m、深さは0.4～0.6mと比較的浅い。遺跡の立地する扇状地奥から流れ出す水をこの盆地を貫流する現在の講武川に排水する目的で掘られたものだろう。

この水路下層にあったSD03が埋没した後、この水路が掘削・供用されたものと考えられるが、比較的短時間の後に再び大規模な洪水に見舞われ、調査区全面に砂礫が覆うような事態になったものと考えられる。溝内には一抱え以上もある石が流れ込んでおり、この洪水のすさまじさを目のあたりにした。後述するSD03などには規格的に掘削された様子はなく、あたかも埋没したSD03の上面を自然の流路として水が流れていたかの感がある。

この水路を埋めた砂礫層中からは、古墳時代前半期を最新にした遺物が出土しており、これをもってこの水路埋没の時期と考えた。

遺物には草田3期から7期以降までのものがある。93は漆を保存していたと考えられる小壺で、内面に黒褐色の漆が厚く残っている。当時は木の葉で蓋がしてあったと考えられ、葉脈が漆膜に残っている。肩部に施される列点の文様から弥生時代後期の製品と考えられる。短く直立する口縁部をもち、低い脚が付くものである。体部外面を丁寧に磨いている。鼓形器台106はその胎土、調整からSD03出土の甕161とセットになる可能性がある。108～112は単純口縁の甕で、体部外面にタタキメを残す。近畿庄内式の範疇に含まれるものであろう。これらは在地の土器とは胎土が異なり、搬入品と考えられる。113、114はこうした甕の底部と考えられる。115は単純口縁のいわゆる布留甕で、小形丸底壺117、118もおおよそ同時期のものだろう。119、120、122はやはり近畿地方系譜の小形器台ないし小形高杯である。119は比較的古式の形態をもっている。高杯121は当地方では類例の知られない器形で、体部からの立ち上がり基部にヘラ描きの沈線を巡らせてている。123は初期須恵器で、甕の口縁部である。口縁部下にやや雑な波状の文様を描く。この遺物がこの水路出土資料の最新の時期を示している。

この溝内出土遺物には、弥生時代後期の遺物がかなり含まれるが、これはこの水路に隣接してその時代のH-2・3区土器溜りがあるためと考えられる。近畿地方庄内式の土器も、同様に隣接するH-5区土器溜りの遺物が混入したためと考えられる。また、この水路を中心に吉備地方から搬入された土器が見つかっている。

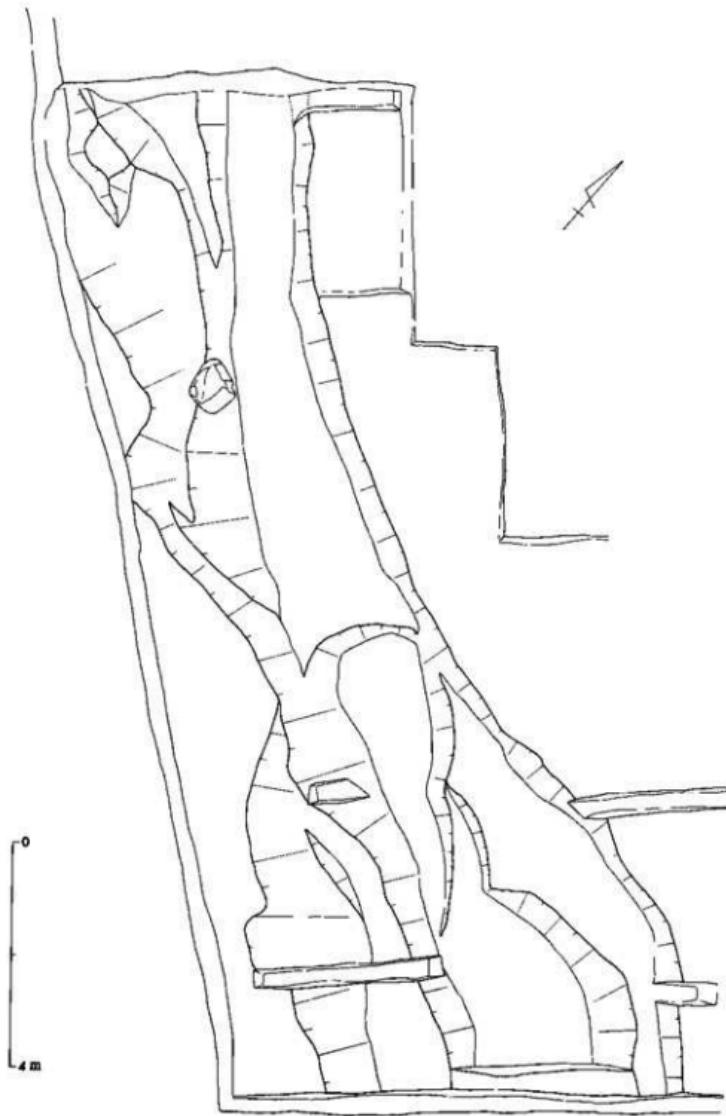


図13 SD02実測図

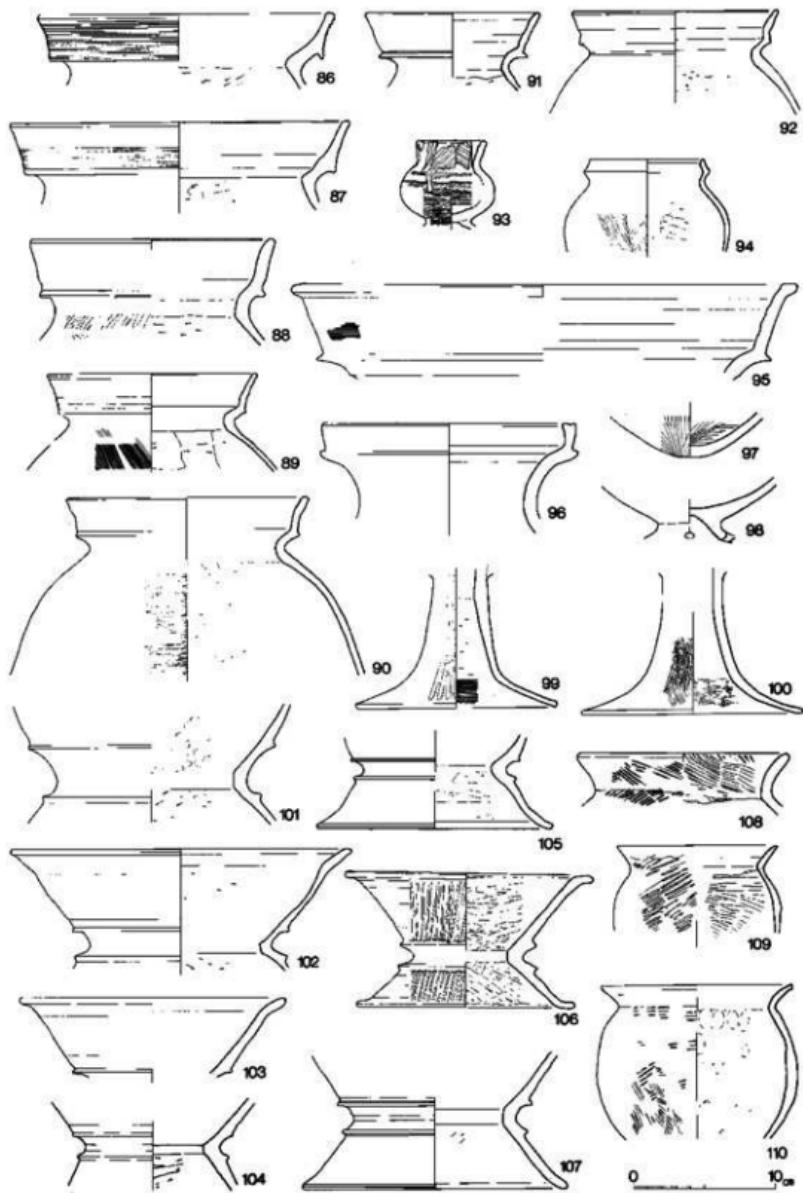


図14 SD02 出土遺物実測図（1）

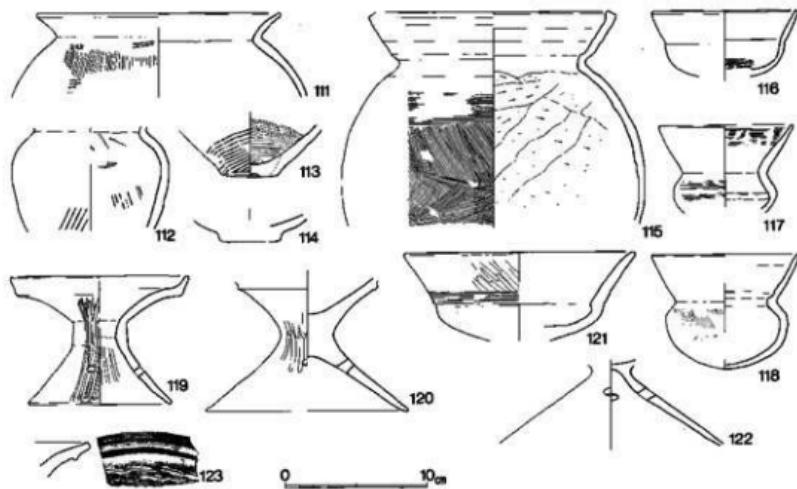


図15 SD02出土遺物実測図(2)

### SD03

SD02の下層にあった水路で、GH-1～5区で検出した。延長17mを調査した。幅4～5m、深さ約1mの非常にしっかりとしたもので、一直線に延びることから、計画的に掘られたものと考えられる。N-40°-Wの方向に向かう。下流に向かうにつれ水路は太くなっていく。南東から北西に向かう、扇状地のはば中央を貫いて掘られており、SD02同様、扇状地奥からの水を排水するためのものであろう。

粘質土とはい比較的堅固な基盤層を掘り抜いてこのような水路を掘ることは、大変な土木工事であったと考えられる。現在の諏訪川が当時も付近を流れしており、水路がそこまで延びていたとするならば、その延長は約300m近くになることになる。

水路を埋めた砂礫内からは、古墳時代前期草田7期の遺物を最新資料とする資料が出土しており、この水路はこれら遺物が示す時代に埋没したものと考えられ、SD02との時期差はさほどのものは考えられない。

この溝内出土遺物にもSD02同様、弥生時代後期の遺物がかなり多く含まれるが、これはこの水路に隣接してその時代のH-2・3区土器溜りがあるためと考えられる。また、近畿地方庄内式の土器156も、同様に隣接するH-5区土器溜りの遺物が混入したためと考えられる。

この水路からは、近畿庄内式に系譜をもち、口縁端部と肩部に円形浮文を配し、口縁内面と肩部

に鋸歯状の文様で飾ったパレススタイルの壺168、大きく開く低い脚部をもつ高杯182、小形器台181、近畿布留式に系譜のある単純口縁壺157～159なども出土しており、注目される。また、スタンプによって装飾をこらした壺190は、墳墓に供えられたものと考えられ、埴輪片191、192も出土していることから、水路上流部に古墳が存在する可能性がある。埴輪片はかなり大きな径が推定されるものである。

山陰系の土器群は、草田1～7期のもので、壺では口縁部を上方に繰り上げ、その外面に数条の凹線や沈線を施したもの124～126から、高く伸ばした口縁外面に貝殻旗縁によると考えられるクシ状工具で平行線を施すもの127～132、口縁部外面の平行線を欠くもの133、134、144～154、161がある。壺は壺ほどの量はないが、口縁部外面に数条の凹線を施したもの135、136、口縁部外面の平行線を欠く163、166、167がある。鼓形器台には、上台、下台に平行線文を施し、かなり長い筒部をもつと考えられる139～141、上台下台間がかなり縮約し、外面の文様を欠く142、筒部が痕跡化し、内面が綾

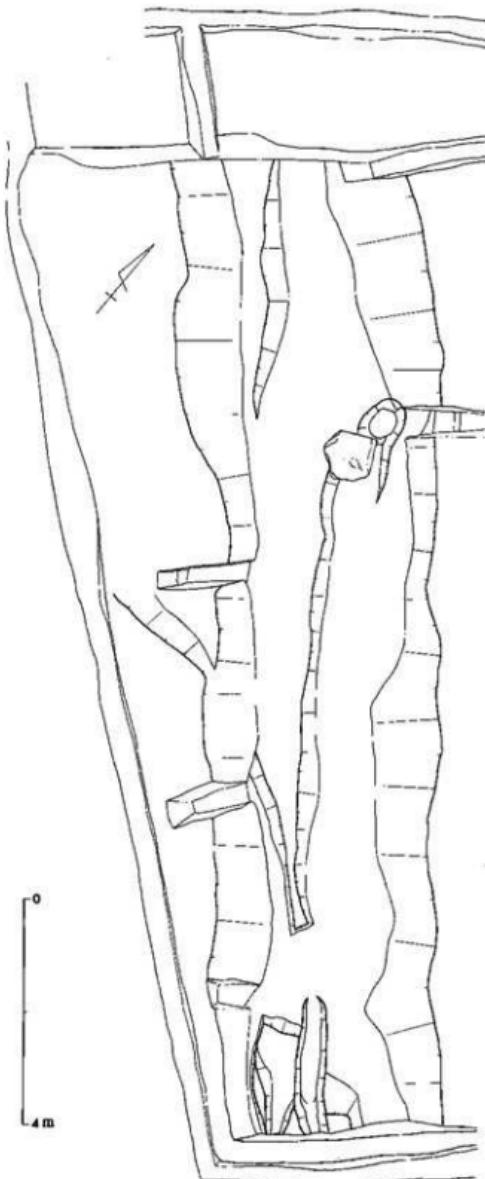


図16 SD 03実測図

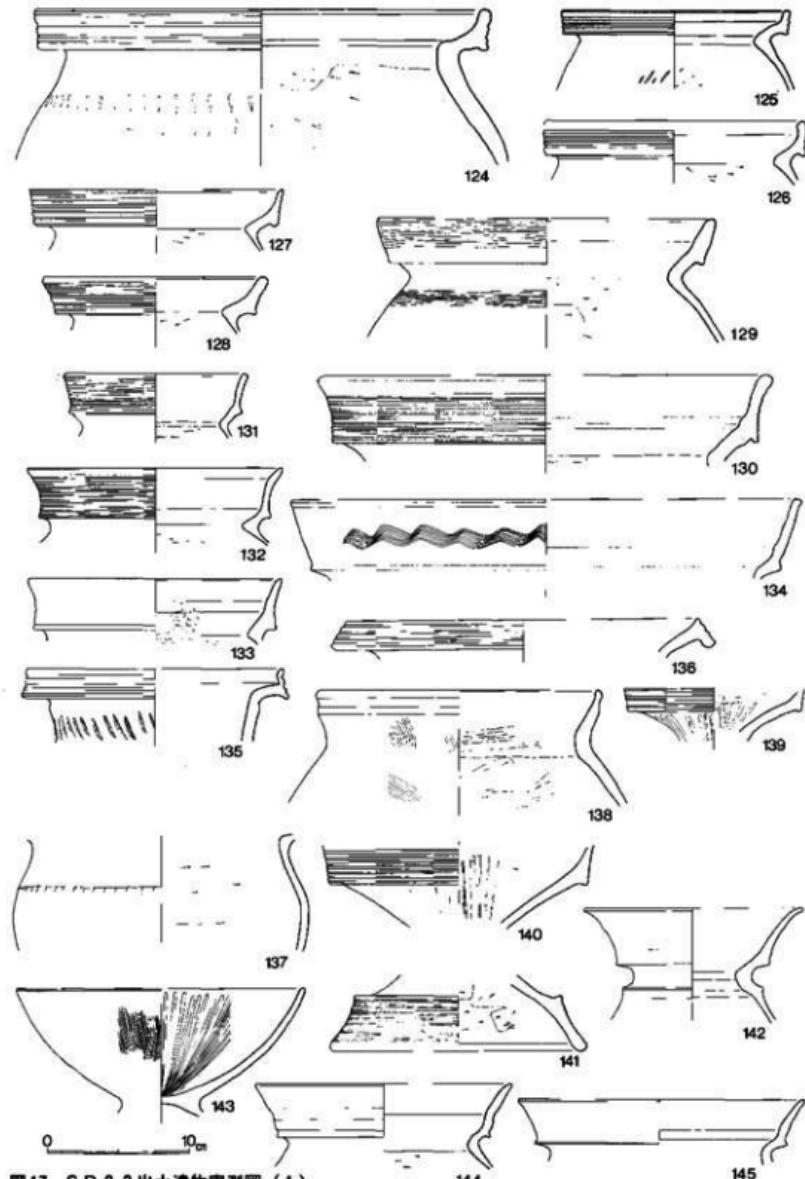


図17 SD 03出土遺物実測図(1)

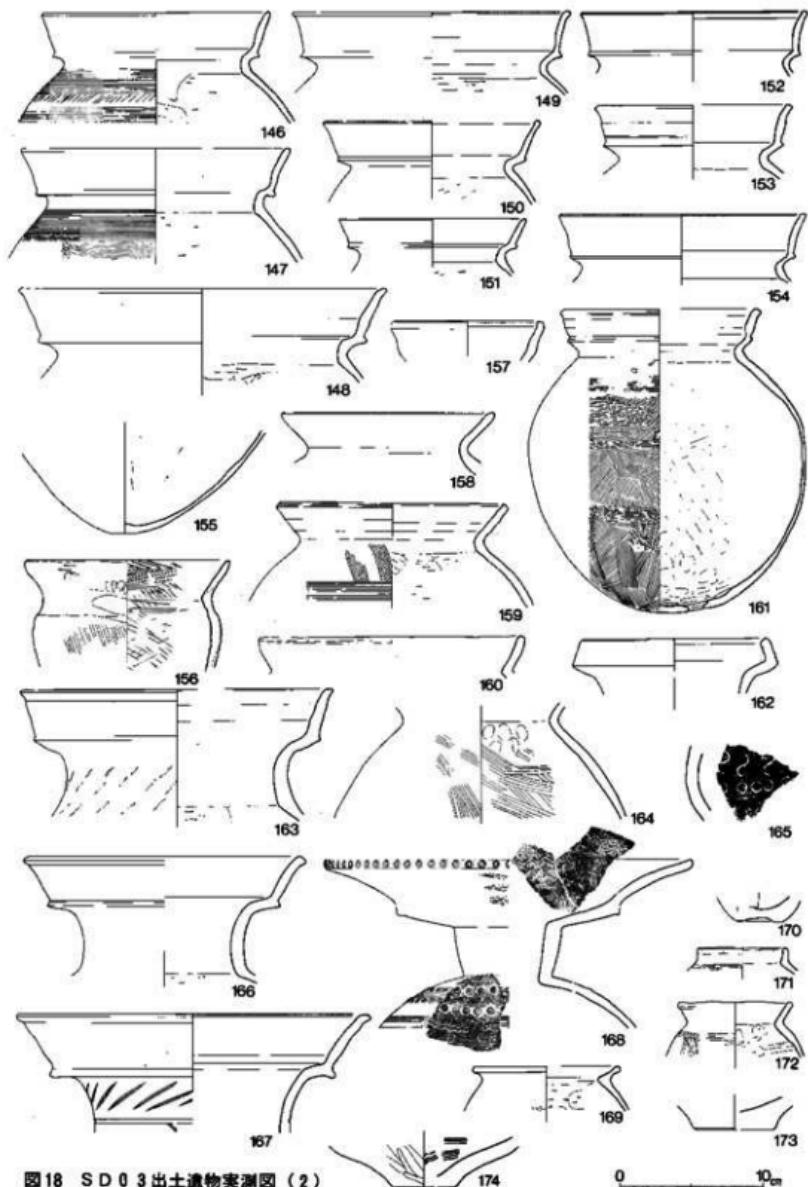


図18 SD03出土遺物実測図(2)

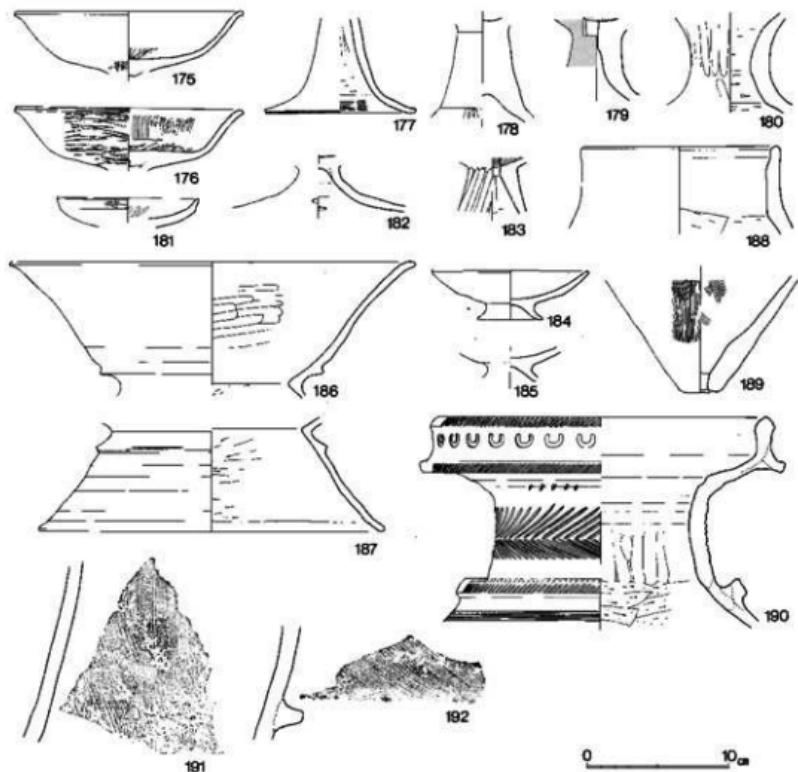


図19 SD 03 出土遺物実測図（3）

線状になる186、187がある。高杯175はゆるやかに立ち上がるやや小ぶりな杯部、176は底部からわずかながらも屈曲を経て立ち上がる杯部をもつ。177は脚部である。この他に高杯178は中実の、179、183は杯底部まで貫通する穿孔のあるもの、180は大形品の脚部である。その他に瓶形土器と考えられる188、低脚杯184、185、全形は不明だが、瓶形土器かと考えられる189がある。

### 吉備系遺物

SD02付近を中心に、吉備地方から搬入されたと考えられる遺物が出土している。193は臺の口縁部で、短く立ち上がる口縁部の外面にヘラによる平行沈線を7条施し、頸部にも同様の沈線がある。外面および口縁内面に赤色顔料を塗布する。194は193同様の臺の頸部である。縦方向のハケメを施

した後、ヘラによる平行沈線を描く。顔料の塗布はない。195も193同様の壺と考えられるが、頸部の沈線を欠く。外面および口縁内面に顔料を塗布する。196はかなり大型の壺で、肩部200と同一個体の可能性がある。外面に顔料を塗布する。197は大型の壺で、ゆるやかに開く口縁端部を下方に折り曲げ、その端面に4条の平行沈線を施す。頸部外面には縦、内面には横の粗いハケメを施す。顔料の塗布はない。198は直立に近い口縁部をもつ複合口縁壺と考えられ、内外面に顔料を塗布する。199は大きく開く壺口縁、200は大型の壺肩部である。

以上の遺物のうち、暗褐色から褐色の色調を呈し、金色の雲母や黒色の角閃石粒を含むという吉備系遺物の胎土をもつのは、193、196、197、199、200で、194、195、198は在地の土器と似た胎土である。

これら遺物のうち、197がH-2・3土器溜りから出土しており、この土器溜りとの関係も考えられるが、これも含め他の遺物はいずれもSD02付近から出土しており、水路上流部にこうした遺物を供献した墳墓が存在するものと考えられる。

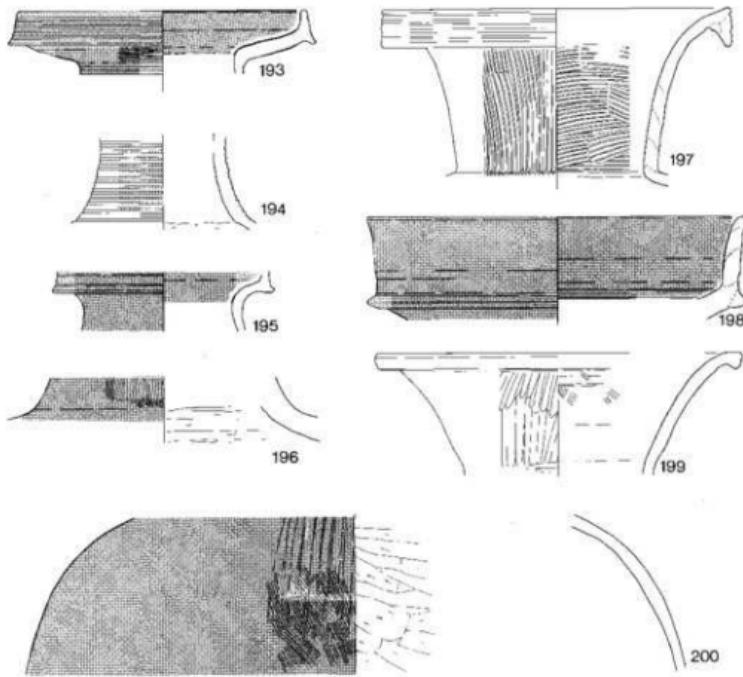


図20 吉備系土器実測図

0 10 cm

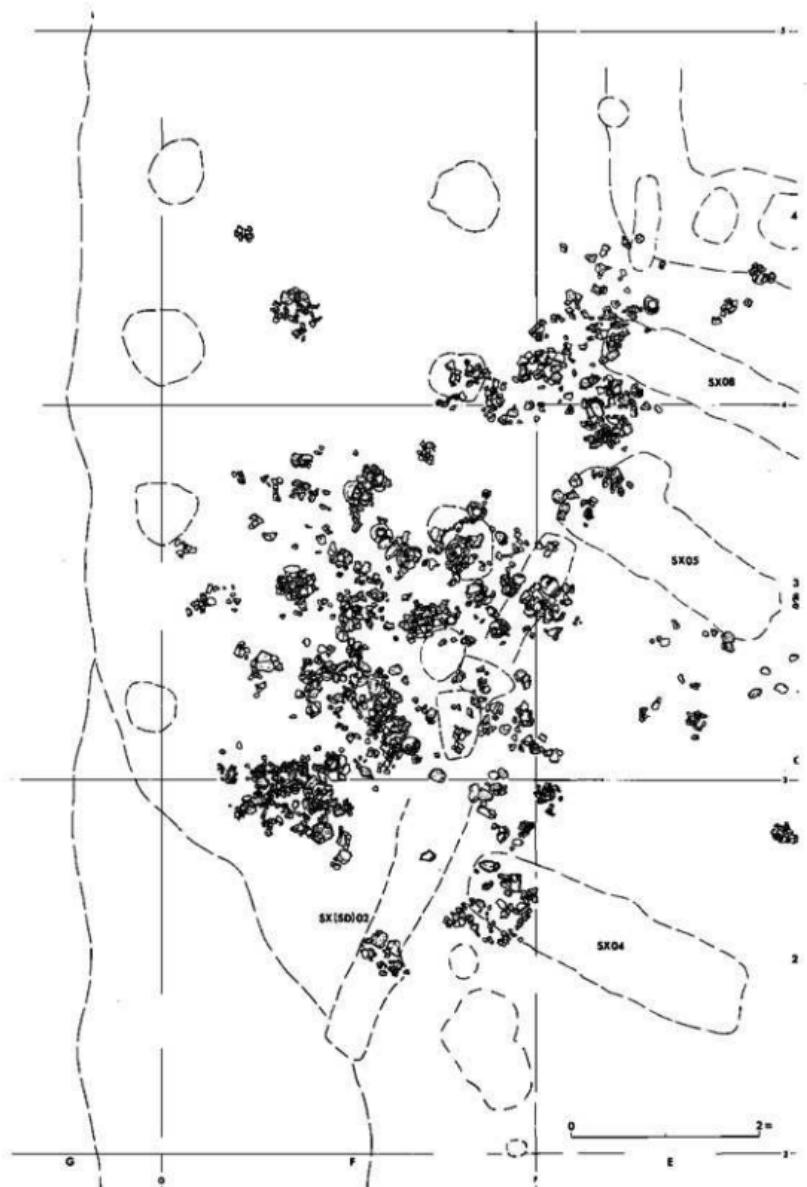


図21 土器満り出土状況平面図（1）F・E区

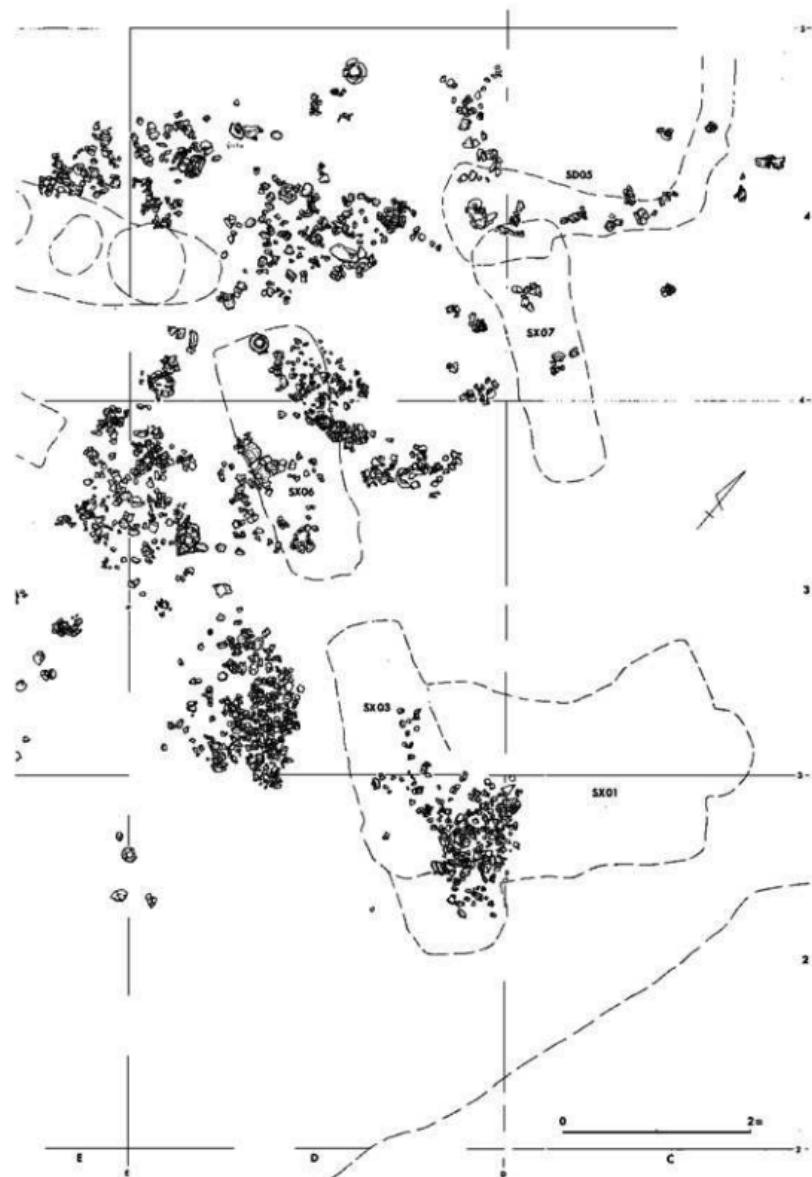


図22 土器滿り出土状況平面図（2）E～C区

## 土器溜り

調査区各地点から遺物包含層である黒褐色土内を中心に土器溜りが検出された。遺物は、調査区内に設けた4m区画の方眼を単位として検出し、さらにその中のグループごとに検番号を付けて取上げた。

土器溜りの遺物は、それぞれ下層で検出した木棺墓の上面に供えられたものと考えられるが、土器溜りと木棺墓の関係が明らかにできたものは少ない。よって、木棺墓との関係が明らかになった遺物群については木棺墓の説明の中で扱い、それ以外のものについては、土器溜りの資料として、その群ごとに説明する。包含層の黒褐色土の上面には、SD02、03を埋没させた洪水の際の礫を含む灰褐色土が覆っており、この際若干遺物に移動があった可能性が考えられた。

### S X 0 1 • 0 3

CD-2・3区で検出した。ここでは基盤層が比較的に高かった。二段掘りの墓壙をもつSX01と素掘りの墓壙のSX03が切りあって存在する。切り合い関係から、SX01がまず作られ、その後にSX03が掘られたことがわかっている。

SX01は二段掘り外側の墓壙が復元長3.5m、幅1.8m、内側の墓壙は、長さ2.8m、幅1.1mで、検出面からの墓壙の深さは1.1mである。墓壙は壙底の傾きから北東を頭位とする。主軸はE-41°-Nである。墓壙底南西端には、溝状の落ちこみがあり、壙内に組まれた木棺小口板の痕跡と考えられる。また、外側の墓壙北東端に円形の土坑があり、この中には石組みがあった。石組みはこの土坑中に立てられた柱のようなものを支えるようにも見えたが確証はない。

SX03の墓壙は、長さ2.8m、幅1.0mで、検出面からの墓壙の深さは1.0mである。墓壙は壙底の傾きから北西を頭位とする。主軸はW-37°-Nである。北西端に一段低い落ちこみがあり、南東端には、溝状の落ちこみがある。南東端のものは、この墓壙内に組まれた木棺の板の痕跡と考えられる。

SX03の上面には土器溜りがあり、弥生時代後期草田5～6期の遺物を中心とするが、一部に古墳時代初頭の草田7期の遺物201、204～206を混えており、これら遺物は後世の混入の可能性がある。この土器溜りの中には、かなりの量の炭が認められ、また、出土土器にも不自然な赤色を呈するものが多いことから、墓壙上面に供えた後、あるいは、墓壙上面での飲食を行った後、火を燃やして土器を破碎した可能性がある。

壙202、203は複合口縁部の稜はさほどの突出を見せず、口縁端部も丸く納めるなど、端部調整は行わない。肩部に間隔の狭い波状文、列点文をもつ。同様の特徴をもつ壙207は、口縁が内傾するもので、外面に赤色顔料を塗布している可能性がある。高杯208、209はゆるやかに広がる比較的大

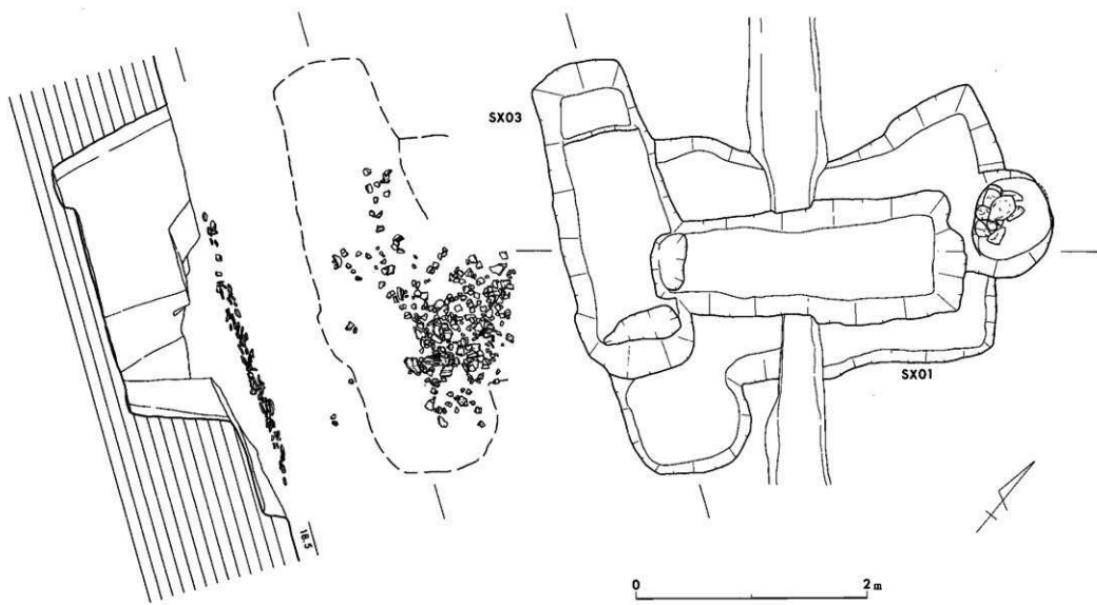


図23 SX01・03実測図

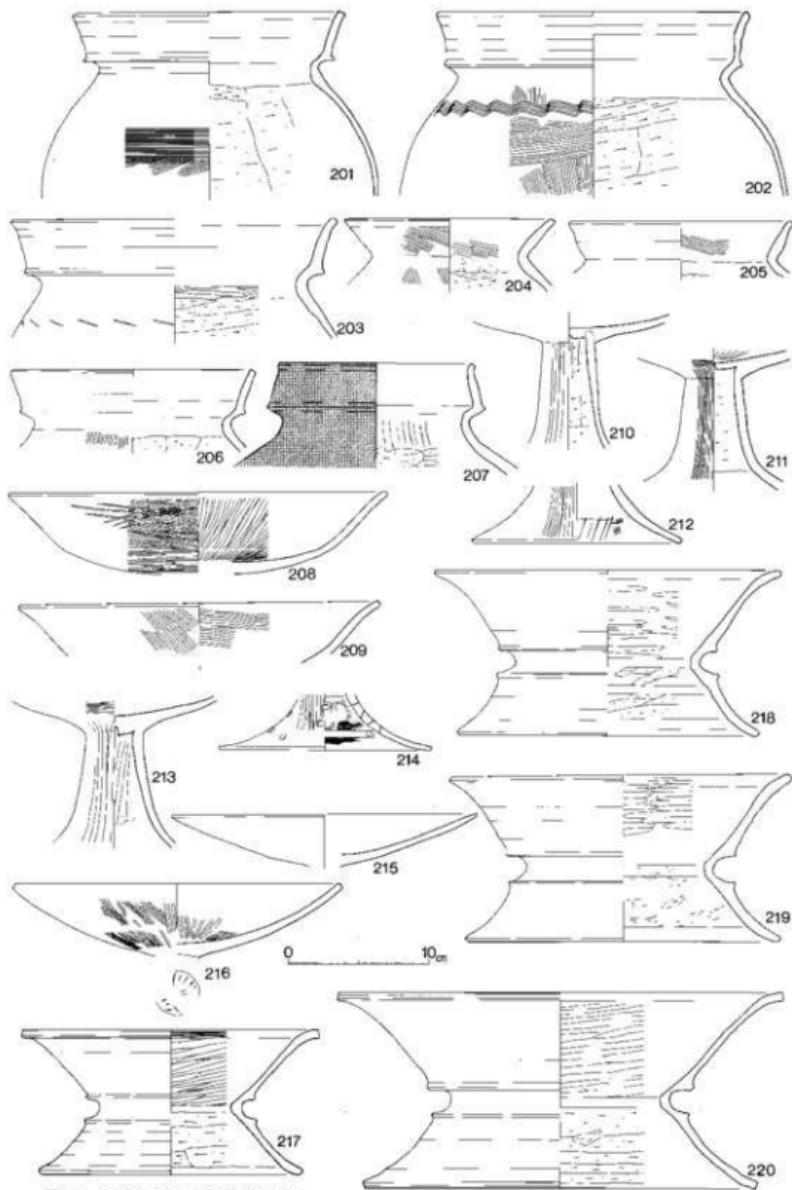


図24 SX03出土遺物実測図

きな杯部をもつもので、脚部210～213は円筒状の長い筒部からゆるやかに開く。脚据に多くの穿孔をもつ異形の214もある。低脚杯215、216は口径の大きな浅い杯部をもつ。216には脚部を接合した際のヘラ状工具による刺突痕が残っている。鼓形器台は筒部が縮約したもので、厚手の218、219、端部に平坦面を作り、大形の220、平坦面は作るがやや小形の217がある。

#### S X 0 4

EF-2区で検出した。SX04の墓壙は、長さ3.2m、幅0.9mで、検出面からの深さは0.8mである。墓壙はその幅の広がりから東を頭位とすると考えられる。主軸はE-14°-Nである。西端に一段のステップがある。

墓壙底面には木が残されている。この木は、長さ1.7m、太さ約5cmの丸太で、壙底のほぼ中央に主軸に沿うように置かれている。また、この木の東側にも、主軸と直交するように長さ0.5mの同様の丸太が置かれている。これらの木の使途は不明というほかない。

また、土層図に見るよう、墓壙上面から壙底の木に届くまでピットが掘り込まれている。このピット内には粘質の黒褐色土が充満しており、SX01北東端の土坑同様、柱のようなものが立てられていた可能性がある。

この墓壙に明らかに伴う遺物はない。

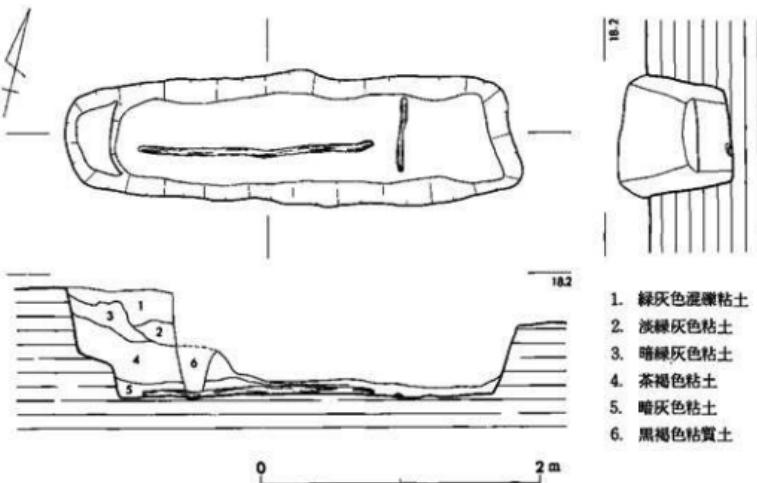


図25 SX04実測図

## S X 0 5

E-3区で検出した。墓壙は長さ2.5m、幅0.8mで、検出面からの深さは0.6mである。壙底の傾きから西を頭位と考えられる。主軸はW-6°-Sである。

横断セクションでは壙内両側に棺の板の痕跡が土層で確認でき、墓壙底には、棺の板の痕跡が残っている。棺北辺の棺痕跡は底にはないが、横断セクションの土層で観察できた。これによれば、壙内に組まれた棺は、遺体頭位の方向に若干の余地を残した副室をもっていたものと考えられる。また、棺東端では、小口板の痕跡は斜めになっている。これから復元できる棺の内法は、長さ1.4~1.6m、幅0.5mである。墓壙内両端近くには、床面から浮いた状態で若干の石がある。棺東端上部にある石は、小口板を支えていたものと考えられる。また、壙底西側では、棺長手板と小口板の痕跡が十文字になっており、それぞれの板に切り込みをいれて壙内で組み合わされるものであった。

墓壙北西に接して、辺0.5mの隅丸方形のピットがある。深さは約0.4mである。墓壙内と同様の土がつまており、壙外に設けられた副室と考えられる。

この墓壙に明らかに伴う遺物はなかった。

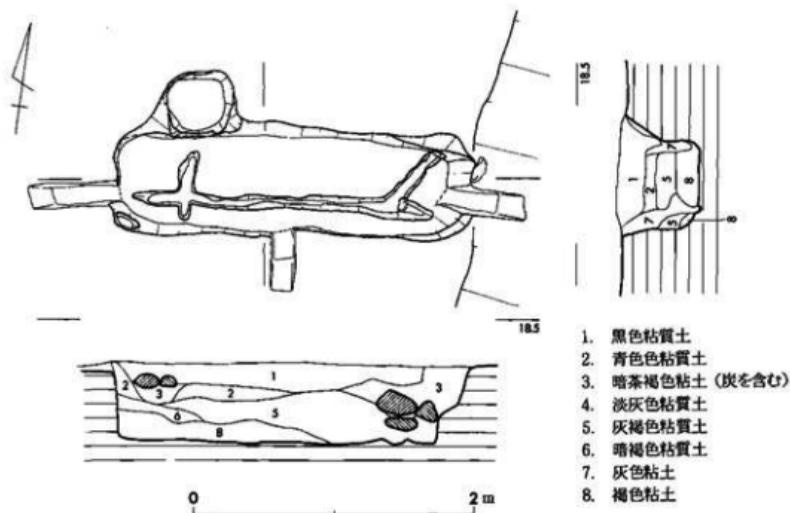


図26 S X 0 5 実測図

## S X 0 6

D-3・4区で検出した。墓壙上面に土器滲りがあり、これが墓壙に伴うものと考えた。この土器滲りと墓壙検出面とは約0.3mの高低差があるので、土器滲り検出面から墓壙が掘り込まれているとすれば、二段掘りの墓壙であった可能性がある。

検出した墓壙は、長さ2.7m、幅1.1mで、検出面からの墓壙の深さは0.7mである。墓壙は壙底の傾きおよび幅の広がりから北西を頭位とすると考えられ、主軸はW-33°-Nである。

墓壙底北西には、溝状の落ちこみがあり、壙内に組まれた木棺の板の痕跡と考えられる。木棺の小口板および長手板の痕跡であろう。南東部では検出できなかった。壙底に1個の石が落ちこんでいる。

また、北西端部と南東寄りには底まで届くピットがあり、SX01、04同様、柱のようなものが立てられていた可能性がある。

墓壙上面の土器滲りは、大きくは3グループに別れる。このうち2点ある鼓形器台は、水平の状態を保っており、ほかの土器もほぼ原位置にあるものと考えられた。ただ、墓壙北西端部にあった器台(235)は、他の土器よりも低い位置で出土しており、その位置は墓壙内にあった柱穴状のピットの場所と一致しており、ピットに立てられた柱のようなものが腐った後、その穴へ転落したような状況であり、注目された。

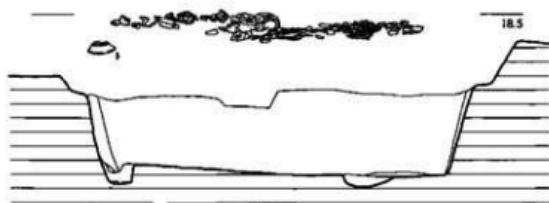
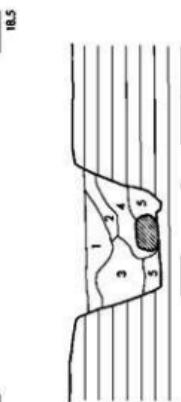
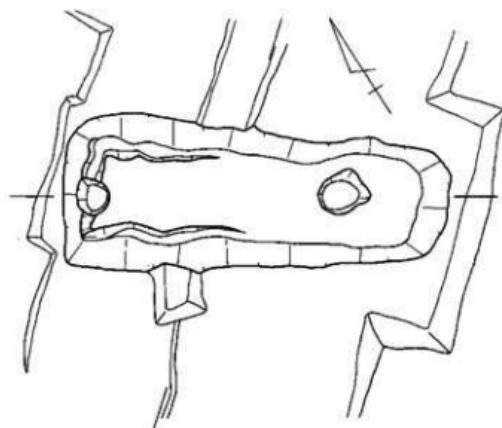
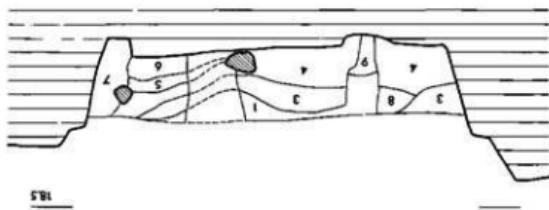
出土遺物は、草田6期のもので、甕、高杯、小形丸底鉢、鼓形器台がある。

甕221～228は、口縁端部を外方に折り曲げるものの、肩部に間隔の広い列点文ないし、波頂間の広い波形文を施すものが多い。体部下半を細かいハケ原体で仕上げた後、体部最大径以上に粗い横ハケを施して仕上げている。229は短く内傾して立ち上がる口縁部をもち、ごくかすかな平底をとどめる。出雲地方では見かけない器形である。230はやや大形の甕で、高く立ち上がる口縁部は、端部をなでて平坦面を作っている。平底をもつ。高杯231は、小ぶりだがやや深い杯部に、屈曲して開く脚部が付くもので、外面及び杯部内面には赤色顔料を塗布している。胎土に含まれる砂粒は在地のものと異なり、撒入されたもの可能性がある。232は小形丸底鉢で、さほどの屈曲のない短い口縁部に、やや深めの体部が接続している。高杯233は杯底部からゆるやかなカーブを経て立ち上がる口縁部をもつもの。底面に脚接合時の深い刺突痕がある。鼓形器台234、235は上台、下台間がかなり縮約したものである。

このうち高杯231、小形丸底鉢232は、近畿圏内式のものと考えられる器種である。

## S X 0 7

C-3・4区で検出した。墓壙は、長さ2.8m、幅0.8mで、検出面からの深さは0.6～0.7mであ



1. 淡黒色粘質土
2. 緑色砂礫土
3. 淡緑灰色砂礫土
4. 黒色粘質土
5. 暗緑色粘質土
6. 緑色粘質土
7. 灰茶褐色粘質土
8. 混雑緑灰色粘質土
9. 黒色砂質粘土

図27 SX06実測図

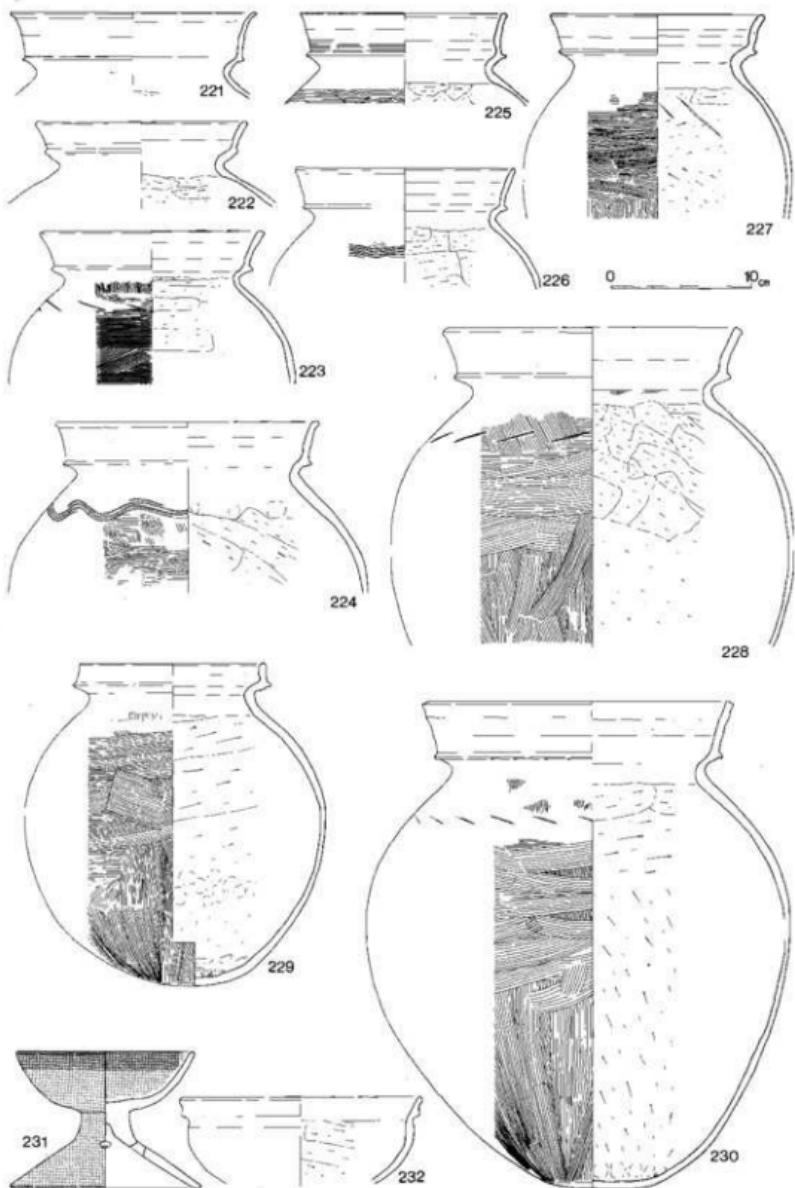


图28 SX06出土遺物実測図(1)

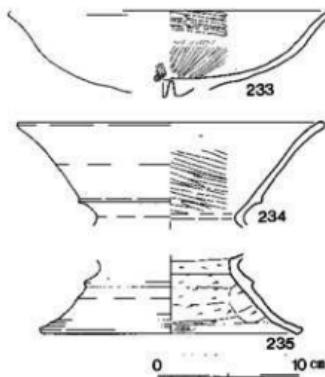


図29 SX06出土遺物実測図（2）

る。墓壙は壙底の傾きから北西を頭位とし、主軸はW-33°-Nである。

隣接するSX06と頭位方向が一致しており、ほぼ同時期に作られたものであることが想定できる。また、墓壙北西は、SD05によって切られており、この溝が掘られるときにはすでにSX07は存在していたこともわかっている。

墓壙底の両端はそれぞれ一段深くなっており、両端に副室が設けられていたものと考えられる。そのため、本来の遺体を埋葬する部分は0.9mと短い。小児を埋葬したものか。

壙内上部には2個の石が落ちこんだ状態で検出されており、標石の可能性がある。

この墓壙に明らかに伴う遺物はない。

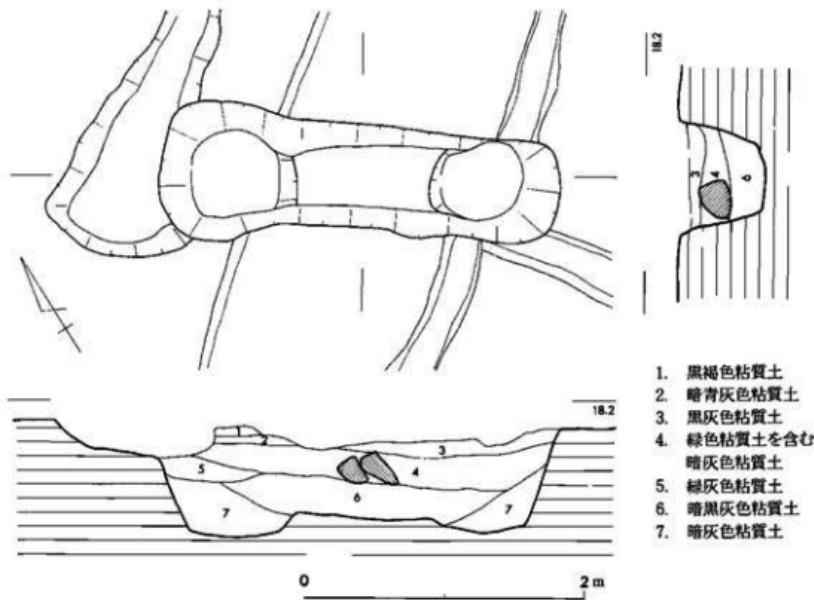


図30 SX07実測図

### S X 0 8

E-3・4区で検出した。墓壙は長さ2.7m、幅0.6mで、検出面からの墓壙の深さは0.5~0.6mである。墓壙は壙底の傾きから東を頭位とすると考えられる。主軸はE-14°-Nである。

墓壙西端に平面円形のピットが付属しており、墓壙底よりも若干低くなっている。墓壙に伴う副室と考えられる。墓壙底東側には、溝が残り、壙内に組まれた木棺の痕跡であろう。墓壙横断セクションでも両壁に沿って立ち上がる土層があり、これも棺の痕跡を示すものと考えられる。

また、床面には石が一つあり、遺体の枕として使われたもの可能性がある。

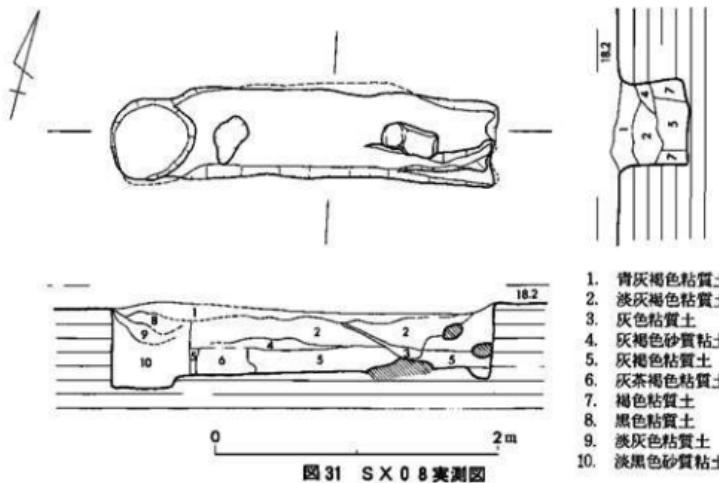


図31 SX 08 実測図

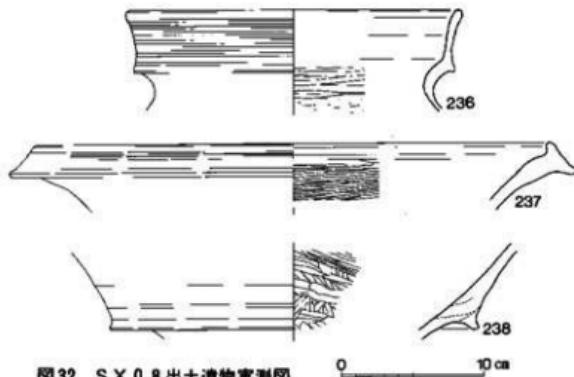


図32 SX 08 出土遺物実測図

墓壙西端のピットからは、草田3期の遺物が出土しており、この墳墓群では比較的古い時期のものと考えられる。

遺物には甕、器台、鼓形器台がある。甕236は複合口縁のものであるが、外面に貝殻腹縁2単位の

平行線文を施し、口縁内面にはヘラミガキが認められる。器台237は大形のもので、鼓形ではない器台であろう。238は大形の鼓形器台で、上台外面には平行線などの装飾をもたない。伴う遺物がなく、時期不明のSX05も、このSX08と想定される頭位方向は全く逆であるが、向きをそろえて作られており、同一時期が考えられる。

### S X 0 9

調査区北西隅H'-4・5区で検出した。その上面にはH-5区土器滴りがあったが、その土器と墓壙内から出土した土器には時期差があり、特にその土器滴りとの関連はないものと考えた。

ちょうど調査区西辺に沿って検出されたため、全容はうかがうことができなかつた。墓壙は調査区内では約6mを測り、さらに調査区外に伸びている。中央付近で横断面を確認しており、ここでの幅は1.0mである。底はゆるやかなカーブを描く平らな底となっているが、若干の凹凸がある。検出面からの墓壙の深さは0.5mである。墓壙は壙底の傾きから南東を頭位とすると考えられる。主軸はS-45°-Eである。

これによれば長い木棺が納められていたものと考えられる。横断面を確認した墓壙中ほどの地点では、墓壙側壁に沿って杭が1本打ち込まれており、壙中に組まれた木棺を固定していたものの可能性があるが、棺材の痕跡などは検出できなかつた。

墓壙のほかに周辺では数多くのピットを検出している。この墓壙に伴うものもある可能性がある。また、墓壙によって切られているものもあり、さらにはかの遺構も重複している。

墓壙内から土器が出土している。239は、径34cmにも復元できる大形の鼓形器台で、上台部下端に貝殻腹縁による密接した2段の列点文がある。内面にはヘラミガキがあるようだ。240もやはり大形の高杯で、精良な粘土を使用している。脚部に3方向の円形の穿孔がある。杯底面には放射状のヘラミガキ、脚外面にも丁寧なヘラミガキが残る。

これら遺物は、草田4期のもので、この遺物をともなうSX09は、この墳墓群では比較的古い時期のものである。

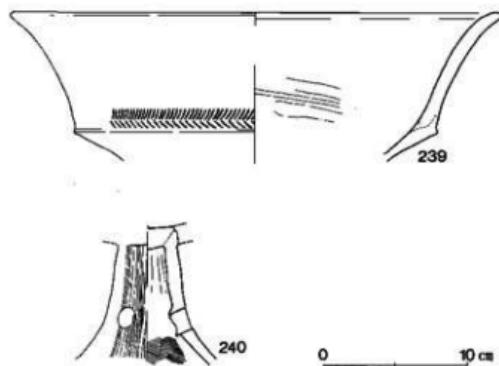


図33 SX09出土遺物実測図

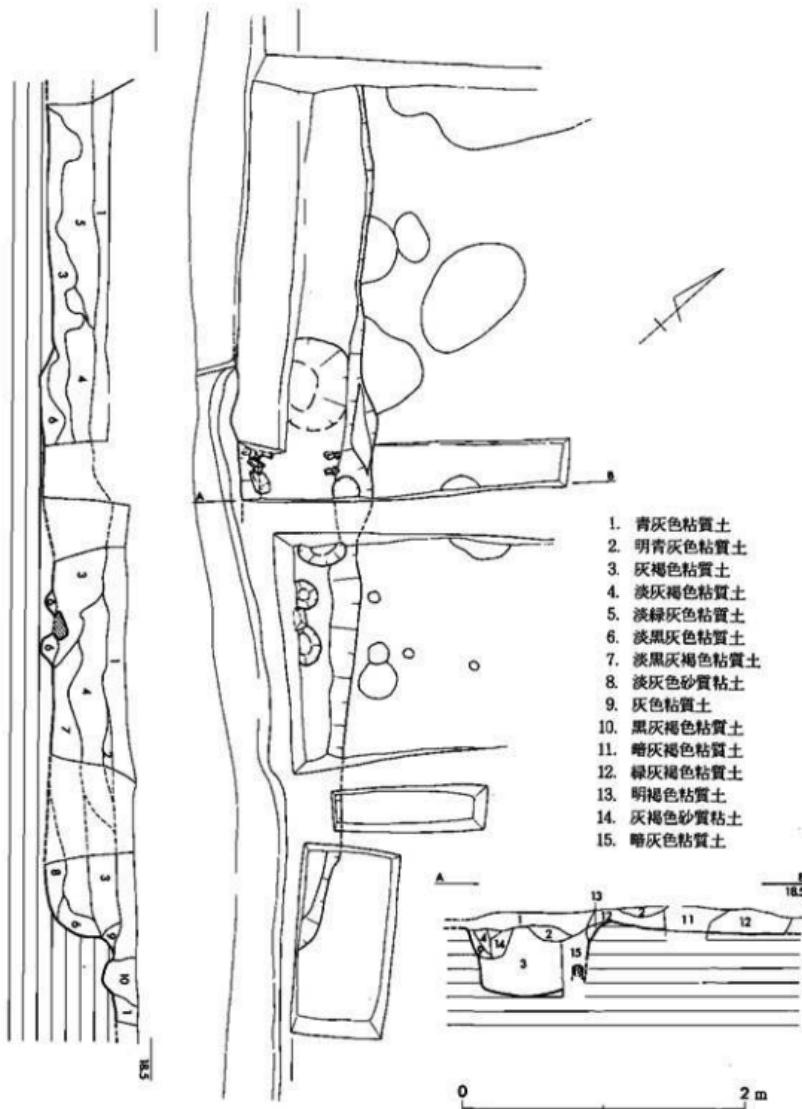


图 34 S X 09 実測図

## S X 1 0

調査区北東部のA-5区で検出した。黄褐色砂礫土に掘り込まれた土坑に壺が1個体分、正立するように埋められており、壺棺と考えられる。土坑は上面のさしわたし0.45m、深さ0.25mを測る。坑内には石があり、こうした石で壺を固定していたものだろう。壺は上部からの土圧によってつぶれた状態で出土している。

この壺棺は、他の遺構より高いレベルから出土しており、壺棺埋納坑の底が他の遺構を検出した面に相当する。土器漏水がかなり上面で検出されていることもあわせ考えると、遺構検出面は、本来の遺構が掘り込まれた面より、かなり下である可能性を示した。

この壺棺241は直立に近い比較的高い口縁部、やや綾長の球形の体部をもったもので、口径18cm、器高37cm、体部最大径32cmである。口縁部は端部に狭い平坦面を作り、外面にはナデによる軽いアクセントがある。体部外面には細かいハケメが施され、内面はヘラケズリされている。この土器の胎土には摩耗した円礫を含み、在地のものとは異なる。撒入されたもののようにある。

壺棺によく見られる底部穿孔などはみられない。

この遺物は、体部の球形化などの特徴から、草田7期に含まれるものと考えておきたい。

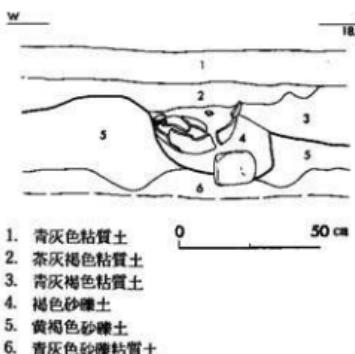


図35 S X 1 0 出土状況断面図 (1/20)

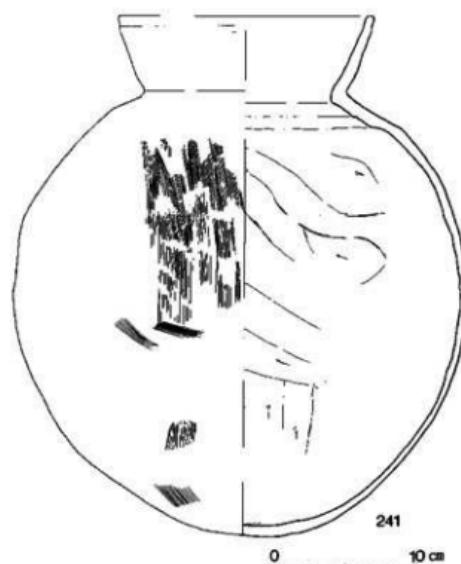


図36 S X 1 0 出土遺物実測図

## S B 0 1

FG-3・4区で検出した。桁行3間、梁間1間の掘立柱建物である。主軸をN-37°-Wの北西にとる。規模は桁行5.8m、梁間3.2mで、桁行の柱穴の間隔は1.8~2.0m、梁間の柱穴の間隔は3.2mである。柱穴の検出面からの深さは0.5~0.7mである。

柱穴内にはいずれも黒褐色の粘質土、灰色粘質土がつまっており、これらには炭がおびただしく含まれていた。柱の痕跡や、抜取り痕などは確認できなかった。柱穴掘り方の平面形は不整な円形である。

この柱穴からは土器が出土しており、西列の南から2番目の柱穴から甕242、東側の北から1番目の柱穴から低脚杯244、2番目の柱穴から鉢形器台243が出土している。これらは草田4期の遺物で、この建物上層で見つかっているF-3区土器溜り出土遺物（草田7期）より古く、土器溜りに先行してこのような掘立柱建物が建てられていたと考えられる。

複合口縁の甕242は、薄く引き出したような口縁部をもち、端部は丸くおさめる。複合口縁部の稜の突出度は低い。内外面を強いヨコナデで仕上げる。鉢形器台243は、比較的長い筒部をもち、残存する脚台部も比較的高く、カーブして開く。外面の加飾はない。低脚杯244はしっかりとふんばる脚部、深い杯部をもつ、やや厚手の小ぶりなものである。内外面を丁寧に磨いている。

## S B 0 2

調査区東寄りのBC-5区で検出した。竪穴住居で、3.0×3.5mの隅丸方形のプランを呈する。検出面からの遺構の深さは15cmである。この周辺一帯は炭がかなりの濃度で散布しており、遺構発

見の手立てとなった。住居址四隅はほぼ東西南北を向く。

現状保存の方向を模索しはじめた調査の最終段階で検出しており、柱穴などと考えられるピットは完掘していない。

床面のほぼ中央部に焼土があり、炉と考えられる。セクションで観察すると焼土の分布範囲より狭い、さわわたし約60cmのピットがあり、この炉は床面を掘りくぼめるものであったと考えられる。北および西の隅で柱穴と考えられるピットを確認している。その他にもピットがある。

また、壁沿いには部分的ではあるが幅15cm、深さ15cmの溝が検出されている。これは整体となる板材を受けるための溝と考えられる。

この住居址の床面でSD05の続きを検出した。つまり、

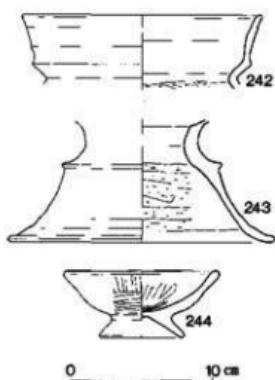


図37 S B 0 1出土遺物実測図

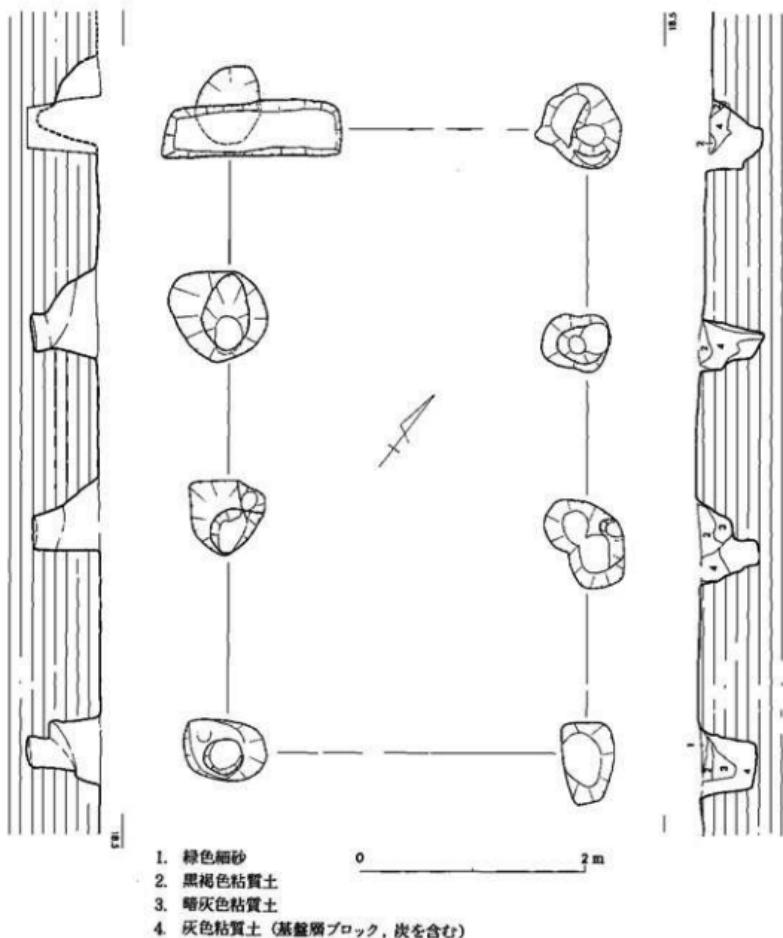


図38 SB01実測図 (1/50)

このSB02は、SD05を切って作られた遺構と言える。

この住居址覆土中から検出した土器は、草田7期のもので、甕245は比較的厚い口縁部をもち、端部はなでて、狭いながらも平坦面としている。高杯杯部246はやや厚手のもので、杯部底からゆるやかに立ち上がっている。壺口縁247は、端部近くに複合口縁状の稜をもつ小形品である。

### SK13~17

DE-4区で検出した。鍵の手に曲がる浅い溝内にピットが掘り込まれている。最も東のSK13は平面円形のプランで径85cm、検出面からの深さ45cmを測る。SK14は長径65cmの平面椭円形、検出面からの深さは30cm、SK15は径60cm、検出面からの深さは20cmである。SK16は長径60cmの椭円形、検出面からの深さは25cm、SK17は長さ1m、幅25cmの長い土坑で、検出面からの深さは20cmであるが、さらに部分的に深いピットがある。遺構の性格など明らかにできなかった。

これらの遺構に明らかに伴う遺物はない。

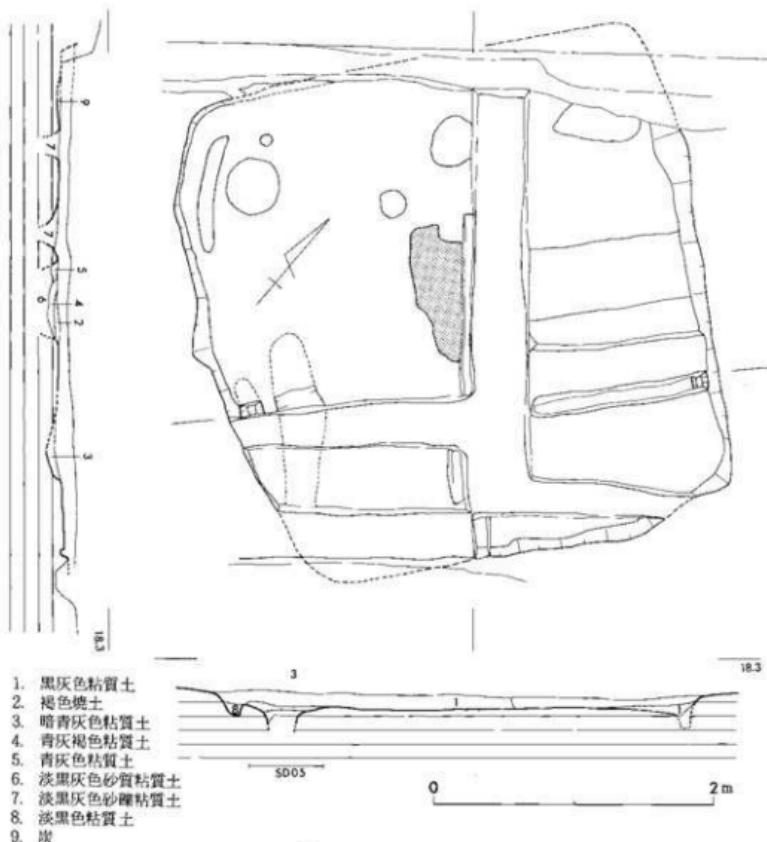


図39 SB02実測図

## SD 05

C-4・5、D-4 区で検出した。鍵の手に曲がる浅い溝で、延長は約7mである。溝南西端は広がって深い土坑状になる。この土坑部分は長辺1.2m、短辺1.0m、検出面からの深さは25cmである。溝部分は幅60~20cm、深さ10cmである。遺構内には黒色粘質土、淡黒色粘質土が堆積している。

遺構の性格などは明らかにできなかったが、この溝の土坑部分はSX07を切っており、溝部分はSB02によって切られるという関係にある。また、この溝内から出土した土器は、草田6期のもので、CD-4 区土器溜り資料と多くが接合し、両者は密接な関係があるものと考えられる。

## CD-4 区土器溜り（図43~47）

調査区中ほどで検出した土器溜りで、近畿系の遺物を含むなど、注目される土器溜りである。

この土器溜り出土の資料には、在地の甕、壺、高杯、鼓形器台のはかに、搬入されたと考えられる近畿系の甕、壺および瓦質土器がある。草田6期の標識となる遺物群である。

甕口縁部248~270は、比較的高く、やや厚手の口縁をもち、その端部にはあまり端部調整を行わず、端部をわずかに外方へ折り曲げる手法がみられる。複合口縁部の稜は、比較的外方へ突出する。肩部には文様をもたないものが多く、文様があるものは、大きく間の開く列点文ないし波頂の広い波状文を施す。全形のわかる甕271では、比較的高い口縁部は端部をかすかに折り曲げ、底部にはかすかな平底をとどめる。肩部から体部2/3付近まで横方向の粗いハケメを施す。272はやや厚手の口縁部をもつもので、複合口縁部の稜はさほどの突出はみせない。底部にはやはりかすかな平底をとどめる。肩部には粗いわずかな波打ちのある平行線文がある。271と類似する273~275、277~280はほぼ同様の口縁部をもち、273では肩部に幅の広い特徴的な粗いハケメ、275は肩部に雑な欽杉状の刺突文をもっている。大形の甕276は直立に近い口縁部をもち、その端部には平坦面を作っている。肩部にはハケ原体と考えられる薄い板による刺突文がめぐる。壺286、289は高くあまり開かない口縁部をもち、口縁端部ではさほどの調整は行わない。287は高く、かなり開く口縁をもち、その端部は外方に折り曲げている。

高杯290は大きく開く浅い杯部をもち、その端部はかすかに外に折り曲げている。291は底部に脚接合時の刺突痕をとどめるものである。脚部292、293は長い筒部から開く据部をもっている。鼓形器台297~305は上台、下台間が縮約したもので、筒部は痕跡化し、内面が稜に近づいたものである。

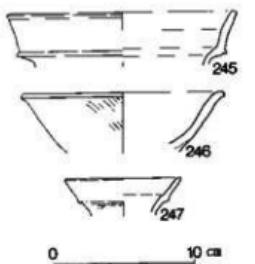


図40 SB 02出土遺物実測図

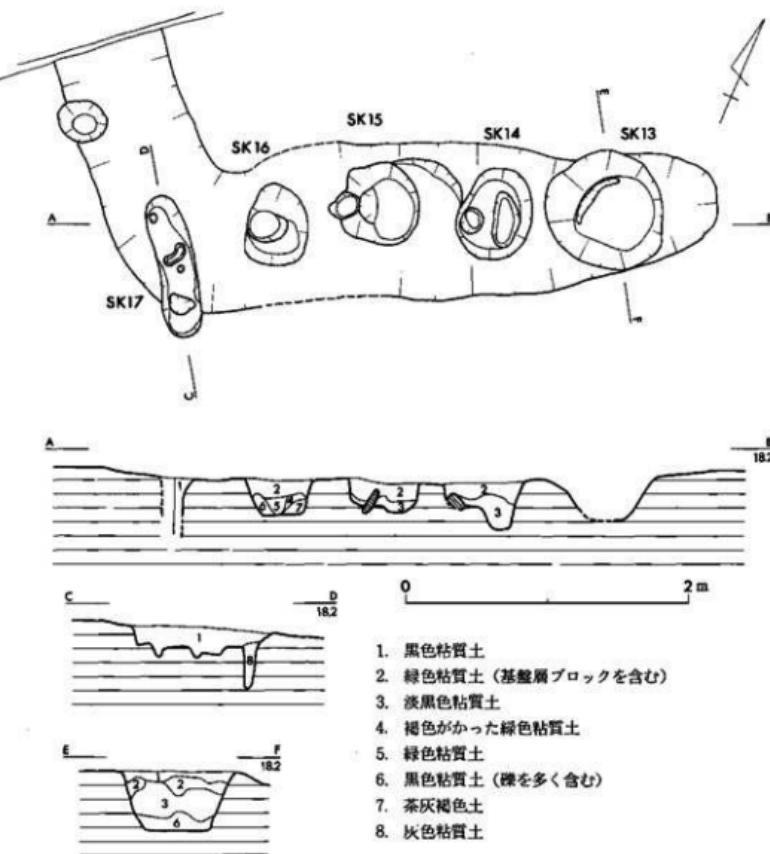


図 41 SK 13~17 実測図

300の下台内面には2本線のヘラ記号がある。

単純口縁の甕281~283は外面にタタキメをとどめるもので、在地の土器と異なる胎土、焼上がりを呈しており、近畿地方からの搬入品と考えられる。281は体部外面に水平のタタキ、体部内面はヘラケズリの後なでている。282は体部外面と口縁の一部に右上がりのタタキ、体部内面はヘラケズリを施す。283はごく薄いつくりのもので、口縁外面にはヨコナデ、内面にはヨコハケ、体部外面上には右上がりの細かいタタキのちハケでなでている。体部内面にはヘラケズリの痕跡をとどめ

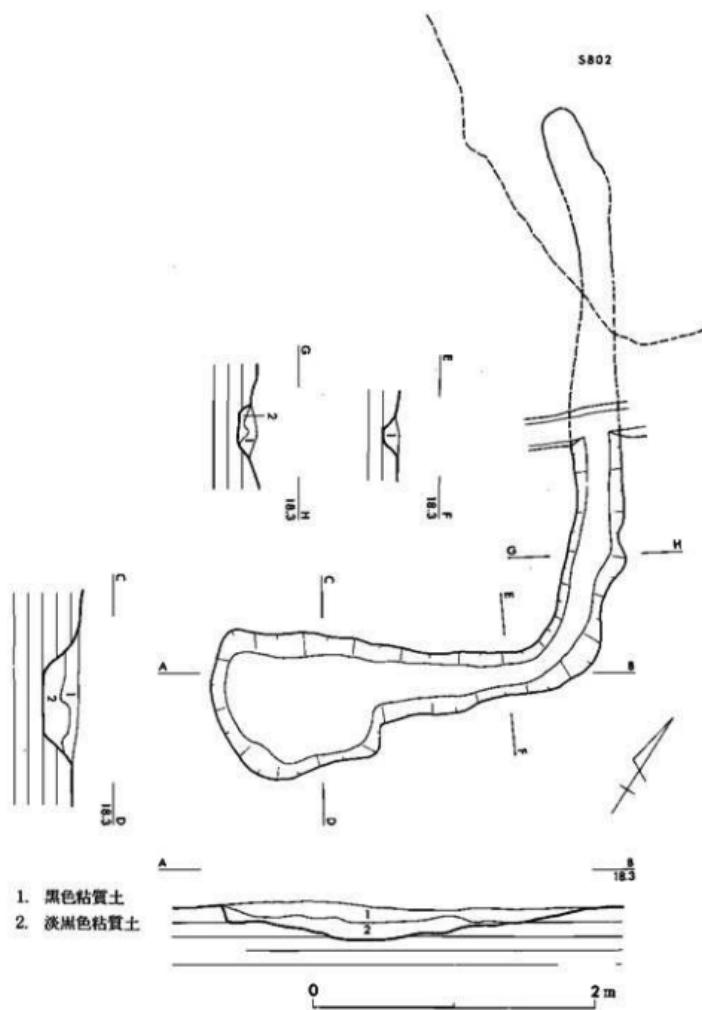


图 42 SD 05 実測図

る。これのみ暗褐色を呈し、河内産の庄内甕とえられる。285はやはり単純口縁の甕で、外面は丁寧になでられているが、多面体状に平坦面が連続しており、おそらくタタキによって成形されたものと考えられる。底部にはかすかな平底をとどめる。

瓦質土器284は、半球形を呈する体部の対向する位置に1対の把手を付けたものである。把手は平面長方形で、中央に径0.9cmの丸い穿孔がある。外面には辺2~3mmの格子状の細かいタタキメがのこり、内面にはこれに対応する當具の痕跡が凹面になって残っている。把手上下の体部外面にはヘラ描きの沈線がめぐらしている。把手は体部に穿孔した穴に挿入して接合される。外面は灰色を呈し、軟質である。この土器は、朝鮮半島製のものである可能性が高い。<sup>15)</sup>

単純口縁の壺288は、やや高く外反する口縁をもつ。扁平な体部はタタキで成形されるが、その後丁寧に磨かれ、光沢をもっている。底部付近の外面はヘラケズリとハケメが残り、底部はかすかな平底である。頸部から肩部にかけての内面は口縁接合時の指頭圧痕をとどめ、以下は途中で向きをかえるハケメとなり、分割成形を示す。この他に直口壺294、小形丸底鉢295、鉢296がある。

306はヤスと考えられる鉄製品で、土器溜り中から出土した。逆刺のある先端部が2本、柄に取り付ける四角柱の茎部が1本組み合って、ヤスを構成していたものと考えられる。しかし、これらは折損しており、直接の接点はない。先端部は2本とも断面多角柱状を呈する。この部分の長さはそれぞれ11.5cm、10.5cm、茎部は残存長15.7cm、太さは0.9~0.5cmである。

#### DE-3区土器溜り（図48、49）

調査区中ほどで検出した土器溜りで、甕、高杯、低脚杯、器台、鼓形器台からなる。草田6期の遺物である。

複合口縁の甕307は、比較的高い口縁部をもち、その端部は丸くおさめ、かすかに内側に折り曲げる。体部は倒卵形を呈し、底部は尖り底となっている。肩部は強いヨコなでによりくぼむ。複合口縁の甕308~312、314~317、319~322も比較的高い口縁をもつもので、その端部は外方へ折り曲げている。肩部には太い横方向のハケメを留め、間の広い列点文、波頂間の広い波状文をもつていて。313は単純口縁の甕で、口縁部は大きく外反する。近畿庄内式の器形であるが、胎土は在地のものと区別できない。318は複合口縁の甕であるが、内傾する低い口縁部をもつものである。

高杯323は厚手の杯部で、内外面とも磨いている。低脚杯の可能性もある。324は小形のやや深い杯部に中実の脚部が接合するものである。高杯325はゆるやかなカーブをもって立ち上がるやや深い杯部をもち、中実の脚部が接合する。外面および杯部内面には赤色顔料が塗布されている。326は大きく開く低い脚部で、4方向の円形の透し穴がある。小ぶりなやや深い杯部が付くものと考えられる。327は山陰地方通有の円筒形の脚部で、ゆるやかに開く。低脚杯328はやや深い杯部をもつ。

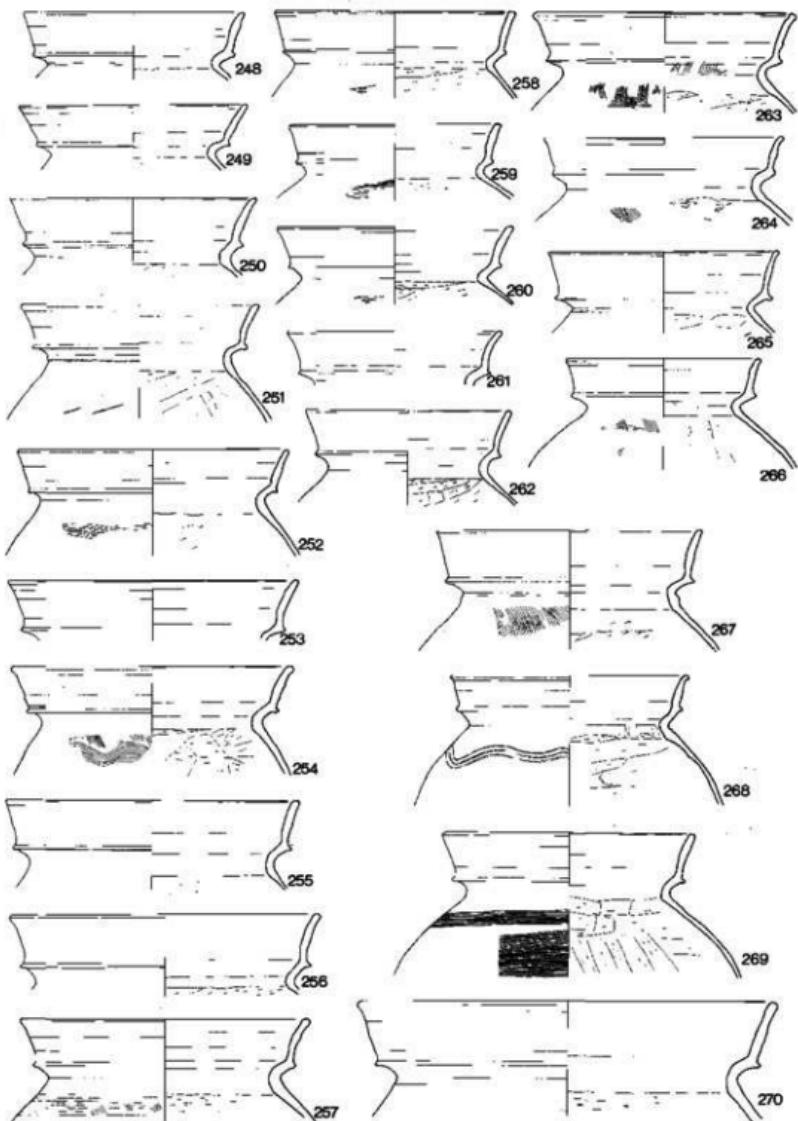


図43 CD-4区出土遺物実測図(1)

0 10cm

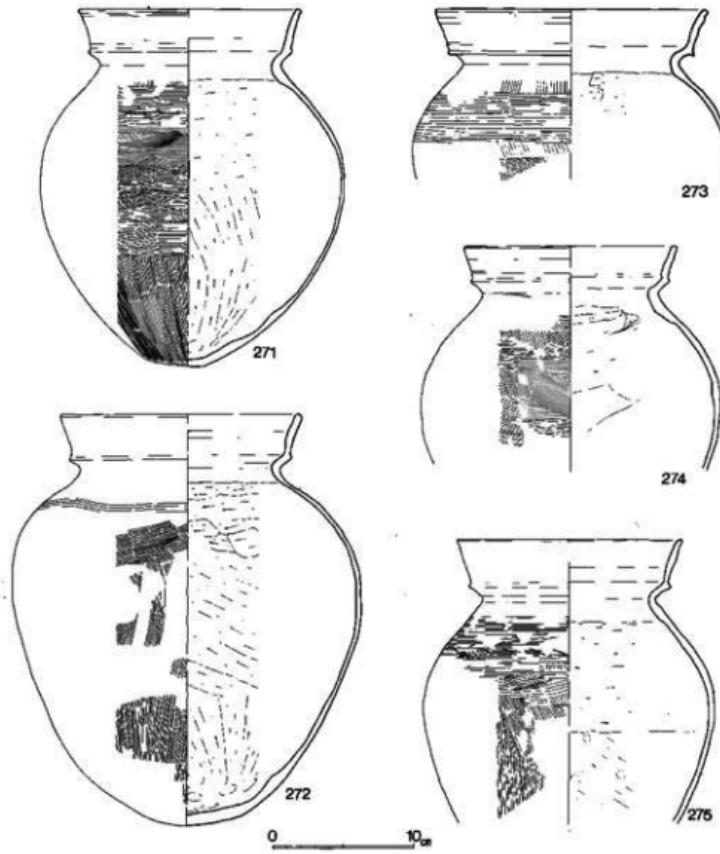


図44 CD-4区出土遺物実測図(2)

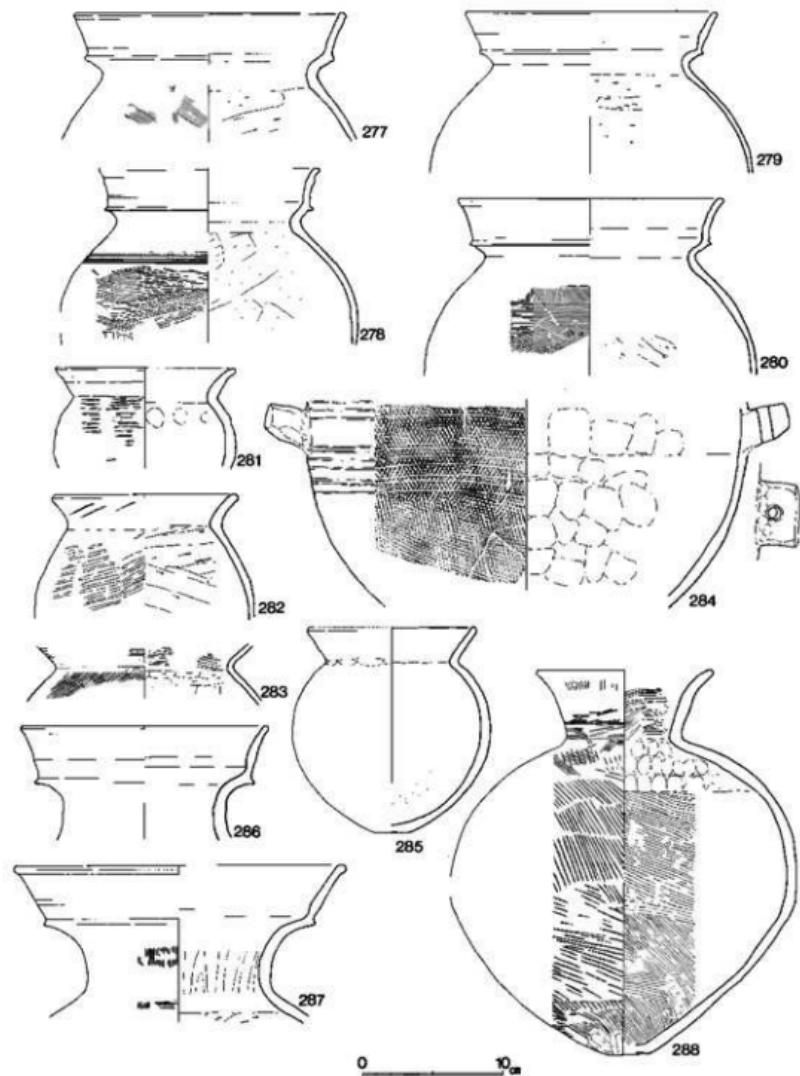


図45 CD-4区出土遺物変測図(3)

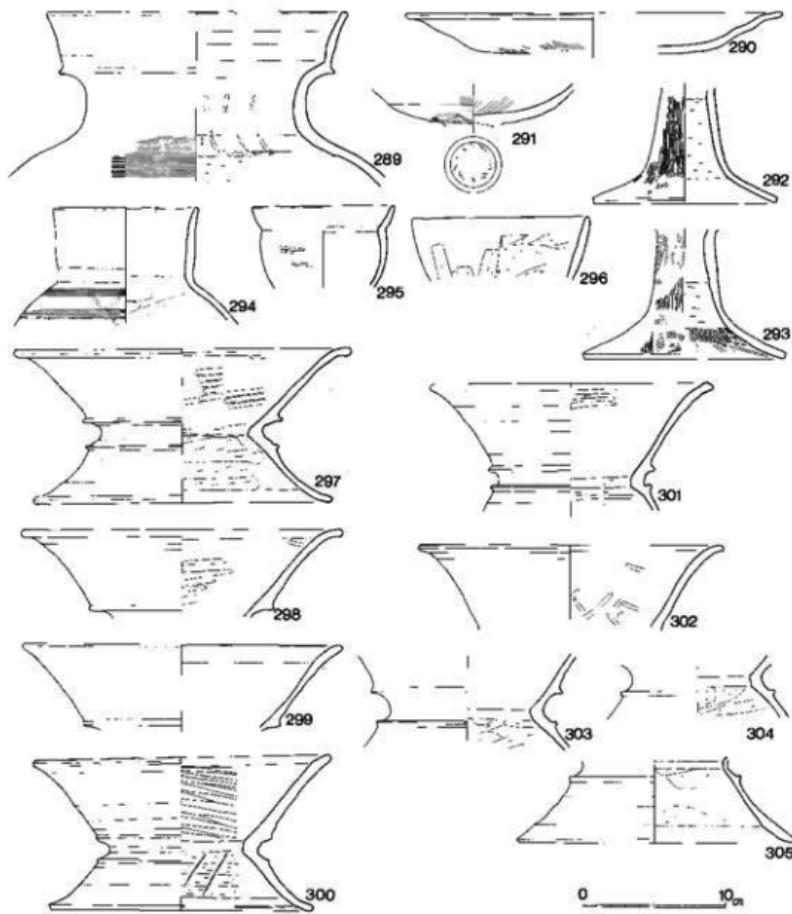


図46 CD-4区出土遺物実測図(4)

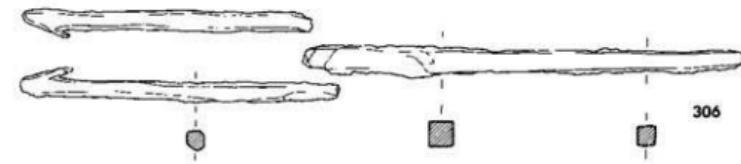


図47 CD-4区出土遺物実測図(5)

329は小形器台と考えられ、中空の脚部に上台、下台が付く。上台口縁直下には1条の突帯状のアクセントがある。脚部には4方向の円形の穿孔がある。外面および上台内面には赤色顔料が塗布される。330は脚部からの貫通穴はないものの、329と同様な器形のものと考えられる。

331～333は鼓形器台で、上台、下台間が縮約したものである。

#### F - 3 区 土器溜り（図50～54）

調査区西より検出した土器溜りで、壺、壺、小形丸底壺、小形丸底鉢、高杯、低脚杯、鼓形器台などからなる。草田7期の標識となる遺物群である。

複合口縁の壺334は、全体に厚手のもので、口縁部は調整を十分行わず、端部は波うっている。体部はわずかに綫長ながらもほぼ球形となる。肩部に波頂間の広い波状文をもつ。外面は細いハケで綫になでた後、太いハケメを横に施して仕上げる。このヨコハケは胴部最大径以下まで及ぶ。内面はヘラケズリを行い、底部付近には指頭圧痕をとどめる。体部側面には焼成後の綫に細長い穿孔がある。335は比較的高い口縁部をもち、その端部は外方に折り曲げ、上面に平坦面をつくる。体部はほぼ球形で、肩部に太いハケ原体を利用した2段の平行線が施されている。336は肩部に太い工具による波頂間の広い波状文をもつ。体部のヨコハケは胴部最大径以下まで及ぶ。底部穿孔が行われたものか、底部の破片を欠く。339も比較的高い口縁部を外方に折り曲げ、その上面に平坦面をつくったもので、肩部にはハケ原体による列点を施す。340も口縁端部に平坦面をつくるもので、肩部にハケ原体による列点を施す。346～349、353、354も同様の壺で、349は比較的波頂間のつまつた波状文が、354はゆるやかな波形がそれぞれ肩部に施される。354は平底の底部をもつ390のような器形と考えられる。341は単純口縁の壺で、直線的に開く口縁部はその端部を内側に肥厚させ、上面に平坦面をつくる近畿布留式の口縁をもつ。底部を欠くが、尖り気味のものになるとを考えられる。342～345は複合口縁のやや小形の壺で、342は球形の体部をもち、肩部にクシ状工具による太い平行沈線を施している。343には肩部に1周はしない列点文がある。350は低い脚をもつ小形の複合口縁壺で、ヘラケズリにより薄くなった底部にはヒビが入っている。体部外面は横方向のヘラミガキを丁寧に施す。口縁内面に鋭利な工具による4本のヘラ記号がある。351は単純口縁の小形の壺で、尖り気味の底部をもつ。体部外面はヘラで磨き、内面は、口縁、体部ともにヘラケズリする。352は小形の複合口縁壺で、口縁外面は綫方向のヘラミガキ、体部外面はハケで仕上げる。355は内傾する短い複合口縁壺で、球形の体部をもつものと考えられる。

複合口縁壺356は口縁端部をなでて凹面をつくる。やや細長い球形の体部をもつ。肩部に波頂間の開いた波状文が施される。357はやはり複合口縁の壺だが、口縁は頸部から大きく開き、端部は外方に折り曲げる。頸部下に突帯が貼付られ、球形の体部をもつ。358もやはり複合口縁の壺だが、

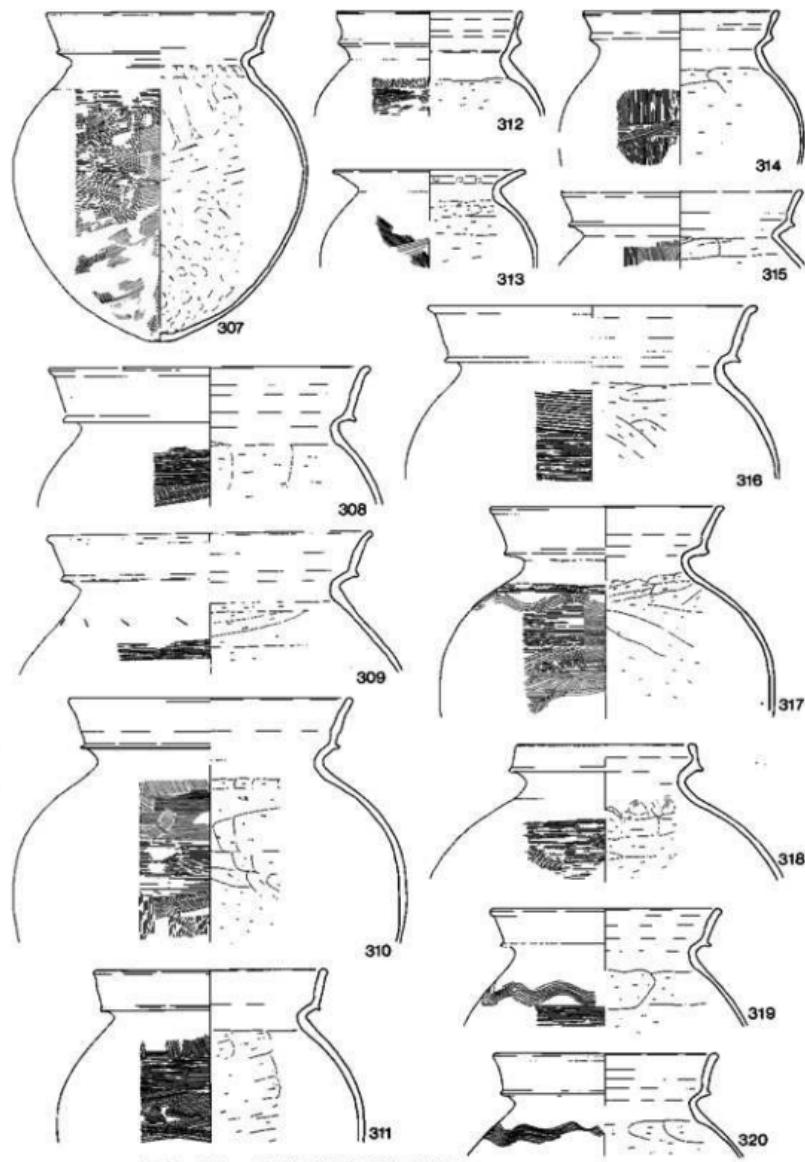


図48 DE-3区出土遺物実測図(1)

0 10cm

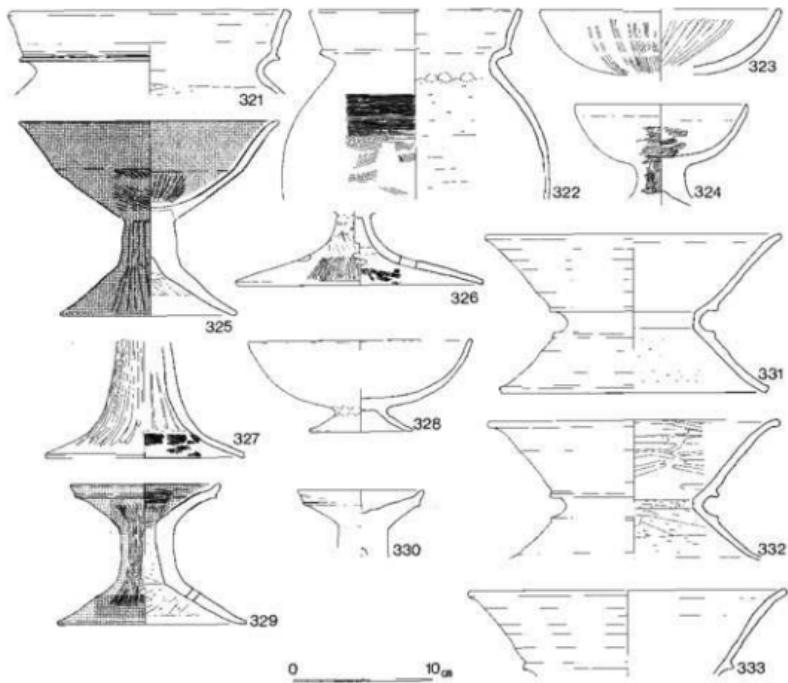


図49 DE-3区出土遺物実測図 (2)

頸部から口縁部にかけては厚手で、体部はヘラケズリによりごく薄く仕上げられる。口縁端部に平坦面をつくる。底部は不安定だが平底となり、穿孔されたものか破片を欠く。359は単純口縁の壺で、直線的に高く立ち上がる口縁は端部で平坦面をつくる。頸部下に突帯が貼付られている。360は複合口縁の直口壺で、外面には縱方向のヘラミガキがある。361は単純口縁の壺で、口縁部は大きく外反し、端部は上方に引き上げる。体部外面はヘラミガキで仕上げられ、その下にタタキの痕跡をとどめる。362～364は小形丸底壺で、扁平な体部から直線的に立ち上がる口縁部をもつ。362には脚が接合するものと考えられる。364は球形の体部にやや短い口縁が接合する。365は短い口縁の直口壺で、肩部に波状文を施す。直口壺366は、直線的に大きく開く高い口縁をもち、球形の体部をもつものと考えられる。体部外面には横方向のヘラミガキ、口縁内面には暗文となるヘラミガキが施される。外面および口縁内面には赤色顔料が塗布されている。367は小形丸底鉢で、やや浅い鉢部から屈曲する口縁部に及ぶ。368は蓋と考えられ、外面にはヘラミガキが施される。370は単

純口縁の鉢で、平底をもち、体部やや深い。体部外面は横方向のヘラミガキ、内面はヘラケズリの後丁寧になでている。362、366、370の胎土は在地のものとは異なる。

371～375は高杯で、大形の371はゆるやかなカーブを経て立ち上がるやや深い杯部をもつもので、これに接合する脚部は長い筒状を呈し、杯底面には脚接合時の刺突痕をもつ。杯部外面には下半にハケメ、上半にヘラミガキが施される。内面はハケでなでた後、ヘラミガキを施す。373、375もほぼ同様のものである。372は中実の脚部で、外面および杯部内面に赤色顔料を塗布している。胎土は在地のものとは異なる。374は直線的な杯部をもつもので、内外面ともハケメの後、ヘラミガキを施す。376～378は低脚杯で、大形の376の杯部は直線的に開く。377はゆるやかなカーブで立ち上がる杯部をもつ。底部には脚部を貼り付けた痕跡をとどめる。378はやや小形のもので、杯部は内湾して立ち上り、低い脚が接合する。杯部外面はハケメ、内面はヘラミガキで仕上げる。

379～385は鼓形器台である。いずれも上台、下台間に縮約したものである。380は上台外面にクシ状工具による平行線文がある。383は筒部内面が緩線となっているものである。382、385は下台に2個1対の穿孔がある。

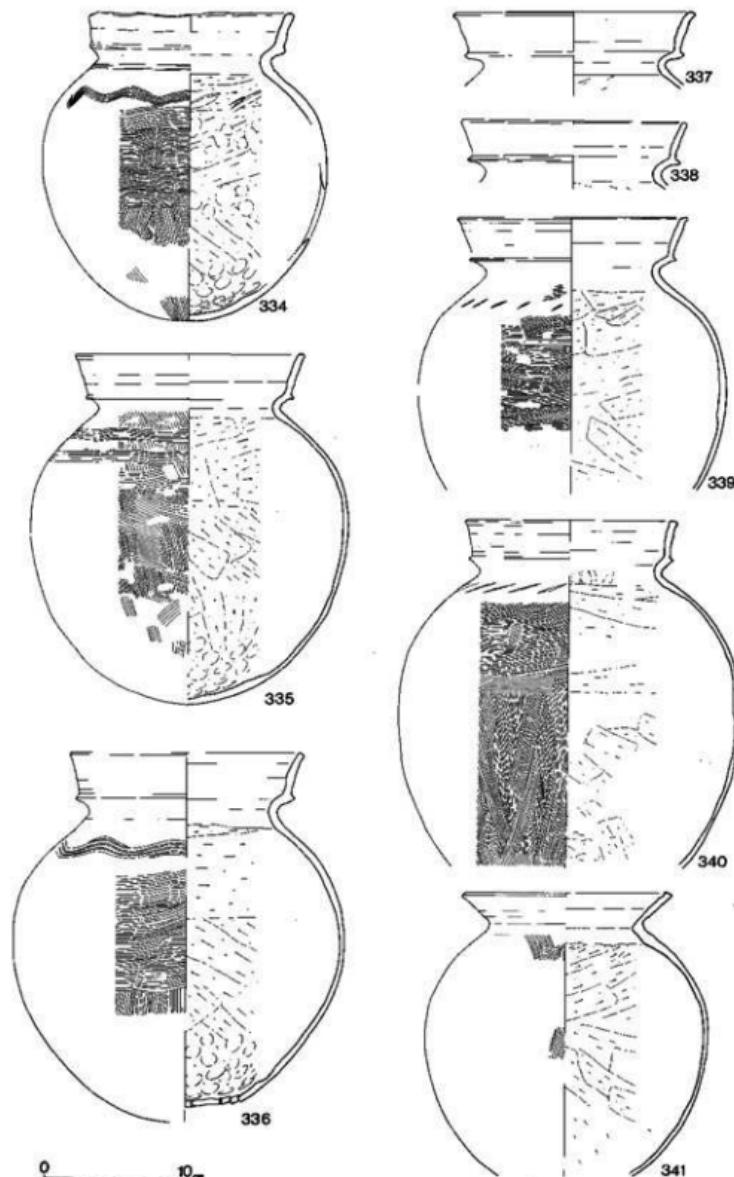
386、387は瓶形土器で、両者は同一個体ではない。筒状の体部をもつ386は下端近くに1対の把手を縦に付ける。この把手は体部を開けられた穴に挿入して接合している。外面にはハケメ、内面にはヘラケズリが施される。下端の口縁387は短く直立するもので、その付け根には1条の突帯がめぐる。

#### C-3・4 区土器溜り（図55 388～394）

388、390は複合口縁甕で、ともに端部を外方に折り曲げるものである。388は倒卵形の体部をもち、390は平底のものである。389は瓦質土器の把手で、ヘラケズリによって面取りされ、多角性形のものである。外面は黒灰色、断面では白色を呈する。391は大きく開く壺口縁である。高杯392は大きく開く低い脚部で、4方向の円形の透し穴がある。小ぶりなやや深い杯部が付くものと考えられる。393は鼓形器台、394は鉢で、かすかな平底をもつ半球形の体部をもつ。394の胎土は在地のものと異なる。草田6期に含まれる。

#### D-5 区土器溜り（図55 395～397）

複合口縁壺395は、比較的高い口縁部をもち、その端部は外方に折り曲げる。396は単純口縁の壺である。口縁端部は丸くおさめる。高杯397は小さい杯底部から直線的に大きく広がる杯部、中実の脚柱部からさほど広がらない直線的な据部に至る。脚据には円形の透し穴がある。杯部内面、脚部外面にヘラミガキがある。草田6期に含まれる。



0 10cm

図50 F-3区出土遺物実測図(1)

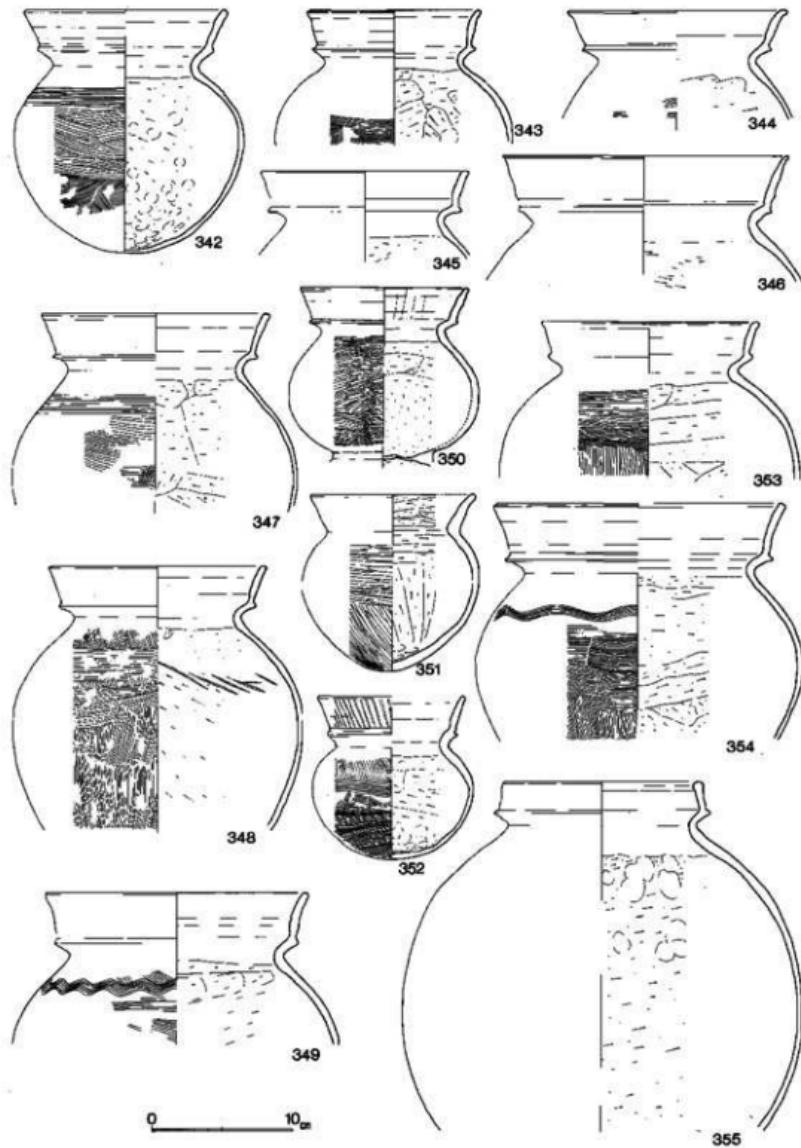


図51 F-3区出土遺物実測図(2)

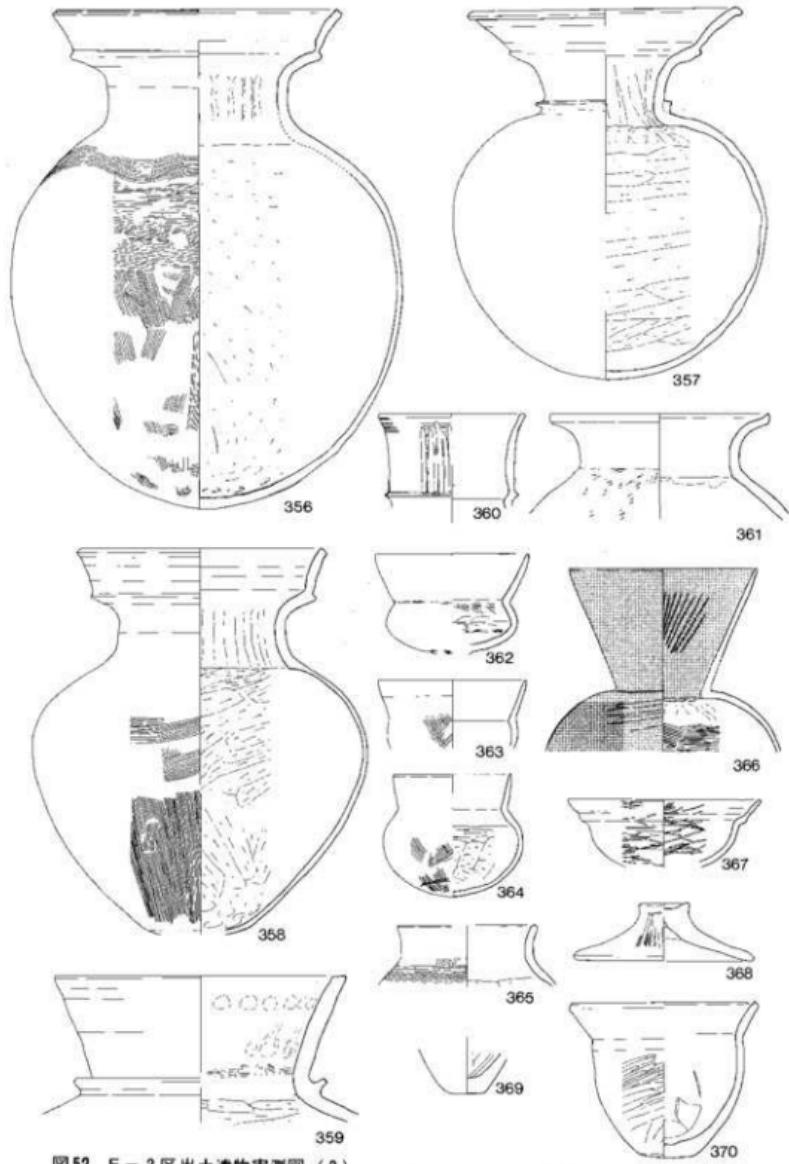


図52 F-3区出土遺物実測図(3)

0 10cm

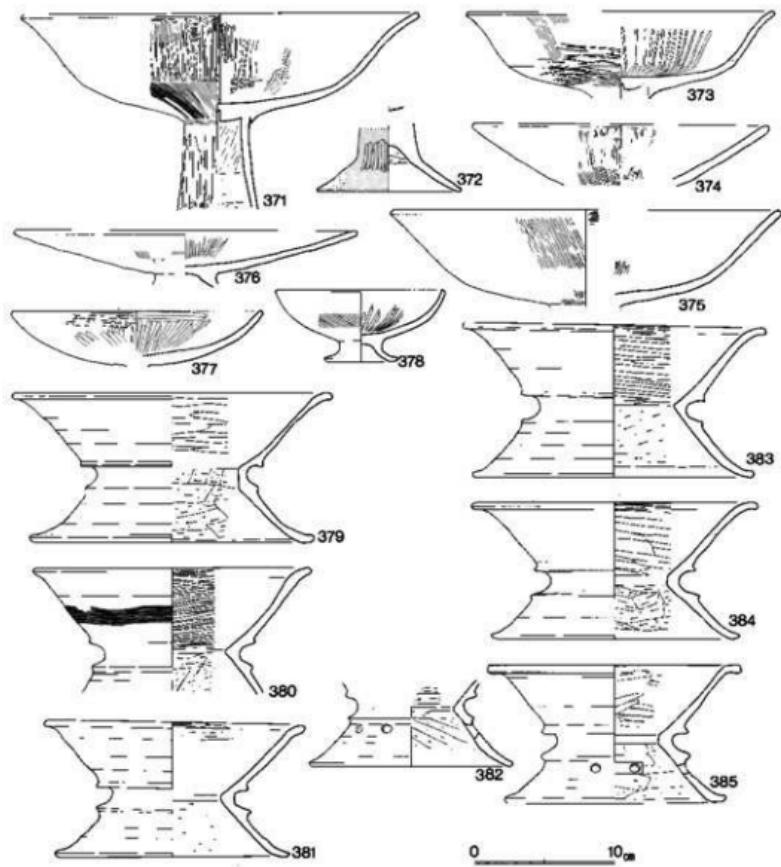


図53 F-3区出土遺物実測図(4)

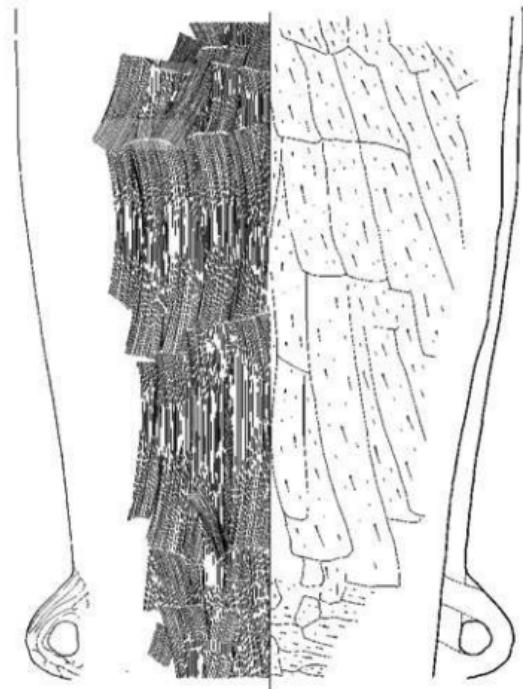
E・F-2区土器溜り(図55 398~401)

398はやや小形の複合口縁甕で、球形の体部をもつ。高杯399はゆるやかなカーブをもつ杯部をもつ。内外面ともヘラミガキで仕上げる。400は大きく開く低い脚部で、4方向の円形の透し穴がある。小ぶりなやや深い杯部が付くものと考えられる。401は低脚杯で、平らな杯底部から湾曲して立ち上がる体部を有する。杯部は内外面ともヘラミガキで仕上げる。脚部は杯底部に貼り付けている。脚内面に2本線のヘラ記号がある。草田6期の遺物である。

#### E・F-4区土器溜り

402~412がE・F-4区出土遺物である。402~407は複合口縁の壺で、口縁端部を外方に折り曲げるもの、平坦面をつくるものがある。403の口縁部は比較的薄く、複合口縁部の稜にはさほど突出はない。408は複合口縁壺で、口縁端部は外方に折り曲げる。

低脚杯409はやや深い杯部をもつ。脚はやや高く、円形の穿孔がある。410は小形の鉢で、平底をもつ。口縁は外方に折り曲げ、その際の指頭圧痕をとどめる。鉢411は、体部外面および底面にタキの痕跡をとどめる。小形の器台412は外面とも粗いハケで仕上げられる。411、412の胎土は在地のものと異なる。草田6期のものであろう。



386



387

図54 F-3区出土遺物実測図(5) 0 10cm

#### G-6区出土遺物

単純口縁の壺413は直線的に広がる口縁部をもつ。やや綫長の体部をもち、平底の底部をもつ。口縁内外面、体部上半は粗いハケで仕上げ、体部下半は細かくヘラミガキを行う。体部各所には調整の下に粘土紐を積み上げた痕跡が観察できる。これに対応するように内面はハケメが残っており、土器製作の工程を示すものと考えられる。これ以上の体部内面にはヘラケズリ痕をとどめる。肩部にはヘラ描きの文様がある。草田5期に含まれるものと考える。

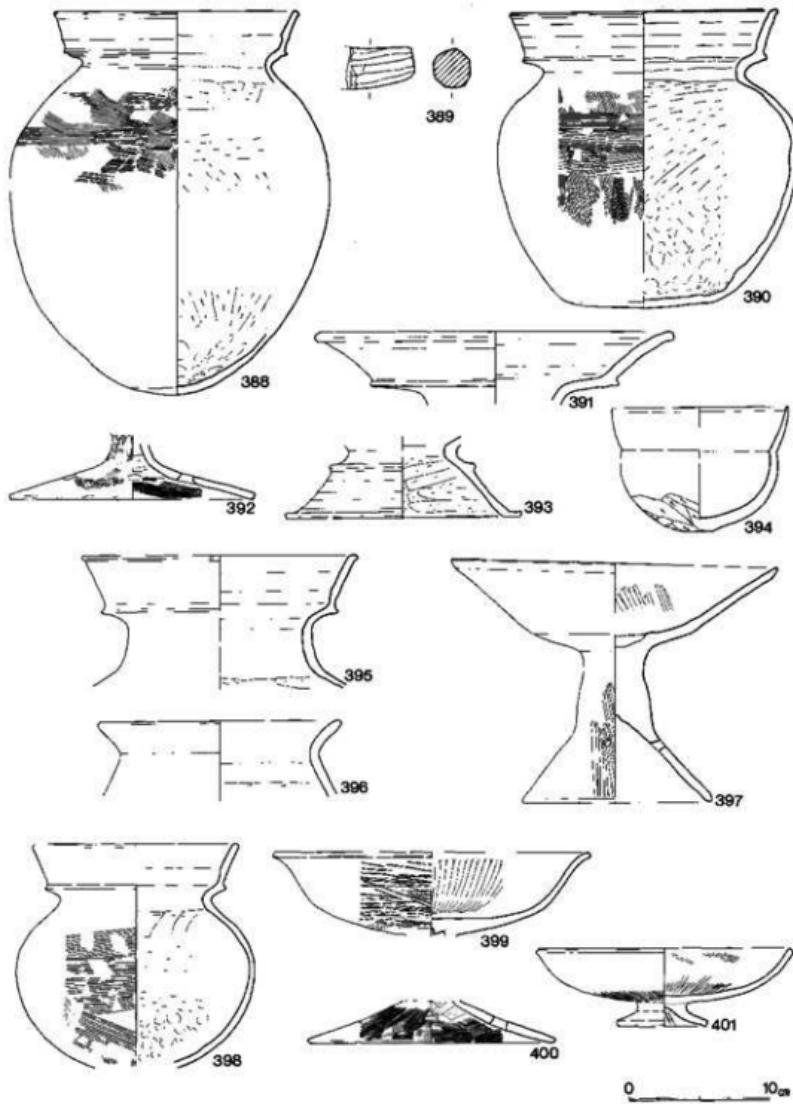


図55 C-3・4、D-5、E-F-2区出土遺物実測図

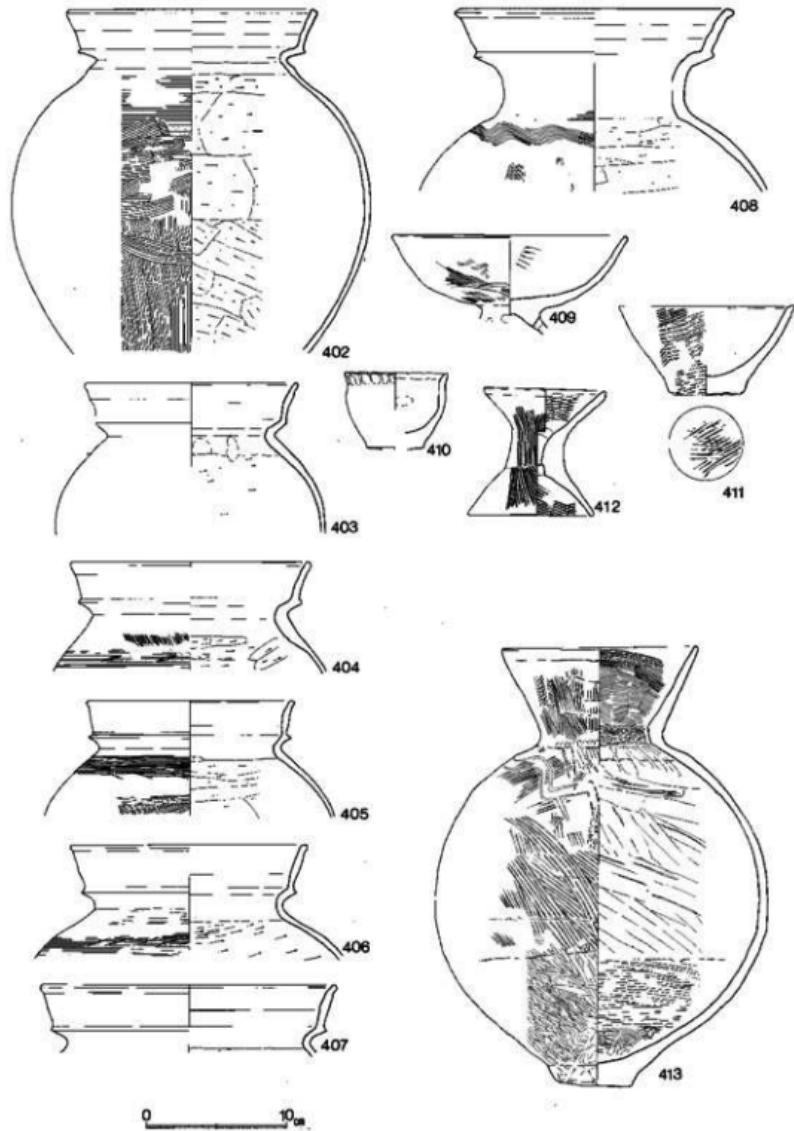


図56 EF-4、G-6区出土遺物実測図

### H-2・3区土器溜り（図57、58）

調査区南西辺に沿って検出した土器溜りで、水路SD02・03の西岸に埋没した状態で出土しているので、この土器溜りを切って、SD02・03は掘られたものだろう。

黒褐色粘質土、淡黒灰褐色土（炭を含む）を中心に遺物は包含されていた。南北5m、東西1.2mの範囲に、草田1～3期の遺物が分布しており、遺物には土器、獸骨（鹿、猪）がある。また、これら遺物に混じって、木の根もあり、当時はこうした立ち木のある環境だったものと考えられる。

甕414～417は上方へ引き上げた口縁外面に3～4条の凹線を施したもの。416は肩部に2段の列点文をめぐらす。417は1対の穴を口縁下にあけている。釣り下げたものか。外面および口縁内面に赤色顔料を塗布する。418は口縁を外方に折り曲げただけの単純口縁。複合口縁の甕419、421、423は上方へ引き上げた口縁外面にヘラによる擬凹線を描く。421は体部最大径付近に焼成後の穿孔がある。423は肩部に間隔の狭い列点文がある。420、422、424は口縁外面に貝殻旗縁と考えられる原体で平行線文を描く。420は肩部に波頂間の狭い波状文がある。

425～429は壺で、425は上方へ引き上げた口縁の外面に6条のヘラによる沈線を施し、山陰地方の土器の特徴を示すものだが、頸部は縦方向のハケメの後、ヘラで沈線を描いており、この頸部の特徴は、吉備地方の土器に通有なものである。胎土から、吉備地方の土器を手本にして、この地方で作られたものと考えられる。山陽地方との交流があったことを物語るとともに、両地方の土器の並行関係を如実に示す遺物である。426は大きく開く口縁部で、端部の平坦面に2個1対の円形の浮文を貼り付ける。427は上方にやや長く繰り上げた口縁部に貝殻腹縁と考えられる原体で平行沈線を施した後、なでて一部を消している。肩部は張らず、なだらかな体部となる。428は筒状の頸部から外反し、口縁端部には3条の凹線を引く。429も口縁に2条の凹線を施す。口縁内面に5条、頸部下半に4条のヘラによる沈線、肩部にクシ状工具による列点を施す。

底部430～434は平底で内面をヘラケズリする。430、433は外面ハケメ、431は外面ヘラミガキ。

435は高杯かと考えられる破片で、内外面をヘラミガキする。鼓形器台436は上台外面に貝殻腹縁で平行沈線を施したもの。上台内面および筒部外面はヘラで磨く。437は大形のもので、復元径約30cmを計る。下台外面にはやはり貝殻腹縁の平行沈線が描かれる。

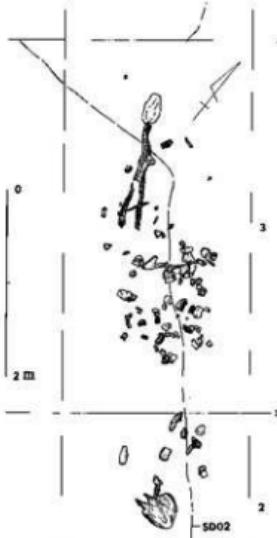


図57 土器溜り出土状況平面図(3)  
H-2・3区

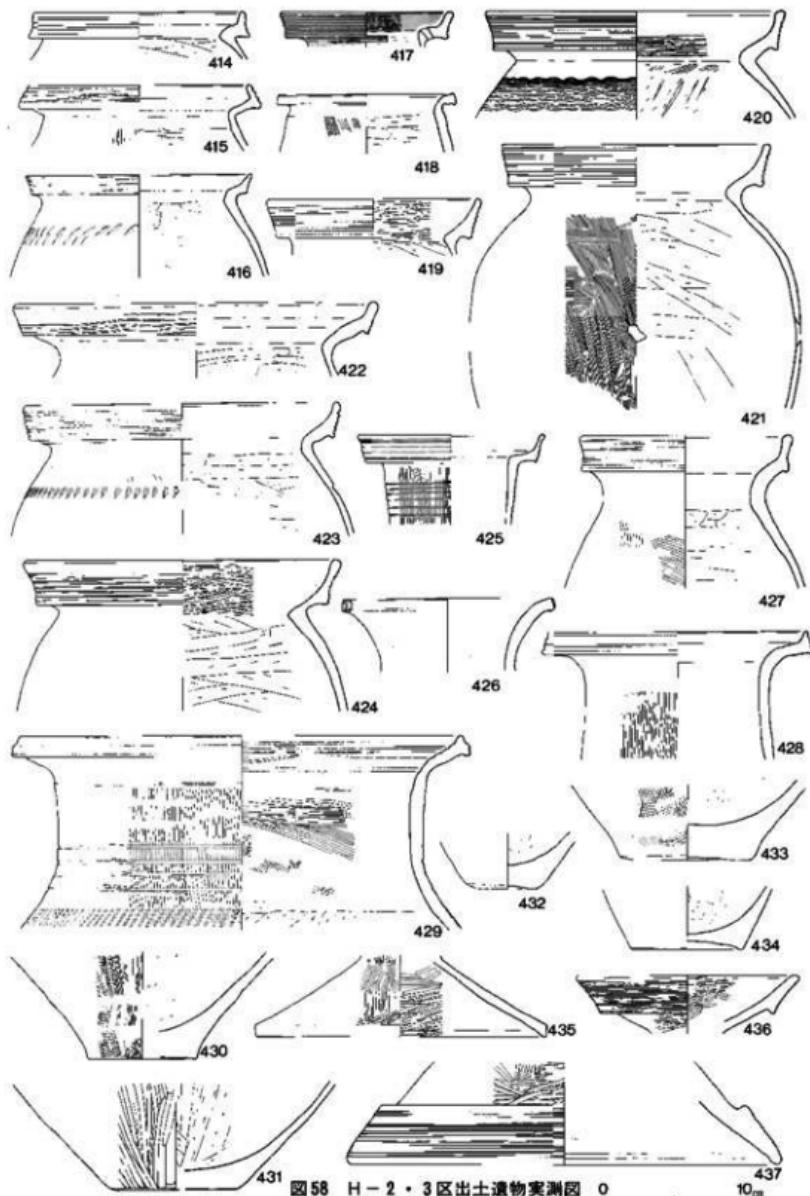


図58 H-2・3区出土遺物実測図

- 63 -

10cm

## H-5 区土器溜り（図59～62）

調査区北西隅、水路SD02・03の西岸で検出した土器溜りで、土器は南北4m、東西1.5mの範囲に、高低差0.3mをもって分布していた。近畿庄内式の遺物を主体とし、これに在地の土器を混えて出土しており、特異な遺物の構成である。草田5期の遺物である。この土器溜りはさらに調査区外に広がるものと考えられる。この土器溜りに伴う遺構は精査したが、検出できなかった。下層にSX09があったが、その墓壙内から出土した土器は、この土器溜り資料より古く、直接の関係はないものと考えざるをえなかった。しかし、墓壙と土器の分布範囲はよく一致する。

438～454は在地の土器で、複合口縁の甕438～448はいずれも薄く引き出したような口縁部をもち、その端部は丸くおさめるか、ごく軽く外方に折り曲げている。複合口縁部の継ぎは、軽く横方向ないし下向きに突出する。449～451は複合口縁の壺で、449は薄く引き出したような口縁部が垂直に近く高く立上り、その端部は丸くおさめている。450は厚手の短い口縁をもつ。451も449同様、薄手の口縁部が高く立ち上がる。肩のよく張る体部をもつ。

鉢形器台452、453は上台、下台間がかなり縮約したものである。高杯454は長い筒状の脚をもつ。

455～486、488、490は単純口縁の甕で、そのほとんどは外面に右上がりのタタキメをとどめる。これらの遺物は淡褐色ないし橙色系の色調を呈し、胎土も黒ないし茶色の摩耗した特徴的な円礫を含み、黄褐色系の在地の土器とは一見して識別できる。

455は口縁部を外方に折り曲げただけのもの。456、457は口縁端部を上方にわずかに引き上げるもの。457は体部外面のタタキの後、粗いハケを施す。458～460は口縁端部を丸くおさめるもので、460は体部のあまり張らないもの。461は口縁端部を上方にわずかに引き上げ、体部は球形に近い。外面は粗いハケの下に右上がりのタタキメが見える。内面はヘラケズリした後、上半部のみハケでなでる。462も口縁端部を上方に引き上げるが、外面にはタタキメの後、ハケなどでの調整はない。内面はハケの後、丁寧になでる。464は外反する口縁部をもち、外面はタタキの後、粗いハケでなで、内面も同様の原体で丁寧になでる。465は直線的に開く口縁をもつ。体部は粗いハケの下に左上がりのタタキが見える。内面はヘラケズリする。466は口縁端部の外面に3条の沈線をもつ。外面にかすかにタタキが見える。467、468、476は口縁端部を丸くおさめるもの、469、470は端部を軽く上方に引き上げるものである。

472、480～486、489、490はやや小形の甕で、外面にタタキメをとどめるものが多い。483はわずかに複合口縁状を呈する。490は体部下方にヘラケズリ痕を残す。

491～495は平底の底部で、外面にタタキを残す491、493、494、ヘラケズリする495がある。

496、497は鉢で、半球形の体部をもち、口縁はその端部をわずかに折り曲げる。498も同様などの底部と考えられる。

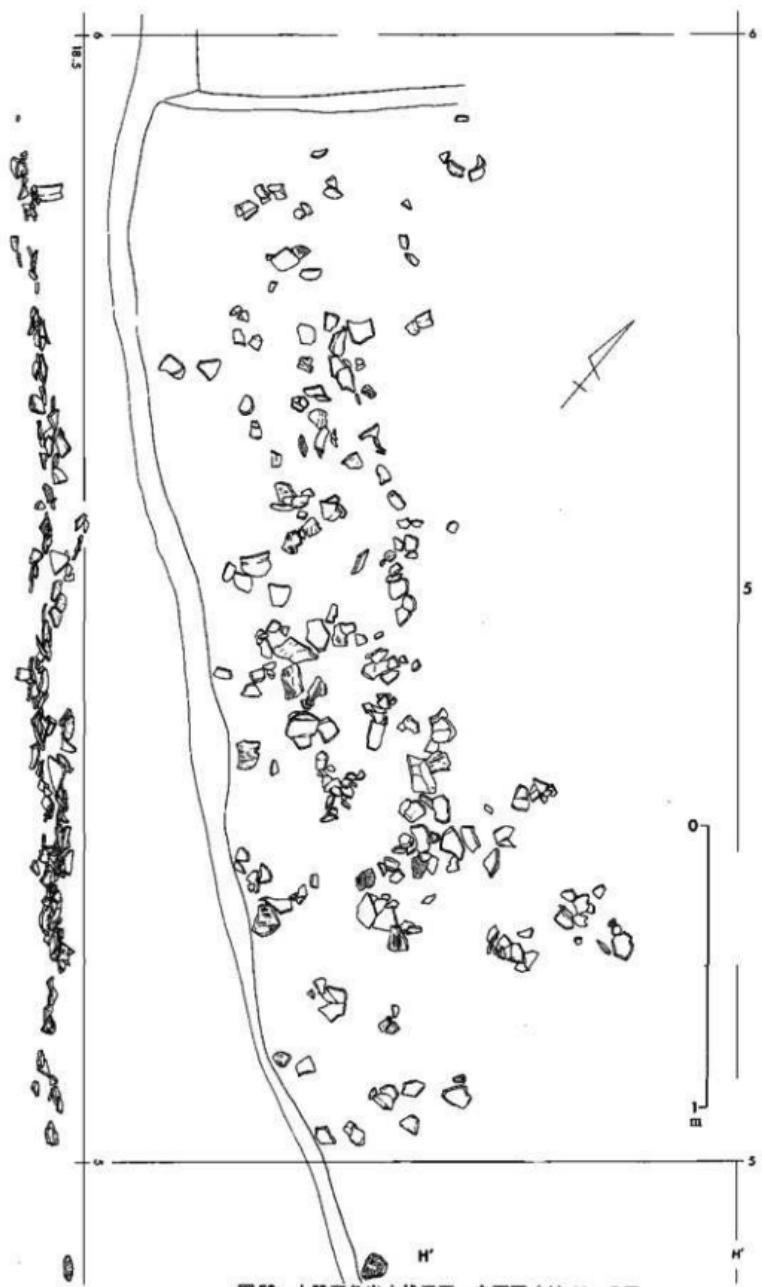


図 59 土器溝り出土状況平・立面図(4) H-5区

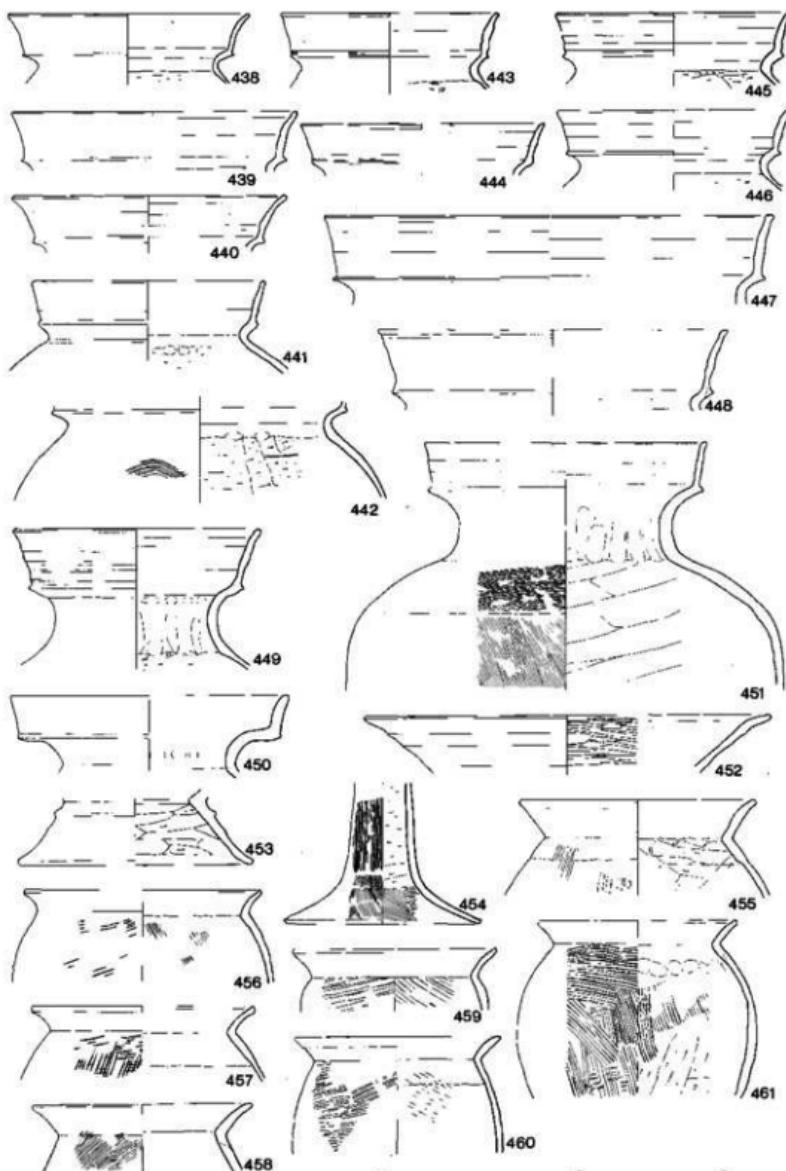


图60 H-5区出土遗物实测图(1)

0 10cm

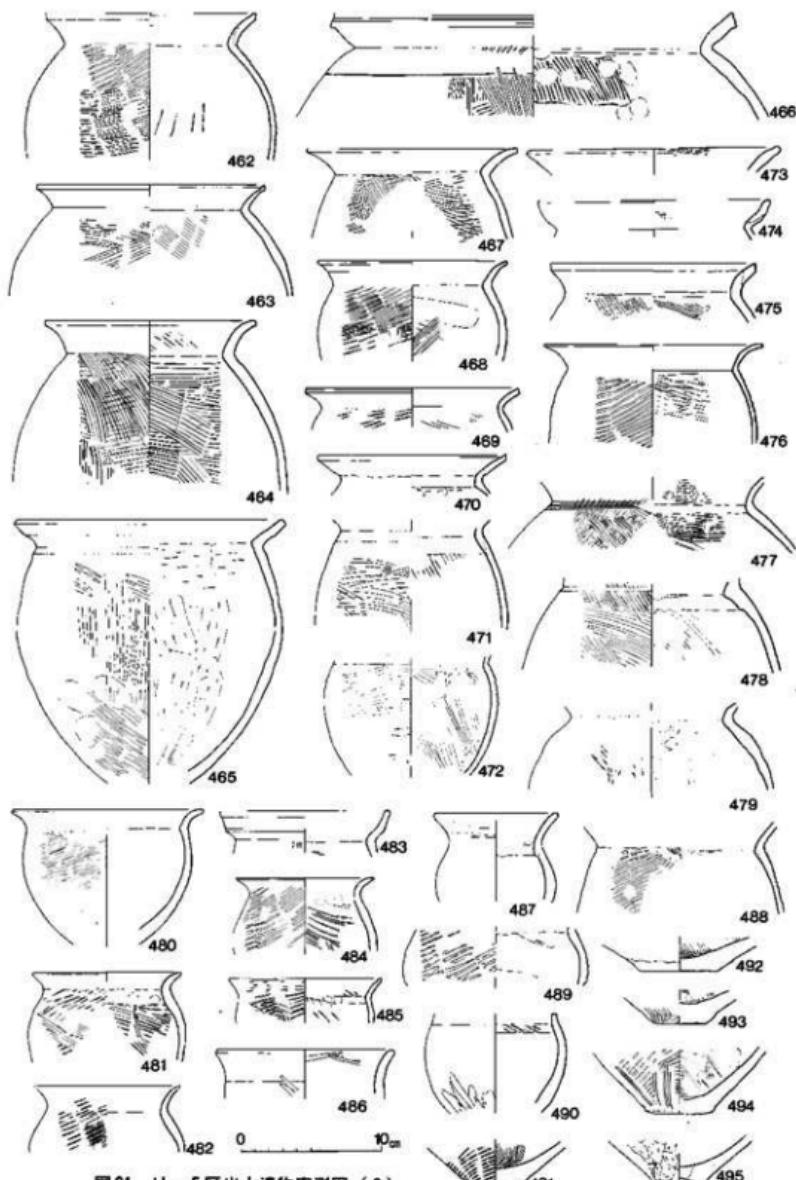


图 61 H-5区出土遗物实测图 (2)

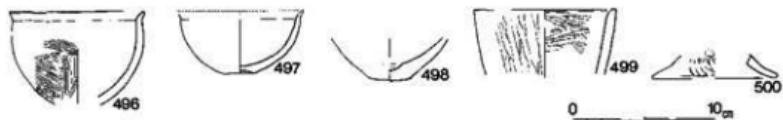


図62 H-5区出土遺物実測図（3）

#### D-4区上層出土遺物（図63）

包含層の上に堆積していた灰色粘土、灰褐色粘土層中からも遺物が出土している。この土層はSD02、03が埋没した際にあふれた土砂の層と考えられる。草田6～7期の遺物である。

複合口縁の壺501～511は、口縁端部を外方に折り曲げるか、平坦面を作る。単純口縁の壺512は、口縁端を内側に肥厚させている。複合口縁の壺513は端部を外方に折り曲げ、頸部にハケ原体の板で綾杉状の文様を描く。514は端部を丸くおさめる。直口壺515はやや短い口縁、扁平な体部をもつ。

517～519は數形器台で、518は上台、下台間の縮約が進み、筒部内面は稜となっている。高杯杯部520はやや深い直線的な立上りをもつ。521はゆるやかなカーブの杯部。523は低く大きく開く脚部で、据に4方向の円形の透かし穴をもつ。524はラッパ状に聞く脚部。525は低脚杯である。

#### その他の地点出土遺物（図64）

526～535はE区での出土遺物で、壺526、527は、口縁端部に3条の凹線を描く。526は口縁内面に4条の沈線がある。高杯528は脚の端部に3条の沈線がある。単純口縁の壺529は、口縁端部を丸くおさめる。530は端部に平坦面をつくる厚手のもの。高杯532は、屈曲をへて立ち上がる杯部はやや深い。533は厚手の脚部で、筒部から屈曲して聞く。脚付きの碗534は杯部やや深い。内外面を丁寧に磨く。535は脚が付く壺か。

536～542はF区からの出土遺物で、単純口縁の壺536は、球形の体部にわずかに内溝する口縁部が付く。口縁端部はわずかに内側につまみあげる。複合口縁の大形の壺537は、垂直に立ち上がる口縁をもち、端部は上面に平坦面をつくる。538は截頭円錐形の土製紡錘車で、下面はわずかに内くぼみになる。径0.8cmの中心孔のほかに端部に1対の斜めの穿孔、さらにもう1つの小孔がある。小壺539は厚手で、短い口縁部をもつ。540は高杯脚で、直線状に聞く。541は脚付の碗か。内外面を磨く。542はふいごの羽口と考えられる土製品で、2次的な焼成を受けている。

543～547がA、B区出土遺物である。高杯543、544は屈曲をもって立ち上がる杯部をもつ。内外面に暗文。545は小形丸底壺で内面に茶色の付着物がある。547は外面にタタキをもつ小形の壺。

548～554は調査区四周の排水路からの出土遺物。548は口縁外面にヘラ描きの沈線がある。549は単純口縁の壺。551は杯か。552は鉢。554は蓋である。中央を貫いての穿孔がある。

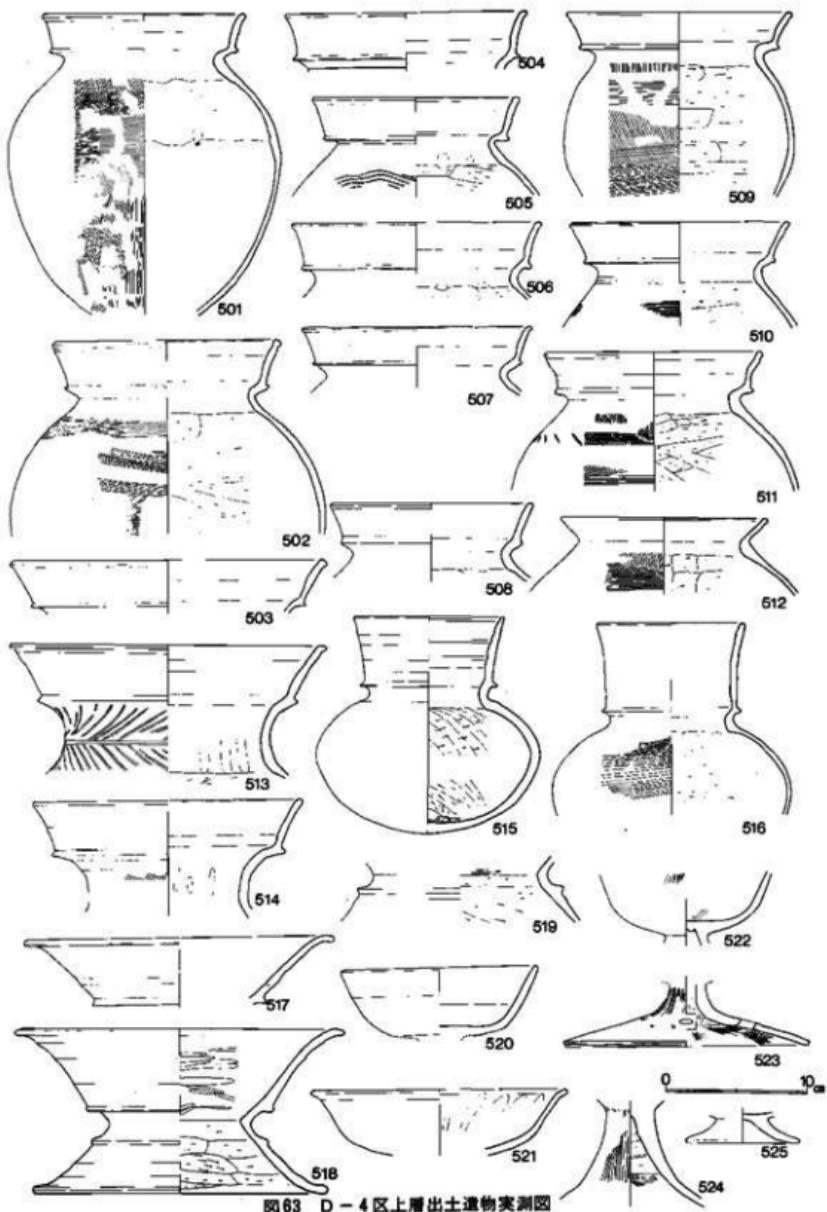


图63 D-4区上层出土遗物实测图

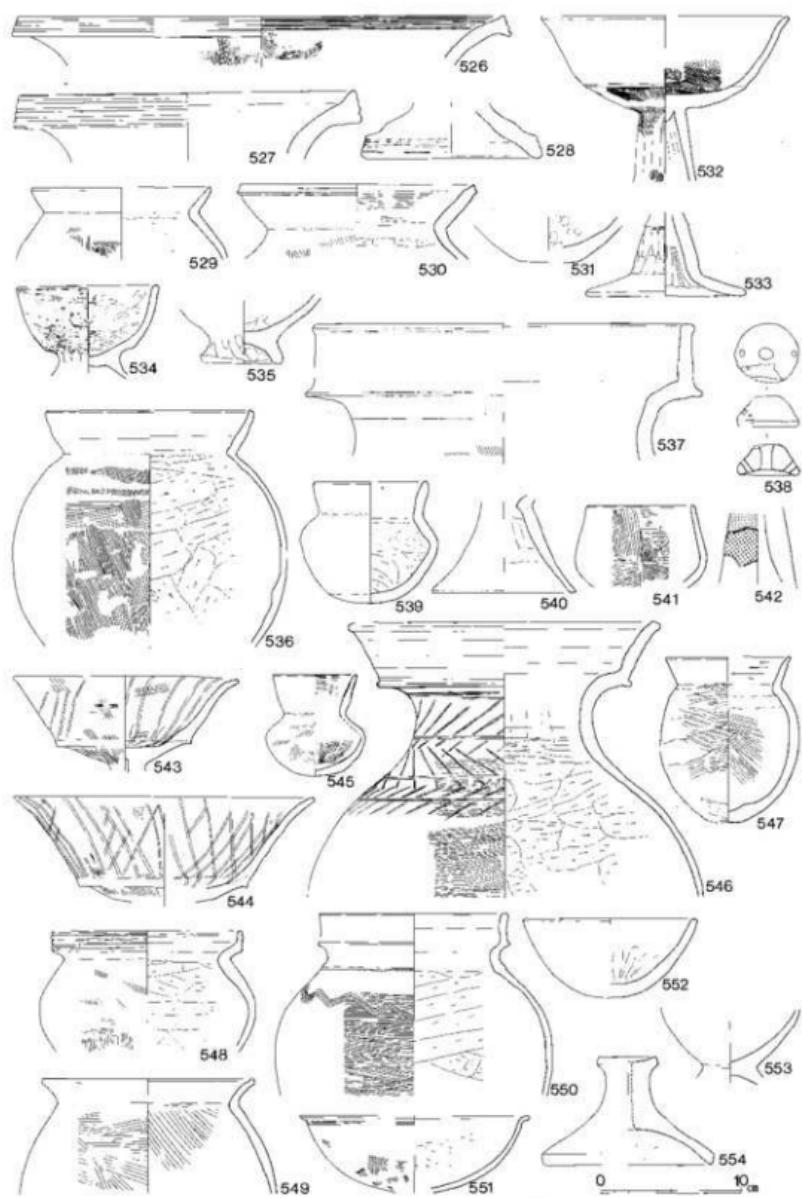


図64 その他の地点出土遺物実測図

#### 4. 第2調査区

第1調査区の南西約35mの地点に設定した東西20m×南北5mの調査区である。

講武地区遺跡分布調査（昭和61年度）で確認していた包含層までの土砂を、重機を投入して除去した。しかし、第1調査区での作業に手間取り、予定していたような調査は実施できず、G1～G3までのテストピットを3か所設定して、この調査区でも第1調査区同様の遺物包含層が存在することを確認し、土層図を作成して終了とした。

この調査区でも基本的には1区同様、水平に土砂は堆積しているが、扇状地の端近くに位置するという地形から、調査区西半からわずかに傾斜して降っている。黒灰色混練粘土が、1区での遺物包含層であった黒褐色土に対応するものと考えた。

#### 第2調査区出土遺物（図67、68）

ここでは明瞭な土器縁りは認められなかったが、かなりの遺物の出土をみている。555～559がG1の遺物。555は複合口縁の甕。556、557は単純口縁の甕で、556は端部をわずかに内側に肥厚させる。558は単純口縁の甕で、外面をヘラで磨く。559は鉢形器台で、上台部外面には貝殻腹縁による平行線文があり、内面はヘラミガキを行う。

560、561はG2出土資料。560は複合口縁の甕で、口縁の断面は引き出したように先細りになる。肩部には波状文がある。561は高杯状の異形の製品で、平らな杯底部から大きく屈曲して立ち上がる体部をもつ。この体部外面には貝殻腹縁によると考えられる平行線文がある。脚は低いものであったと考えられる。

G2とG3の中間で採集した小形丸底甕562は、球形の体部をもち、口縁はさほど開かずに立ち上がる。

鍼状の木製品563は、身と柄の角度が120～130°と鈍角となることから鏃と考えられる。身と柄は

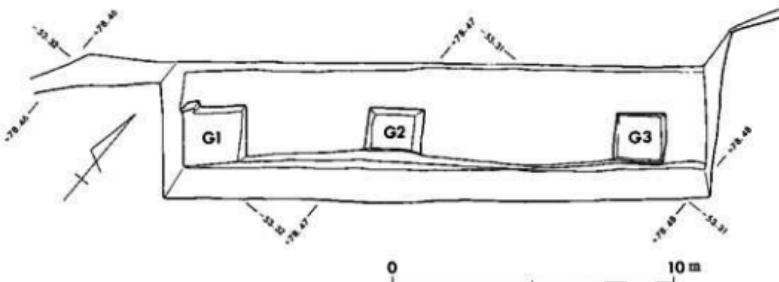


図65 2区平面図 (1/200)

一木から作り出されている。折損しているため、全形をうかがうことはできないが、柄を中心として折り返すと幅40cmにもなる大型のものである。身は2.7~4.5cmと厚手である。踏み込んで使用したと考えられ、身の柄側には面取りがある。

2区は、以上から草田3~7期と、1区とはほぼ同様の時期の遺物を出土しており、1区、2区間は離れてはいるものの、一連の遺構が続いているものと考えられる。

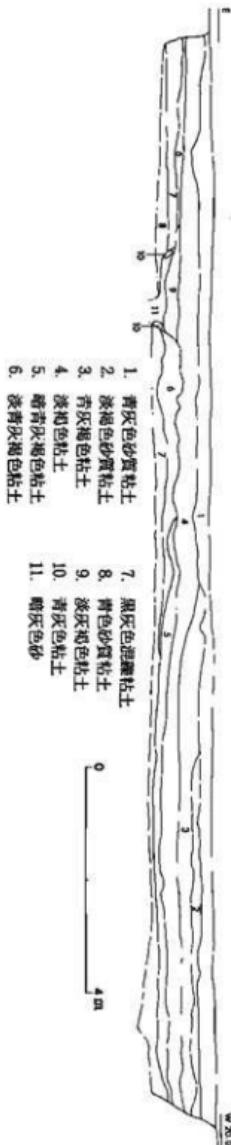


図 66 2区土層図 (1/100)

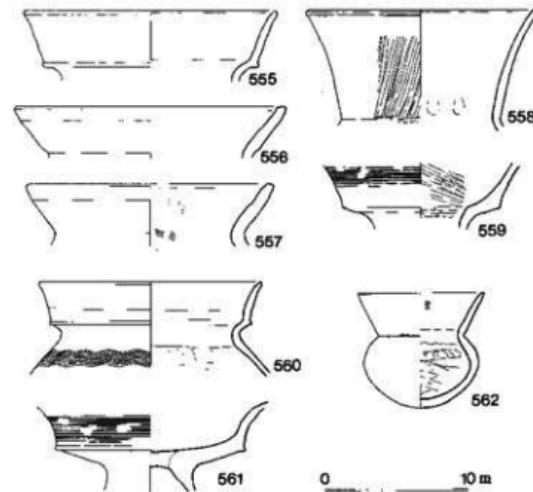


図 67 2区出土遺物 (1)

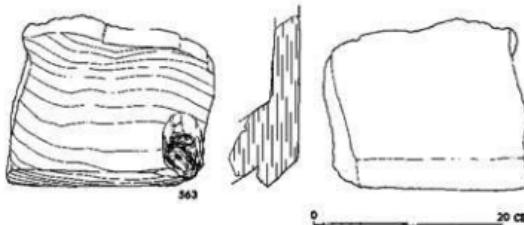


図 68 2区G1出土木製品実測図

## IV. 小 結

### 1. 出土遺物・時期

南講武草田遺跡の調査では、多くの遺物が出土し、これらの遺物は弥生時代後期から古墳時代前期までと、古墳時代後期の2群がある。このうち数多くの遺構があるものの、まとまった土器淹りで取り上げることのできた前者について、この遺跡での変遷をとらえ、遺構の時期を考える。<sup>16)</sup>

#### 草田1期

弥生時代後期前葉のもので、甕、壺の口縁は上方に引き上げられ、外面に凹線文を数条施し、内面は頸部直下までヘラケズリされている。全体のプロポーションは弥生時代中期末のものを引き継いでいる。H-2・3区土器淹りから出土している。

#### 草田2期

甕、壺の複合口縁が上方に延長され、その外面にヘラによる擦凹線を描き、1期より多条化する。新たに出現した器種である鼓形器台にも同様の装飾が施されるが、この施文には2枚貝殻腹縁の使用が始まる。H-2・3区土器淹りから出土している。

<sup>17)</sup> 安来市九重3号墓出土資料に類例がある。

#### 草田3期

甕、壺の複合口縁がさらに上方に延長され、その外面に主として2枚貝の貝殻腹縁と考えられるクシ状工具を使用して平行線文を描く。口縁部外面のカーブは貝殻腹縁を押し付けて成形するものと考えられ、その曲線に近い。鼓形器台も上台、下台への貝殻腹縁による平行線文の施文を特徴とすると考えられるが、外面の施文が消えたもの(238)もある。H-2・3区土器淹り、SX08から出土している。

吉備地方からの遺物は、この時期を中心に搬入されているものと考えられる。

松江市平所遺跡玉作工房出土資料のうち、口縁に平行線文をもつ甕などの古式の一群や、同市の場土壇墓資料がこの時期に相当する。<sup>18)</sup><sup>19)</sup>

#### 草田4期

甕、壺の複合口縁外面から平行線文が消え、口縁はやや厚手で、端部に向かい先細りとなる断面を呈する。口縁外面から平行線文が消えても、そのカーブはやはり貝殻腹縁を押し付けた3期の曲線に近い。この資料の内には、成形に貝殻腹縁を使った後、この痕跡を消したものも存在するものと考えられる。このためか、複合口縁部の稜は、斜め下向きに突出する傾向がある。肩部への施文には主として貝殻腹縁を使用している。鼓形器台でも平行線文が消え、筒部の縮約が始まるが、依然として比較的高い器高を保つ。草田遺跡では、この時期に低脚杯があらわれている。低脚杯は比

	壺	平底壺 (小形壺)	中形壺 (直口壺)	壺	鼓形器台
1					
2					
3					
4					
5					
6					
7					

図 69 草田各期遺物変遷図 (1)

低脚杯

高杯

搬入系遺物

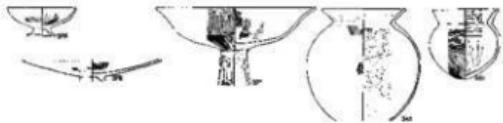
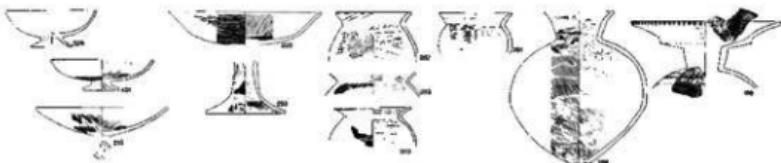
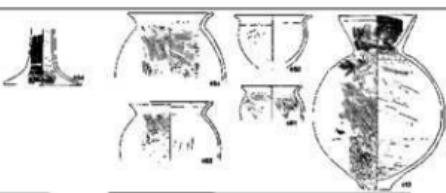
吉備系



近畿系

壺

壺



— 10 cm —

図 70 草田各期遺物変遷図（2）

搬入系遺物

1

2

3

4

器台

5

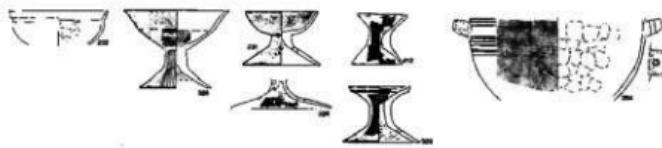


小形丸底盞 小形丸底鉢

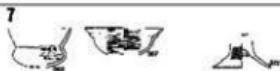
高杯

瓦質土器

6



7



0 10 cm

図 71 草田各期遺物変遷図 (3)

較的小さい口径をもつ、厚手のものである。

松江市平所遺跡1号住居址<sup>20)</sup>、鹿島町南講式小廻遺跡<sup>21)</sup>、同名分佐太前遺跡SD04出土遺物がこの時期の良好的な資料である。松江市平所遺跡1号住居址資料は、甕口縁の形態、鼓形器台がまだ高い器高をもつなど、この時期に並行するものと考えられる。

#### 草田5期

H-5区土器溝りの資料が充てられ、甕・壺の複合口縁外面への加飾はとだえ、口縁断面は薄く引き出したようになる。複合口縁部の稜の突出はさほどのものではないが、水平方向に突出する。成形に貝殻腹縁を使用することはなくなり、施文にわずかに使用されるにすぎなくなる。また、甕・壺の口縁内面をヘラミガキすることはなくなり、ヘラミガキは鼓形器台、高杯、低脚杯などの小形の器種に限られるようになる。鼓形器台はこの時期に器高が低い形となる。

この時期には、近畿地方から搬入されたタタキをもつ遺物が伴っており、これらは近畿地方の土器編年では庄内式<sup>22)</sup>(第六様式)に含まれる遺物である。タタキをもつ甕などの底部にはまだ平底をとどめている。

安来市鍵尾A-5号墓資料の甕は薄く引き出したような口縁をもち、鼓形器台も低くなつたものを伴っており、この時期に相当する。佐太前遺跡SK58資料もこの時期のものと考えられる。

#### 草田6期

複合口縁の甕は口縁部がやや厚みを増し、端部を外方に折り曲げることを特徴とする。甕の体部は倒卵形で、かすかな平底をもつか、尖り底となる。底部内面には指頭圧痕をもち、丸底化の傾向をもち始める。また複合口縁の壺は、この時期から口縁の外傾をはじめる。草田遺跡では、この時期に複合口縁の直口壺が出現している。また、低脚杯には杯部のごく大形のものが現われる。CD-4、DE-3区土器溝り資料を標識とする。これらの土器溝りでもやはり庄内式期の遺物を伴っている。

東出雲町大木権現山1号「墳」1号土塙資料、鳥取県米子市尾高城址SD08資料がこれに相当する。

#### 草田7期

甕の口縁部はさらにその厚みを増し、端部を外方に折り曲げるものがあるものの、端部に平坦面を作るものの頻度が増す。複合口縁部の稜は水平方向に突出するが、鋭さを欠くものもみられる。体部の球形化はさらに進み、底部は完全な丸底となる。肩部の文様は間隔の開いた列点文ないし、波頂間の開いた波状文が施されているが、それもほとんど省略され、粗い横ハケでこれにかえるものの比率が高くなる。鼓形器台は筒部が痕跡化し、その内面では稜線となるものが現われる。高杯は6期にくらべ杯部の深さが増す。F-3区土器溝り資料を標識とする。この遺物には近畿布留式

の単純口縁臺、小形丸底臺、小形丸底鉢などを伴っている。複合口縁の臺357は168のような臺の影響のもとに出現するものと考えられる。

安来市小谷遺跡出土資料がこれに相当する。<sup>30)</sup>

## 2. 土器溜り

第1調査区内各地点で土器溜りが検出され、その多くは下層に存在した墳墓群の上面に供えられたものと考えられたが、H-2・3区土器溜りのように下層に墳墓を伴わないものもあり、この土器溜りからは獸骨なども出土していることから、他の土器溜りとは性格を異にするものと考えられる。墳墓の上面に供えられた土器群も、墳墓用に特別に製作されたものは少なく、集落で日常的に使用されていたものようである。

また、調査区内では、遺構の保存の方針がとられて以後、精査を行っていないので、土器溜りすべてに対応する遺構が検出されていない可能性がある。遺物のまとまり、量からは、検出した以外にもかなりの遺構があるものと考えられる。

## 3. 搬入遺物

この遺跡で数多く出土した搬入遺物は、吉備地方から搬入された小形壺形土器などの1群と、近畿地方から搬入された1群とに分かたれる。これらはいずれも在地の土器とは胎土が異なり、明らかに運び込まれたものである。

吉備地方からの土器は、同地方での特殊器台の編年で立板型と呼ばれる時期のもので、島根県東部地方でこれまで検出されているものと同時期のものである。この時期の吉備地方と山陰地方の交渉を示す例が1例増したものといえる。<sup>31)</sup>

近畿地方から搬入された庄内式期の土器は、それに伴う在地の土器の観察から新、古に2分でき、近畿地方からのこの地への訪問が、何次にもわたったことを暗示している。これらの土器群は図示できなかったものも含めると、百個体にも及ぶものと考えられ、かなりまとまった人數の来訪であったことが想像される。また、出土した遺物は、甕などの日常的に使用する器種が多いのも特徴的である。その産地を近畿地方と一括はしているが、産地を特定したのはCD-4区土器溜り中の1点（283）が河内産と考えられたのみで、それ以外の遺物の産地比定は今後の課題である。

これに加え、朝鮮半島製と考えられる瓦質土器も2点（284、389）ではあるが庄内式土器に伴って出土しており、近畿地方の遺物とともにどのようなルートを経てこの地にもたらされたものか興味をもたれるところである。

また、これに続く近畿地方布留式の遺物群についても、搬入されたものか、この地で製作された

ものかについて、今後胎土分析などを行う必要がある。

#### 4. 墳墓群（表1）

この遺跡で検出した墳墓は、草田3期から6期にわたって作られており、かなり長期間営まれたことがわかる。この内、遺物を伴うものはSX03、06、08、09であり、遺物はいずれも土器である。調査区内で最も古い墳墓は、SX08、09で、これが草田3期のものである。5期にSX03が、6期にSX06が作られている。墓壇の頭位などから時期を想定できるものを加えると表2となる。かなり多くの遺物を検出したF-3区土器掘りに代表される7期の墳墓は、この時期の可能性のある壇棺墓SX10以外には検出できていない。

また、これら墳墓群には溝で区画するなど特に墓域を設定している様子はない。

墳墓は木棺墓を主体とし、遺構検出面は遺構が掘り込まれた面より低いので、確言はできないが、SX01の例をみると2段掘りのものであるので、その他のものもこうした墓壇であった可能性がある。境内には木棺が組まれていたと考えられるものが多い。このうちSX09は6m以上になるもので、別格の長さをもっている。

木棺は副室をもつものが多く、特徴的である。こうした副室は奥才古墳群でも数多く認められており、時期に若干の前後はあるものの、注目される。何らかのものを副葬したものと考えられるが、いずれの調査例でもこの副室からの出土遺物はないので、有機物を副葬するためのものである可能性がある。また、墓壇に柱状のものが立てられていたような痕跡があることも注意される。こうした痕跡があったのは、SX01、04、06である。

表1 墳墓一覧

名 称	構 造	規 模 (m)	主 軸	土器掘り	備 考
SX01	2段掘り、木棺	外側3.5×1.8 内側2.8×1.1	E-41°-N		柱状のもの
SX03	木棺、副室	2.8×1.0	W-37°-N	あり	
SX04	木棺、副室？	2.3×0.9	E-14°-N		柱状のもの、墓壇床面に丸太
SX05	木棺、副室	2.5×0.8	W-6°-S		墓壇に接してピット
SX06	木棺	2.7×1.1	W-33°-N	あり	柱状のもの
SX07	木棺、副室	2.8×0.8	W-33°-N		
SX08	木棺	2.7×0.6	E-14°-N		墓壇に接してピット
SX09	木棺	6以上×1.0	S-45°-E		
SX10	土器棺	掘方径0.45、深さ0.25	-		

表2 遺構、遺物の時期

時 期	土 器 潟 り	墳 墓	その他の遺構
草田1	H-2・3区土器滾り		
2	H-2・3区土器滾り		
3	H-2・3区土器滾り	SX08、05	
4		SX09	SB01
5	H-5区土器滾り、G-6区	SX03	
6	CD-4区、DE-3区、C-3・4区土器滾り、D-5区、EF-2区、EF-4区土器滾り、D-4区上層	SX06、07	SD05
7	F-3区土器滾り、D-4区上層	SX10?	SB02、SD03、SD02

## 5. 水 路

調査区内で検出した水路は、SD01上層水路、SD01下層水路、SD02、SD03の4水路である。

古墳時代前期のSD02、SD03は、遺跡の立地する谷奥から流れだす水を下方の川に排水する目的をもって掘削されたものと考えられる。この時期に扇状地上ではF-3区土器滾りが形成されており、水田などが営まれた痕跡はない。当時の水田はさらに下方の現講武川沿いに開かれていたものと考えられる。一方、古墳時代後期のSD01の時点では水路は丘陵裾をめぐり、この扇状地上に存在したと考えられる水田に水をかける給水路となっている。つまり、古墳時代後期の段階にいたって、この扇状地が水田として開発されたことを示していよう。この時期までにこうした灌漑水路を掘削して水田を開発するようになっていたものと考えられる。この盆地内の開発を考える上で、貴重な資料を提供するものといえる。

今回扇状地とはいえ、丘陵地以外からこうした墳墓群が発見されたことは今後の調査のあり方を考える材料を提供したものといえよう。鹿島町域内でも四隅突出型墳丘墓の可能性がある南講武小廻遺跡（草田4期）は丘陵裾部の、木棺墓などを検出した佐太前遺跡は低湿地での調査例で、これまでの丘陵上ばかりでなくこうした地点でも調査の必要があることが明らかになったものと考える。

また、鹿島町域内では石剣、劔鍔車形石製品を出土した前半期の奥才古墳群、前方部が蝶形に聞く前方後方墳である名分丸山1号墳などが知られており、また、隣接する松江市古志町船寄遺跡でも<sup>31)</sup>168に酷似した壇など近畿系の遺物の出土が知られており、この地域が近畿地方との密接な関係にあることが明らかになりつつあるといえよう。

いずれにせよ、このように近畿地方から大量の遺物が搬入されたことが明らかになった遺跡は、山陰地方ではいまだ知られておらず、どのような理由によるものかは現在までの知見では明らかに

できない。今後の類例を待ちたいが、地方が古墳時代を迎えるにあたっては、それまでの隣接する地域との交渉というレベルを越えた、このような近畿地方との直接的な交流をもとに展開するものと考えられる。また、その動きは出土した瓦質土器が示すように、朝鮮半島をも巻き込んだ動きであった可能性を考慮されることを確認して結びとする。

## 注

1. 山本 清「佐太講式貝塚」『講武村誌』講武村誌刊行会 1955年)
2. 金闇丈夫「島根県八束郡古墳遺跡」(『日本考古学年報』16 1963年)  
金闇丈夫・小片丘彦「着色と変形を伴う弥生前期人の頭骨」(『人類学雑誌』第69巻3・4号 1962年)
3. (a) 山本 清「古浦砂丘遺跡」(『講武村誌』講武村誌刊行会 1955年)  
(b) 『佐太前遺跡』鹿島町教育委員会 1987年
4. 『講武地区原宮園場整備事業発掘調査報告書4 北講武氏元遺跡』鹿島町教育委員会 1989年
5. 『志谷奥遺跡』鹿島町教育委員会 1976年
6. 『講武地区原宮園場整備事業発掘調査報告書1 名分塚田遺跡』鹿島町教育委員会 1984年  
『講武地区原宮園場整備事業発掘調査報告書3 名分塚田遺跡2』鹿島町教育委員会 1987年
7. 『講武地区遺跡分布調査報告書1』鹿島町教育委員会 1987年
8. 『南講武小廻遺跡』(『鹿島町埋蔵文化財緊急調査報告書1』鹿島町教育委員会 1986年)
9. 『名分丸山古墳群測量調査報告書』鹿島町教育委員会 1984年
10. 『奥才古墳群』鹿島町教育委員会 1985年
11. 『菅田考古』16 島根大学考古学研究会 1983年
12. 『講武地区遺跡分布調査報告書2』鹿島町教育委員会 1988年
13. 注12書
14. 天理大学置田雅昭先生のご教示による。
15. 鹿星学校中 敬謹先生のご教示による。
16. 以下の研究などを参考とした。  
藤田憲司「山陰『鏡尾式』の再検討とその併行関係」(『考古学雑誌』第64巻4号 1979年)  
花谷めぐむ「山陰古式土師器の型式学的研究—島根県内の資料を中心にして—」(『島根考古学会誌』第4号 1987年)
17. 内田 才・東森市良・近藤 正「島根県安来平野における土壙墓」(『上代文化』36 1966年)
18. (a) 「平所遺跡1」(『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』I 島根県教育委員会 1976年)  
(b) 「平所遺跡2」(『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』II 島根県教育委員会 1977年)
19. 近藤 正・前島己基「島根県松江市の土師器」(『考古学雑誌』第57巻4号 1972年)
20. 注17(a)書
21. 注 8 書
22. 注 3(b)書
23. 藤田雅昭「3. 庄内式土器」(『弥生文化の研究』4 1987年)
24. 山本 清「山陰の土師器」(『山陰古墳文化の研究』所収 1971年)
25. 注 3(b)書
26. 『大木権現山古墳群』 東出雲町教育委員会 1979年
27. 『尾高城址』 II 尾高城址発掘調査団、米子市教育委員会 1979年
28. 注16書
29. 近藤義郎・春成秀爾「埴輪の起源」(『考古学研究』51号 1967年)
30. 注10書
31. 『古代伊田王国の興亡』鹿島町立歴史民俗資料館特別展図録 挿図20 鹿島町立歴史民俗資料館 1989年

## 出土遺物観察表

SD01

標印番号	出土地点	器種	法 番 号			形態・手法の特徴	色 調	脂 土	焼 成	備 考
			口径	底径	器高					
1	SD01	須恵器杯身	12.9	8.3	3.8	口縁端にアクセント 既断に回転糸切り板	青灰色(口縁 外側)茶褐色 少量	2mm人の名粒 少量	良 好	
2	SD01縁		12.4	-	-	口縁端にアクセント	外/暗青灰色 内/青灰色	密、白色小砂 粒を若干含む		
3	SD01上層	須恵器杯蓋	13.6	-	-	天井部曲部に継 口唇内面に段	外/暗灰青色 内/淡青灰色	小砂粒、ごく 少量		
4			14.0	-	-	天井部曲部に継 口唇内面に段	灰色	1~2mmの 砂粒を含む		
5	SD01	須恵器杯身	11.0	-	-	立ち上がり低い	淡青灰色	密、白色砂粒 ごく少量		
6	SD01 上層+下層		10.6	-	4.1	下半回転ヘラケズリ			密、1mmまで の白色砂粒量	
7	SD01		10.2	-	-	やや高い立ち上がり	灰色~暗青灰 色	1mm前後の砂 粒をかなり含 む		
8			10.4	-	-	直立気味の立ち上がり	暗青灰色	0.5~3mm大 きな墨色砂粒 表面に吹きだし ている	やや不良	
9			11.2	-	-		灰色	密	良 好	
10	SD01上層		10.4	-	-	やや高い立ち上がり	外/墨緑褐色 内/淡灰色	1~2mmの白 色粒		
11			11.2	-	-		青灰色	1mm以下の長 石粒		
12			13.8	-	-		淡青灰色	密		
13			11.2	-	-		青灰色			
14	SD01(C-2)		11.8	-	-		外/灰色、暗 緑褐色の自然 地がかかる 内/白灰色		硬 質	
15	SD01		13.2	-	-	丸味をもって薄い体厚 立ち上がりはよい	青灰色	1mmまでの白 色砂粒をかなり 含む	良 好	
16	SD01上層	須恵器高杯	-	--	-	台形3方透し		1mm前後の白 色砂粒少量		
17	SD01縁		-	-	-		外/暗青灰色 内/古灰色	1mm前後の長 石粒をかなり 含む		
18			-	-	-		灰色	長石砂粒をか なり含む		

査定 番号	出土地点	器種	法量			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底深	高さ					
19	SD 01上層	須恵器高杯	-	-	-	三角形3方透し 脚部にアクセント	青褐色、脚部 内面、断面は 青灰色	密、白色小砂 粒少量	良好	
20			-	-	-	「角形2方透し	外/黒灰色 内/淡灰色	1mm前後の長 石、石英粒を 多量に含む	やや不良	
21	SD 01中層		-	8.5	-	縦状3方透し	灰白色	密、小砂粒少 量	普通	
22	SD 01	須恵器甕	16.2	-	-	口縁部。口縁下に棱 底部。下半をヘラケズ りする	灰	1mm以下の白 色砂粒を含む	やや不良	
23		須恵器甕	-	-	-	底部をヘラケズリ。 それ以上にカキメ	外/灰青色 内/淡灰青色	1~2mm大の 白色砂粒を含 む	良好	
24			-	9.0	-	底部をヘラケズリ。そ れ以上にカキメ	外/青灰色 内/灰色	1mmまでの白 色砂粒をかな り含む		
25	SD 01, SD 01下層	須恵器大型	-	-	-	外面格子状のタッキ。 内面同心円のタッキ	外/淡灰褐色 の縫に銀褐色 自然鉛及び 黒灰色粒 内/青紫灰色	密1mm前後の 白色粒を若干 含む		
26	SD 01	土師器甕	14.2	-	-	口縁内側に肥厚させ る布留甕	灰	微細な白色及 び赤褐色小砂 粒を含む		
27	SD 01上層		15.2	-	-	短く折り曲げただけの 口縁	灰	1mm以下の小 砂粒を含む		
28			15.6	-	-	外方に折り曲げた口縁 部。外面タテハケ、内 面ヘラケズリ	外/褐色～黑 褐色 内/褐色	1mm前後の大 きな白色砂粒を多 く含む		
29	SD 01		17.4	-	-		淡褐色～暗褐色	1mm以下の砂 粒を多く含む		
30			16.6	-	-	ごく短い口縁部	灰	1mm前後の砂 粒を含む		
31	SD 01上層		24.0	-	-	「く」字に大きく開角 する口縁	橙褐色	1mmまでの砂 粒を含む		
32	SD 01		22.5	-	-	大きく「く」字に屈曲 する口縁	淡褐色～暗褐色 白色砂粒を含 む			
33			22.0	-	-		外/淡褐色 内/淡暗褐色	1mm前後の白 色砂粒を多量 に含む		
34	SD 01上層		20.6	-	-	高く立ち上がる口縁部	外/淡褐色～ 暗褐色 内/黄褐色	小砂粒を多量 に含む		
35			18.8	-	-		褐	1mm未満の砂 粒(白色・透明) を多量に含む		
36	SD 01	土師器高杯	-	-	-	短く中空の脚柱部。外 面ヘラミガキ	密、微細な白 色砂粒		外面に褐色の顔 料を塗影	
37	SD 01上層		-	-	-	大型の製品。脚柱外 面ヘラミガキ	被褐色	1~2mm大の 砂粒を多く含 む		外面及び杯部内 面に赤色顔料

博覧 番号	出土地点	器種	法量 cm		形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径					
38	S D 0 1 上層	土器器高杯	-	-	大形の製品。脚柱外側 にヘラミガキ	褐色	1mmまでの白色 砂粒を多く含む	良 好	外面赤色顔料塗 装
39	S D 0 1	土器器小壺	-	6.6	-	平底から内湾して立ち 上がる体部	褐灰色	1mmまでの白 色小砂粒を含む	
40	S D 0 1 上層	壺	20.2	-	短く折り曲げた口縁	褐色	1mmまでの白色 砂粒を多く含む		
41	S D 0 1		23.0	-	外方に開く口縁	外 / 褐色 内 / 褐色	1mm前後の砂 粒を多く含む		
42	S D 0 1 上層		23.2	-	湾曲して開く口縁	褐色	1mm前後の砂 粒(白色・半透明)を多 量に含む		
43			24.9	-		薄茶色	1mmの大砂粒 を多量に含む		
44	S D 0 1 上層	カマド	-	-	カマド焚き口ひし部分	褐色	小砂粒を多く 含む		
45	S D 0 1 備層中		-	-		褐色	1mm前後の砂 粒を多量に含む		
46	S D 0 1	コシキ	-	-	コシキ把手。角状に上 を向く		白色小砂粒を 多く含む		
47	S D 0 1 下層	項部器杯蓋	13.5	-	湾曲した大ぶりな体部 天井部回転ヘラケズリ	淡灰青色	密		
48	S D 0 1 下層		13.3	-	天井部山部に緩 口斜内面に段	灰青色			
49			13.0	-	天井部曲部に緩 天井部回転ヘラケズリ	外 / 暗灰色 内 / 暗青灰色		硬質なるも れか所に燒 き点み気泡 あり	
50	S D 0 1 下層		12.4	-		暗灰色	密、白色小砂 粒を若干含む	良 好	
51			11.8	-		外 / 暗青灰色 内 / 暗青灰色	密		
52	S D 0 1 下層		12.8	-		淡灰色～暗灰 色			
53		頂部器杯身	11.0	3.5	低い立ち上がり 底部内側へラ切り	外 / 暗青灰色 内 / 暗青灰色	1mmまでの白 色砂粒を若干 含む		
54	S D 0 1 下層		-	-	外面部底部ナメて立ち上 がる	暗灰色 (外面 に黄白色の目 を若干含む 然粒)			
55			10.4	-	低い立ち上がり	外 / 暗灰色 内 / 灰色	密		
56			11.8	-	直立気味の立ち上がり	暗青色	白色小砂粒少 量含む		

補圖 番号	出土地点	器種	法 線 cm		形態・手法の特徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
			口径	底径					
57	SD 01 下層	須恵器身	11.4	-	低い立ち上がり	灰色	1mm以下の白 色粒少量	良 好	
58			10.4	-	直立な縁のやや高い立 ち上がり 下半回転ヘラケズリ		1mm大の砂粒 を多量に含む		
59	SD 01 下層	須恵器身	12.4	-	扁平な製品 下半回転ヘラケズリ	青灰色	1mm以下の白 色粒少量		
60			11.5	-	やや高い立ち上がり 下半回転ヘラケズリ	淡灰色	密、白色小砂 粒をわずかに 含む		
61	SD 01 下層	須恵器身	11.4	-		青灰色	3~5mm大の 砂粒を点々と 含む	良 好	
62			9.8	-	短く直立する口縁	灰白色	密		
63					扁平な体部、内側カキ メ	淡青灰色	密、白色小砂 粒少量		
64	SD 01 下層		-	-	くびれる腹部から大き く開く口縁	外 / 青灰色 内 / 紫灰色	密		
65	SD 01 下層	須恵器高杯	-	10.6	-	縁面を上方に引き出し 下端面を作る脚	暗青灰色		
66	土器器身		17.9	-	くじら字に折れ曲がり 外方へ大きく広がる口 縁部	淡褐色	1mm大の茶褐色 色、暗褐色砂 粒を多く含む		
67			19.1	-		黄茶褐色	1mm以下の砂 粒を多く含む		
68			23.0	-		外 / 淡黃褐色 内 / 淡褐色	1mm前後の砂 粒を多く含む (褐色、白色 半透明)		
69	SD 01 最下層		25.3	-	「くじら」字に折れ 外方へ大きく広がる山腹部 縁部外面タテハケ、内 側傾方向のヘラケズリ	淡茶褐色	1mmまでの砂 粒を多量に含 む		
70	SD 01 下層		28.9	-		黄灰白色	1mm前後の茶 色、褐色、灰色 の砂粒を多く含 む		
71	SD 01 下層		20.4	-		淡黃灰褐色	1mm未満の砂 粒(白色、灰色 一帯灰色、半 透明等)を多 く含む		
72			20.3	-		淡茶色	1mm未満の砂 粒多		
73			21.2	-		淡褐色	1mm大の砂粒 を多量に含む		
74			20.9	-	立ち上った後に折れ 曲がる口縁	白色小砂粒を 含む			
75	高 杯	17.1	-	-	屈曲して開く杯部。 内外面ヘラミガキ	外 / 棕色~ 褐色 内 / 淡褐色	密、白色小砂 粒少量		

標識 番号	出上地点	岩種	法量 t		形態・手法の特徴	色調	射上	焼成	備考
			U径	底径					
76	SD01下層	純	14.6	-	やや深めの体部 内面放射状のヘラミガ キ	淡茶褐色	密、白色砂粒 (1mm前後)を 若干含む	良 好	
77			13.8		やや深めの体部 内面へラケズリ	茶褐色	1mm前後の白 色及ぶ灰褐色 砂粒を含む		
78	SD01下層	變	13.0	-	短く直立して立ち上がる 口部。外面タテハケ。 内面横方向へのラ ケズリ	外/淡褐色 内/灰褐色 口縁底赤色	密、1~2mm までの砂粒少 量		外面、口縁内面 に赤色塗装
79	SD01下層	カマド	-	-	焼き口ひし部分	褐色	密、1mmまで の白色砂粒を 含む		
80			-	-	上端受け削。 外面タテハケ、内面へ ラケズリ。 口縁内外面ヨコナデ	外/暗灰色~ 暗灰色 内/暗褐色 類部以下暗 褐色(スヌ)	1mm前後の砂 粒(白色、半透 明)を多く含 む		
81			-	-	板端部。内外面へラケ ズリ	棕褐色	1mmまでの白 色砂粒を含む		
82			-	-	端部。外面ナゲ、内 面へラケズリ	淡茶褐色	1mm前後の砂 粒(白色、半透 明、透明)を多 く含む		
83	コシキ	-	-	-	把手。角状に上に向く	茶褐色	1~2mmの大 きな白色砂粒を多 く含む		
84			-	11.4	底部。残を受ける円孔 がある。外面タテハケ 内面へラケズリ		1mmまでの白 色及ぶ灰褐色 砂粒を多く含 む		
85	SD01西上端	石製粘土車	上底 2.7	底面 5.3	3.0t 標本とした標則	孔径 0.7 cm、山形の文 様	灰白色 砂岩質の石材	-	残存重量 35 s

## S D 0 2

86	SD02	變	21.0	-	口縁外面にクシ状工具 (貝巻線)による平行 線文	淡赤褐色	1mm前後の砂 粒かなり含む	普通	外面一部スス付 着
87			24.0	-	口縁下半にクシ状工具 による平行線文		1~2mmの砂 粒非常に多い		
88	SD02標則		17.3	-	全体に厚手。肩部に目 立つ縦縞による列点文	外/淡褐色 内/乳灰褐色	1mmくらいの 砂粒多い、2 mmくらいのも のもある		
89	PG-2SD02		14.9	-	複合口縁。口縁比較的 高く立ち上がる	黄褐色 外側一部黑色	0.5mmくらい の砂粒多い、 1mmくらいの ものもある	良 好	
90	SD02		17.1	-		淡赤褐色	1mm以下の砂 粒多い	やや不良	
91	GH-5標		12.4	-		灰褐色	全表面目立つ 石英、長石	普通	
92	SD02		14.5	-		内/乳黄色	1mm前後の砂 粒多い、0.5 mm前後非常に 多い	やや不良	外面全体にスス が付着していた と思われる

調査番号	出土地点	器種	法量 km			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底深	器高					
93	H-1 排水路下構造	小壺	5.0	-	-	縁を保有したもの。肩面に列点状線。下部はヨコ方向のヘラミガキ	黄褐色～灰色	石英、長石の粗粒粒状	良好	通常、木の薪で窯をしていたものが、器の表面に見える
94	G-1 SD 02	壺	7.9	-	-	口縁部は近く内傾する	灰褐色	1~0.5mmの砂粒含む	普通	
95	H-5 壺	壺	35.7	-	-	大方品。複合口輪部が外方に突出。口縁部は水平面をなす	淡灰色	やや青、1~2mmの石英含む		
96	SD 02		18.0	-	-	口縁部は近く内傾する 厚手	淡褐色	0.5mm以下の砂粒多く含む	良好	
97	底 部	-	-	-	-	かすかに平底をとどめる。内外面ハケ	外/黒色 内/乳褐色	-	-	
98	GII-5 壺	低脚杯	-	-	-	腹部に円形の通し	外/淡褐色 内/淡褐色	1mm前後の石英、長石、漂泥をかなり含む	やや不良	透したり 内/薄くスヌ付着
99	SD 02	高 杯	-	14.0	-	大きく広がる輪廓部。 長い脚部をもつ	外/淡褐色 一部黒灰色 内/黒灰色 一部淡褐色	0.5mm以下の砂粒多い。1mm前後のものもみられる		
100			-	15.6	-		淡褐色	0.5~1.0mm砂粒多い。 1.0mm以上の物もみられる	不良	
101		鉢形器台	-	-	-	上台、下台間の間隔比 較的広い	淡褐色	1mm前後の砂粒多い。2mmくらいのものもみられる	やや不良	
102			24.1	-	-	上台、下台間の間隔比 狭い		1mm前後の砂粒多く穴だらけ。 2mmくらいの物もみられる	普通	外面黒色を呈する
103	GH-5 壺		18.8	-	-			石英	良好	
104	面壁排水路		-	-	-		外/暗灰褐色 内/灰褐色	1mmまでの長石、石英粒を多量に含む	普通	
105	SD 02		-	16.4	-		汚れた肌色	1mm以下の砂粒多い		
106	GII-4 壺		17.5	15.2	9.5	やや厚手の製品。外側は タテのヘラミガキで仕上げる	暗褐色	石英、長石の 0.1mm程度のもの含む	良好、堅敏	
107	SD 02		-	18.5	-	上台、下台間の間隔比 較的狭い	灰褐色	0.5mm以下の砂粒とても多い。 1mmくらいの物もある	良好	
108	GH-5 壺	壺	14.9	-	-	單純口縁。口縁外側 ハケメ。体部外側右上 ばかりのタタキ。内面ナ ゲ	外/淡褐色 内/淡灰褐色 ～淡褐色	1mmまでの長石、石英、漂泥等含む		
109			11.2	-	-	体部外側右上に ばかりのタタキ。内面ハケメ	外/淡褐色	石英を含む	不良	
110	G-5 壺		13.4	-	-	單純口縁。周囲水平の タタキ。体部右上ばかり のタタキメのちハケ 内面ヘラでなでるか	外/肌色 内/淡灰褐色	5mm大の火色 砂粒。2~3mmの 粗粒分粒 1~2mmの淡 褐色砂粒。1 ~2mm白色砂 粒	良好	外/体部下半に スヌ付着

標図 番号	出上地点	器種	底 口徑 底深 器高		形態・手法の特徴	色 調	胎 上	焼 成	備 考	
111	排水路	壺	17.2	-	単純口縁。肩部水平のタクシ。のちテハケ。内面ナダ	外 / 始赤褐色 ～暗灰褐色 内 / 暗赤褐色	密、1～2mm 砂粒かなり 多量に含む	やや不良		
112	西壁排水路		-	-	外唇同部ナダ。底部付近ハケ。内面ハケのちナダ	外 / 茶色～黒 褐色(スヌ)	密、白色、茶褐色 少	良好		
113	G-2種		-	4.0	底部。外唇右上りのタクシ。内面ハケ。底部粘土接着痕あり。円状になる	暗灰褐色	密、黄褐色 若干			
114	G-1 SD 02 底 部		-	4.3	平底。内外面ナダ	外 / 黑色 内 / 黄褐色	1～2mmの砂 粒含む	普通		
115	SD 02 GH-4種	壺	17.5	-	單純口縁。口縁端を内側に肥厚させる	外 / 灰褐色 内 / 暗赤褐色	石英、長石の 砂粒含む	良好	外面上半スヌ付 着	
116	SD 02	小形丸底壺	10.3	-	比較的長い口縁部。外 面ヨコナギ、底壳ハラ ケズリ。内底部細かいハケメ	内 / 淡赤褐色	砂粒特多い 0.5～1mmの もののみられる	普通		
117	G-5種		9.5	-	比較的長い口縁部。体 部外側にハケメ	暗赤褐色	密	良好		
118			10.3	-	8.2	茶灰褐色	微小な長石、 石英			
119	G II-5種 西壁排水路北方	小形器台	12.7	10.0	9.1	外面タケ方向のヘタミ ガタ。内面シボリメ。 三方透し	乳白色	#2mm後の 砂粒含む。あず き色の粒子含 む	普通	
120	SD 02	高 杯	-	14.2	-	外側一面内面ヘラミガ ナ。三方透し	乳褐色	0.5～1.0mm の砂粒少しあ る		
121	南西側壁層		16.4	-	-	深く開曲する杯形。唇 部凹部ヘラによる4条 の凹部	淡肌色	1mm前後の茶 色砂粒を多量 に含む	良好	
122	G-1 SD 02		-	-	-	直線的に大きく聞く唇 形。4方透し	灰褐色	1mm前後の砂 粒多。2mm 位の物もある	普通	
123	G II-4種	須恵器壺	-	-	-	口縁輪に平坦面。外面 に縦下に隆起。クシによる 波状の文様	外 / 黑灰色 内 / 粒がかった 灰褐色	密	良好	

### S D O 3

124	SD 03	壺	32.2	-	-	口縁に4条の凹線。肩 部に2段の外点	暗褐色	1mm前後の砂 粒含む。0.5 mmくらいのもの が多い	普通	外 / スヌ付着
125			16.1	-	-	口縁に3条の凹線。肩 部に外点	灰褐色	1mmくらいの 砂粒少しこら れる。微細砂 粒多い	良好	外 / スヌ付着
126			18.5	-	-	口縁に4条の凹線	淡褐色	1～0.5mmの 砂粒含む	やや不良	外 / 口縁部スヌ 付着
127			17.9	-	-	口縁に8条の凹線	淡灰褐色	1mm以下の砂 粒少しある	普通	外一面スヌ付 着
128			16.0	-	-	口縁に目盛窪線による 凹線	乳褐色	1mmくらいの 砂粒多い		外 / スヌ厚く付 着

編目 番号	出土地点	器種	法量 cm		形態・手法の特徴	色調	胎土	機成備考	
			11径	底径				外 / 全面にスス付者	
129	SD 63	盤	23.9	-	口縁にクシ彫きの平行沈線。下部はナデて削す。	淡灰褐色	1~2mmの砂粒多く含む	普通	外 / 全面にスス付者
130			32.0	-	口縁に貝殻模様による外 / 淡赤黄色 沈線。上部ナデて削す。	外 / 淡赤黄色 内 / 灰色	1mm以下の砂粒多い。 1mm以上のものも多い	やや不良	
131			18.0	-	口縁に貝殻模様による灰褐色 沈線	灰褐色	0.5mmくらいの砂粒がごく少含みられる きめが細い	普通	外 / スス付者
132			18.1	-			1mm前後の砂粒含む	不良	
133			18.0	-	口縁外面文様なし。内 / 外 / 淡赤黄色 面ヘラミガキ	内 / 灰褐色	1mm以下の砂粒少し含む	良好	
134			36.0	-	口縁外唇にクシ状工具による波状	淡赤黄色	0.5mm以下の砂粒非常に多い	やや不良	
135	盤	18.2	-	-	口縁外面に3条の凹唇。浅い凹唇 頭部に刺突文	浅い褐色	1mm前後の砂粒多い	普通	
136			24.2	-	ラッパ状に聞く口縁部。淡赤褐色 端面に4条の三線	淡赤褐色	1mm程度の砂粒含む		
137	盤			-	肩部に連続する刺突文	淡灰褐色	1mm以下の砂粒多い		
138			20.2	-	單純口縁。端面にナデによるアクセント	暗赤褐色	1mm前後の砂粒多く含む	内外面に一部スス付者	
139	鼓形器台			-	外面貝殻模様による平行沈線。肩部、内面へ ラミガキ	淡褐色	1~2mmの砂粒少し含む	やや不良	
140				-		赤褐色	1mmくらいの砂粒含む		
141			-	17.6	-	下台部外面貝殻模様による平行沈線。内面へ ラミガキ	暗褐色	1mm以下の砂粒多い。2mmくらいのもの も含む	普通
142				15.4	-	上台、下台間比較的幅約	淡褐色	断面には1mm以上 の砂粒も含む	
143	脚付鉢	20.6	-	-	大筋で深い杯底。外面 ハゲメ。内面暗文状の ヘラミガキ	淡黄褐色	0.5mm以下の砂粒多い	良好	
144	盤	18.0	-		複合口縁。薄く引き出 したような口縁部	内 / 灰褐色	0.5mm以下の砂粒含む	普通	外 / スス付者
145			20.2	-		外 / 淡褐色 内 / 灰褐色	0.5~1.0mm 以下の砂粒多い	やや不良	
146			16.2	-	複合口縁。口縁端部丸くおさめる。肩部に貝殻模様による平行沈文 と文様帶	淡黄褐色	0.5mm以下の砂粒多い	普通	外山一形スス付者
147			19.0	-		外 / 黒褐色 内 / 灰褐色	1~2mmの砂粒多い	やや不良	

標名 番号	出土地点	器種	法 量			形態・手法の特徴	色 調	胎 上	焼 成	備 考
			11径	底深	器高					
148	SD 03	甕	25.9	-	-	複合口縁。比較的高い口縁部は端部を外方に折り曲げる	淡黄褐色	2mmくらいの砂粒少し含む。1mm以下のもの多い	普通	
149			19.6	-	-		乳褐色	0.5mm以下の砂粒多く含む	やや不良	外面一部にスス付着
150			14.9	-	-	複合口縁。口縁端面に1条の沈線	外/淡肌色 内/淡肌色~汚れた肌色	0.5~1mmの砂粒多く含む	不良	外/一部スス付着
151			13.2	-	-	複合口縁。口縁端丸くおさめる	外/淡赤褐色 内/褐色	0.5mm以下の砂粒多い		
152			15.0	-	-	複合口縁。口縁端をわずかに内側に折り曲げる	乳褐色	1mm以下の砂粒多い	やや不良	
153			13.9	-	-	複合口縁。口縁端に平坦面をつくる	外/沙色 内/淡赤灰褐色	1mmくらいの砂粒少し含む それ以下のもの多い	普通	外/一部スス付着
154			17.4	-	-		明るい茶色	0.5mm以下の砂粒多い。1mm以下のものもある	やや不良	
155	SD 03上層	甕	-	-	-	かすかな平底。外面ハケめか。内面ハケズリ。底部に指痕压痕	内/ごく淡い赤褐色	1mm以下、特に0.5mm以下に砂粒非常に多い。	不良	外/全体にススが付着していたと思われる
156	SD 03	甕	14.6	-	-	單純口縁。口縁内外ハケ。体部外面上に凹りのタック。内面ケズリのち粗いハケ	外/灰褐色 内/淡褐色	長石、石英、茶褐色の粒子	良好	外/一部スス付着
157			10.9	-	-	單純口縁。端部を内側に膨張させる	灰褐色	0.5mm以下の砂粒を少含む		
158			15.0	-	-	單純口縁。端部は丸くおさめる	淡褐色	0.5mm以下の砂粒少し含む 全体的にち密である	やや良好	
159			15.8	-	-	单純口縁。端面に1条の沈線。兩端を内側に肥厚させる	淡灰褐色	石英、長石の細砂粒含む	普通	
160			18.8	-	-	單純口縁。端部丸くおさめる	灰色	0.5mm以下の砂粒多い	やや不良	
161			14.1	-	21.6	複合口縁。比較的低い。口縁は端部を折り曲げ、半円形をつくる。球形に近い体部	黃褐色	石英の細砂粒含むが、比較的密	良好	口縁部に向する位置に黒斑あり。 火にはかかなかったものかスス付着す。底部穿孔
162		甕	12.7	-	-	短く内傾する口縁	乳褐色	0.5~1mmの砂粒含む	普通	
163			22.1	-	-	複合口縁。口縁端は外方に折り曲げる。底部に網状文	淡褐色	0.5~1mmの砂粒非常に多い		
164			-	-	-	内外面ハケメ。内面端部下に指痕压痕	外/乳褐色 内/灰褐色	0.5mm以下の砂粒非常に多い	やや不良	
165			-	-	-	腹部片。「S」「O」のスタンプをおす	淡赤黃褐色	0.5mm以下の砂粒非常に多い	普通	

機器 番号	出土地点	器種	法 量 (cm)		形態・手法の特徴	色 調	胎 土	機 成 備 考	
			口径	底径				吉 通	外側一部スヌ付 否
166	S D O 3	壺	20.1	-	複合口縫。口縫端を折り曲げ縫部に平坦面をつくる	汚れた黄褐色	0.5~1.0mmの砂粒を多く含む		
167			25.1	-	複合口縫。口縫端を外方に折り曲げる。颈部ハケ原体による刺突	乳白色	1mm以下の砂粒多い		
168			26.1	-	複合口縫。颈部をくぐ。口縫端、肩部に円形原体。肩部、口縫内面に網状文	口縫 / 乳白色 外 / 淡茶褐色 内 / 乳白色	φ 1mm前後の丸粒のもの含む。角のそれた丸粒立つ。底部薄色の粒多い	やや不良	口縫 / 内側黒斑 あり
169		壺	10.5	-	「く」の字に外方へ折り曲げた口縫。端部丸くおさめる	外 / 黒灰色 内 / 淡褐色 (肌色)	1mm以下の砂粒多く含む	吉 通	
170		底 部	-	3.2	内凹になる小形品の底部	外 / 灰褐色 内 / 灰色	1~3mmの砂粒含む	不 良	
171		短 扇 盆	6.3	-	短く直立する口縫をもつ小形の壺。肩部に文様がある	淡赤黄色	1mm前後の砂粒多く含む	やや不良	
172		壺	8.0	-	短く折れ曲がる口縫。端部は丸くおさめる	灰褐色	微細砂粒多い		
173		底 部	-	5.3	平底。調整不明	淡灰褐色	1mmくらいの砂粒少しある		
174			-	4.4	平底。外山ヘラミガキ。内面ハケ	灰褐色 内面は少し白っぽい	微細砂粒多い 1mmくらいのものもある	吉 通	
175		高 杯	16.2	-	ゆるやかに屈曲して開く杯形。内山底部放射状のヘラミガキ	暗黃褐色	0.5mm以下の砂粒多い。1~2mmのものもみられる	やや不良	
176			15.8	-	外表面横方向のヘラミガキ。内面放射状のヘラミガキ	淡黄灰褐色	1mmまでの細かい砂粒を多く含む	良 好	
177			-	10.4	中空の脚柱	淡赤褐色	微細砂粒多い 1mm~1.5mmくらいのものもごく少量	吉 通	
178			-	-	中実の脚柱。外山タテ方向のヘラミガキ	灰褐色	1mm以下の砂粒多く含む	やや不良	
179			-	-	穿孔のある高脚杯。外面はタテ方向のヘラミガキ	外 / 朱色 内 / 乳白色	1mmくらいの砂粒含む。 0.5mm以下のもの多い	良 好	外山、杯内面に赤色塗彩
180			-	-	大形品の脚柱瓶。外山タテのヘラミガキ。内面ヘラカズリ	淡黃褐色	1mmくらいの砂粒多い。 1.5mmくらいのものもある。	吉 通	
181		小形 器合	10.0	-	浅い受盤。上端は短く立ち上がる。内外面ヘラミガキ	淡褐色	1mm以下の砂粒含む 口縫部外周褐色		
182		高 杯	-	-	杯底部から開曲して大きく聞く脚部。透し穴數不明	外 / 淡褐色 内 / 淡褐色	0.5~1mmの砂粒非常に多い	不 良	
183			-	-	穿孔のある脚柱。内外面ヘラミガキ	乳白色	微細砂粒多く含む	やや不良	
184		低 鞘 杯	11.1	4.5	比較的小ぶりな脚に浅い脚が接合する	淡赤褐色	1mm前後の砂粒多い		

標印 番号	出土地点	器種	法量		形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径					
185	S D 0 3	低脚杯	-	-	比較的小ぶりな脚に浅いサルが摺合する	灰褐色	0.5 mm以下の砂粒含む	普通	
186		鼓形器	28.6	-	大形の器。外表面ヨコナメ。上台内面はラミガキ。下台内面ハラケザリ。底部内面は粗面となる。186, 187は同一個体の可能性あり	淡赤黄褐色	2~3 mmの砂粒もみられる 1 mm以下のもの多い		
187			-	24.2	-	赤褐色		良好	
188		コシキ	14.0	-	コシキ形土器口縁部か。直立する口縁	外/淡褐色 内/淡灰褐色	1~1.5 mmの砂粒含む。1 mm以下のもの多い	普通	
189			-	2.4	透円錐形を呈する。内外面ハケメ	淡赤褐色	1 mm以下の砂粒含む		
190		茶筒	23.0	-	U縁、腹部各部に平滑面をつくり、表面による刷毛で擦る。「U」字形スタンプは口部外側	外/口縁褐色 石英、長石、磁色、口縁以降褐色~淡黃褐色	石英、長石、磁石含む	良好	
191		ハニワ	-	-	タテ方向のハケメ。内面U具によるヨコナメ	淡褐色	大粒の石英、長石含む		内面に赤色顔料をとどめる
192			-	-	高いタガをもつ。外表面上がりナメのハケメ。内面丁寧なナメ		石英、長石の比較的大粒のもの含む		外面上赤色顔料を帶びる

### 吉備系土器

193	S D 0 2	吉備系壺	19.9	-	直立に近い口縁外間に6条の沈線。器表には同様の沈線。内外面ラミガキ	褐色	金質母、黒色の光沢ある砂粒含む。比較的薄	良好	外面、口縁部分赤褐色
194	E-4 磁灰粘		-	-	鶴脚。外面タテハケのち、ヘラによる沈線	明淡褐色	密、白色小砂粒を少量含む		
195	北壁排水路		-	-	平行沈線を欠く。内外面ヨコナメ	淡褐色	密、白色小砂粒を含む		淡赤茶色の顔料を内外面に塗影
196	E-4 磁灰粘		-	-	鶴脚。外面タテハケのち、ヘラによる沈線	内/灰褐色 外/暗褐色	1 mm前後の白色砂粒を多く含む		外面赤色顔料塗影
197	H-2, 3+5		23.8	-	口縁部を折り上げ、その横面に4条の平行沈線。内外面タテハケメ	外/暗褐色 内/暗褐色~黑色	黒色の細砂粒、金質母含む		
198	F G - 4 磁 灰色粘		26.0	-	複合口縁。U縁部直立してから立ち上がる。内面にカキメ状のハケメ	淡褐色	長石細砂粒立つ		内外面とも赤色塗影
199	南西隅罐		25.1	-	大きく開くU縁。底部を折り曲げ平面面を作る。外表面ヘラミガキ。内面ハケのチナメ	外/茶灰色 内/灰褐色	1 mm前後の砂粒を多量に含む(白色、灰色、褐色、黑色)		
200	S D 0 2 磁器		-	-	鶴脚。外表面はタテ方向のヘラミガキ。内面はヨコ方向のヘラケザリ	暗褐色	石英、長石、黒色の光沢ある石、赤色の粒子含む	普通	外面赤色塗影

「十」は土器番号

## S X 0 3

検査番号	出土地点	器種	法 藝 号		形態・手法の特徴	色 調	胎 上	施 成	備 考
			口徑	底径					
201	D-2+3上 SX01基盤内 C-2黒褐	壺	19.4	-	複合口縫。口縫端に平 坦面をつくる	外/灰白色~ 淡赤褐色 内/淡赤褐色	φ1cm以下の 石英、長石、 金雲母含む	普通	
	D-2+3土 D-2+3上④ SX01 SX01基盤内 D-3黒褐 D-2黒褐 C-2黒褐				複合口縫。長く立ち上 がる口縫部。複合口縫 部上方にたれる。肩部 に波状の文様	淡赤褐色	φ1cm前後の 長石目立つ	不良	
202	D-2+3上 D-2 SX01 SX01基盤内		22.3	-	複合口縫。長く立ち上 がる口縫部。複合口縫 部上方にたれる。肩部 に波状の文様	黑っぽい赤褐色	石英、長石の 細粒粒多	やや不良	
	D-2+3上④ D-2 SX01 SX01基盤内				複合口縫。長く立ち上 がる口縫部。肩部に斜突 文	黑っぽい赤褐色	石英、長石の 細粒粒多		
203	D-2+3上 D-2 SX01 SX01基盤内		23.3	-	複合口縫。長く立ち上 がる口縫部。肩部に斜突 文	灰褐色	石英、長石の 細粒粒多	やや不良	
	D-2+3上④ D-2 SX01 SX01基盤内				単純口縫。端部に1条 の状様	灰褐色	石英、長石の 細粒粒多		
204	D-2+3上④		15.0	-	単純口縫。端部に1条 の状様	灰褐色	石英、長石の 細粒粒多	普通	
	D-2+3上④				単純口縫。端部丸くお さめる	淡褐色	石英、長石の 細粒粒多		
205	D-2+3上④		15.9	-	複合口縫。長く立ち上 がる口縫部。端部に半円 面をつくる	外/淡褐色 内/黃褐色	石英、長石の 細粒粒多	普通	外面スス付着
	D-2+3上④				複合口縫。内側する口 縫部。口縫端は外方に 屈曲折り曲げる	灰褐色	石英、長石の 細粒粒多		
206	D-2+3上④		17.5	-	大形の製品。やや薄い 杯底。内外面ともヘラ ミガキ	赤褐色	石英、長石の 細粒粒多	良好	外側赤色顔料塗 布か。外側スス付 着
	D-2+3上④				長い筒状の脚部。外面 ヘラミガキ	赤褐色	石英、長石の 細粒粒多		
207	D-2+3上④	壺	15.6	-	長い筒状の脚部。外面 ヘラミガキ	灰褐色	石英、長石の 細粒粒多	良好	赤褐色を呈する 色調は二次施成 を受けたための ものか
	D-2+3上④ D-2+3上④ D-2+3上 C-2黒褐				直筒的。外側に1本線の 脚部。外側ヘラミガキ	赤褐色	石英、長石の 細粒粒多		
208	D-2+3上④ D-2+3上④ D-2+3上 C-2黒褐	杯	27.0	-	直筒的。外側に1本線の 脚部。外側ヘラミガキ	赤褐色	石英、長石の 細粒粒多	良好	外側赤色顔料塗 布か。外側スス付 着
	D-2+3上④ D-2+3上④ D-2+3上 C-2黒褐				直筒的。外側に1本線の 脚部。外側ヘラミガキ	赤褐色	石英、長石の 細粒粒多		
209	D-2+3上④ C-2黒褐 D-2黒褐		25.8	-	直筒的。外側に1本線の 脚部。外側ヘラミガキ	淡褐色	φ1cm以下の 石英、長石、金 雲母含む	やや不良	
	D-2+3上④ D-2黒褐				直筒的。外側に1本線の 脚部。外側ヘラミガキ	淡褐色	石英、長石の 細粒粒多		
210	D-2+3上④ D-2黒褐		-	-	直筒的。外側に1本線の 脚部。外側ヘラミガキ	淡褐色	石英、長石の 細粒粒多	良好	内面に5本線の ヘラ記号
	D-2+3上④ D-2黒褐				直筒的。外側に1本線の 脚部。外側ヘラミガキ	淡褐色	石英、長石の 細粒粒多		
211	D-2+3上④		-	-	直筒的。外側に1本線の 脚部。外側ヘラミガキ	淡褐色	石英、長石の 細粒粒多	良好	
	D-2+3上④ D-2黒褐				直筒的。外側に1本線の 脚部。外側ヘラミガキ	淡褐色	石英、長石の 細粒粒多		
212	D-2+3上④ D-2黒褐		-	-	直筒的。外側に1本線の 脚部。外側ヘラミガキ	淡褐色	石英、長石の 細粒粒多	普通	内面に5本線の ヘラ記号
	D-2+3上④ D-2黒褐				直筒的。外側に1本線の 脚部。外側ヘラミガキ	淡褐色	石英、長石の 細粒粒多		
213	D-2+3上 D-3黒褐		-	-	直筒的。外側に1本線の 脚部。外側ヘラミガキ	淡褐色	1mm以下の砂 粒含む	良好	
	D-2+3上 D-3黒褐				直筒的。外側に1本線の 脚部。外側ヘラミガキ	淡褐色	1mm以下の砂 粒含む		
214	D-2+3上④ D-2黒褐		-	-	直筒的。外側に1本線の 脚部。外側ヘラミガキ	淡褐色	細粒な砂粒多	やや不良	
	D-2+3上④ D-2黒褐				直筒的。外側に1本線の 脚部。外側ヘラミガキ	淡褐色	細粒な砂粒多		
215	D-2+3上 D-2+3上④ SX01基盤内 C-2黒褐	低脚杯	21.8	-	直筒的。外側に1本線の 脚部。外側ヘラミガキ	淡褐色	φ1cm以下の 石英、長石含む	やや不良	
	D-2+3上 D-2+3上④ SX01基盤内 C-2黒褐				直筒的。外側に1本線の 脚部。外側ヘラミガキ	淡褐色	φ1cm以下の 石英、長石含む		
216	C-2黒褐 C-3黒褐 D-2黒褐 D-2+3黒褐		23.5	-	大形の製品。わずかに 内側する杯底。外側ヘ ラミガキ。内面放射状のヘラ ミガキ。脚接合時の刻 み目が見える	淡褐色	1mm前後の砂 粒を多く含む	良好	
	C-2黒褐 C-3黒褐 D-2黒褐 D-2+3黒褐				大形の製品。わずかに 内側する杯底。外側ヘラ ミガキ。内面放射状のヘラ ミガキ。脚接合時の刻 み目が見える	淡褐色	1mm前後の砂 粒を多く含む		

「上」は上部取りの跡

標図 番号	出土地点	器種	法量			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	高さ					
217	D-2・3±	上台、下台間密接した ものの上台端面は平坦 面をつくる	21.2	18.8	10.3	外/淡褐色 内/黄褐色~ 淡褐色	石英、長石の 細粒物質	普通		
218	D-2・3±④ D-2・3±⑤	人形の製品。上・下台 間密接する。端部丸く おさめる	24.7	21.4	11.8	淡赤褐色	1mmまでの小 砂粒を含む	良好		
219	D-2・3±② D-2・3±④ D-2・3±⑤	極大型の製品。上・下 台間密接。端部に平坦 面をつくる	24.3	22.4	11.8	淡赤褐色	1mmまでの長 石、石英を多く含む	おおむね良 好		
220	D-2・3±① D-2・3±④ C-2 黒褐色 C-3 黒褐色 D-2 黑褐色 D-3 黑褐色 S X 0 1	複合口縫。薄く引き出 したような口縫	31.7	28.1	13.9	赤褐色	石英、長石の 細粒物質多い	普通		赤褐色の色調は 二次的に施されたものか

### S X 0 6

221	C + D - 4±③	壺	17.5	-	-	複合口縫。薄く引き出 したような口縫	淡灰褐色	1mmまでの長 石、石英を含む	やや不良	
			15.1	-	-	複合口縫。口縫端を丸く おさめる	黄灰褐色	1mm以下の 石英目立つ	普通	
223	D + E - 3±④		16.0	-	-	複合口縫。口縫端は外 に折り曲げる。肩部に 縫に斜刻突	灰褐色	小砂粒を含む (白色、金色、 灰色)	良好	
224	D + E - 3±③		18.8	-	-	複合口縫。口縫端は外 に折り曲げる。肩部に 縫に波状突	白褐色 (口縫端 黒褐色)	1mmまでの長 石、石英を多く含む		
225	D - 4±②		14.7	-	-	複合口縫。薄く引き出 したような口縫端。肩 部平行線文	淡褐色	1mmまでの長 石、石英		
226	D + E - 3±③ D + E - 3±④ ①~④一括		15.7	-	-	複合口縫。薄く引き出 す口縫端。肩部に縫な 平行線文	外/淡褐色 内/黄褐色~ 淡褐色	石英、長石を 1mm以下の砂 粒含む	普通	
227	D + E - 3±④		15.3	-	-	複合口縫。比較的短い 口縫端を丸くおさ める	外/灰褐色~ 褐色 内/黃褐色	石英など細砂 粒含む	良好	外表面スス付着
228	D + E - 3±③		21.3	-	-	複合口縫。比較的長い 口縫端。端部は斜 り曲げ、平滑面をつ くる。肩部に斜刻突	外/灰褐色~ 褐色 内/淡褐色	石英、長石を 1mm以下の砂 粒の目立つ		
229	D - 4±①		14.1	-	22.8	複合口縫。短く立ち上 がる口縫端はわずかに内 傾。かすかな平底	淡黄褐色	細粒物質含む あざき色の砂 粒	普通	下半にスス厚く 付着
230	D - 4±② D - 4±灰褐色		22.1	-	34.6	複合口縫。高い口縫形。 端部は平山形をなす。 かすかな平底	石英砂粒(φ 1mm以下)目 立つ			外表面肩部以下ス ス付着
231	D - 3± D + E - 3±④	高	12.8	13.8	9.8	やや深く杯部に昌曲し て開く漏斗形。4方削 か	淡灰褐色	細かい砂粒を 含む	やや不良	赤褐色の顔料染 み
232	S X 0 6	小形丸底鉢	17.4	-	-	縫をもつ口縫端から周 辺してやや深め杯部に いたる	外/淡灰褐色 内/灰色	石英、長石目 立つ	普通	
233	D + E - 3±④ D + E - 3±③	高	16	22.9	-	丸味をもった杯部。輪 状内面接合時の深い割 れ	淡褐色~乳灰 色	小砂粒を多く 含む		

「土」は上蓋滑りの略

牌号 番号	出土地点	器種	法 番 kai			形態・手法の特徴	色 調	胎 上	焼 成	備 考
			口径	底径	器高					
234	D・E-3土①	鼓形器台	21.7	-	-	比較的高い上台部。内面ヨコ方向のヘラミガキ	外 / 淡灰褐色 内 / 淡褐色	石英、長石など 約1mm以下の 大粒の砂粒 多い	不良	
235	C・D-4土⑥		-	18.5	-	比較的低い下台部。端部に半円面をつくる	淡褐色～灰褐色	2mmまでの砂 粒を多量に含む (長石、石英、 茶色砂粒)	良好	

### S X 0 8

236	SX08ピット内	甕	23.5	-	-	複合口縁。貝殻像2 単位による平行沈線	乳白色	φ1mm前後の 人粒の石英、 長石含む	普通	
237	SX08ピット上面	器 台	36.5	-	-	人形の製品。上下に拡 張した端部に凹溝。内 面細かいヘラミガキ		石英、長石の 細粒を含む	良好	
238	鼓形器台		-	-	-	大型の製品。上台部。上台 黄褐色 下端は下方にたれ下がる 内面細かいヘラミガキ				

### S X 0 9

239	SX09	鼓形器台	34.5	-	-	人形の製品。高い上台。 上台下端具足による2 段の創突文	外 / 赤褐色 内 / 黄褐色～赤 褐色	石英、長石な ど約1mm前後 のもの含む	普通	
240		高 杯	-	-	-	人形の製品。裏外面へラ ミガキ。斜内面凹凸状の ヘラミガキ。3方透し	外 / 黄褐色～ 淡赤褐色 内 / 淡赤褐色	金星母、石英、 長石の粗粒を 含む。土は精 選されたもの	良好	

### S X 1 0

241	SX10	甕	17.9	-	36.7	單純口縁。わずかに内 側して直線的に立ち上 がる。球形の体形。外 面は細かいハケメ。内 面へラケズリ	外 / 茶色～淡 赤灰色～灰 色～黒灰色 内 / 茶色	1~3mmの厚 さとした円錐を 多量に含む	やや不良	
-----	------	---	------	---	------	--	--------------------------------------	-----------------------------	------	--

### S B 0 1

242	SK11(SH01)	甕	16.9	-	-	複合口縁。薄く引き出 す口縁。端部丸くおき める	赤味がかった 淡褐色	石英、長石の 細粒を含むが 少	良好	外面スス付着
243	SK06(SB01)	鼓形器台	-	18.2	-	上・下台面比較的高い。 下台部比較的高い	灰色がかった 淡青褐色	石英、長石、茶 色の粗粒な り目立つ	やや不良	
244	SK05(SH01)	低 様 杯	10.9	5.7	4.7	小ぶりな厚手の杯形。 やや深い。直線的に開 く脚部	淡青灰色～灰 褐色	石英、長石の 人粒の粗粒を 含む		

### S B 0 2

245	SH02	甕	16.2	-	-	やや厚手の口縁部。端 部かすかに折り曲げ、 平坦面をなす	肌色 断面 / 黑灰色	白色微砂粒を 含む	良好	
246		高 杯	14.4	--	-	厚手の小ぶりな杯形。 外 面かすかにハケメ	茶褐色	白、白色小砂 粒を含む	やや不良	
247		壺	8.2	-	-	口縁下にかすかに屈曲 をもつ	淡青灰色	白、白色、暗灰 色の微砂粒を 含む	良好	

「上」は土表面の略

## C D - 4 区土器彫り

開拓 番号	出土地点	器種	法 量 cm 口径 底径 器高	形態・手法の特徴	色調	胎 土	焼成		備考
							直 接 火 炎 付 着	間 接 火 炎 付 着	
248	C・D-4土⑨	甕	15.6	- - -	複合口縁。比較的長い 口縁部をもち、沿部は 軽く外方に折り曲げ るか、丸くおさめる	外/淡褐色 内/淡褐色	密、1mm未満 の長石、石英、 灰色の砂粒を含む	普通	口縁部にスヌ付 石
249			16.1	- - -		濃灰茶色	密、1mm未満 の長石、石英	良好	
250	C・D-4土⑦		17.4	- - -		淡褐色	1mm未満の長 石、白色、茶色 の砂粒をかな り含む	普通	
251	C・D-4土③		16.8	- - -		淡褐色	1mmまでの長 石、石英、漂母 、茶色砂粒をた くさん含む		口縁部外面に淡 褐色のスヌが 附着
252	C・D-4土⑩		19.1	- - -		淡褐色～暗灰 褐色	1mm未満の長 石、石英砂粒を 多量に含む		
253	C・D-4土⑩		20.5	- - -		淡褐色～暗灰 褐色	1mm未満の長 石、石英砂粒を 多量に含む	やや不良	
254	C・D-4土⑦		20.0	- - -		淡褐色～暗灰 褐色	密、1mm以上 の長石粒を含 む	良好	
255	C・D-4土⑧		20.7	- - -		淡肌灰色	1～2mmの長 石、石英0.5 mm以下の漂母 を多量に含む	やや不良	
256	C・D-4土⑨		21.9	- - -		外/肌色 内/肌色	密、漂母の長 石、石英砂粒を 含む	良好	
257	C・D-4土⑨		20.5	- - -		淡褐色～灰褐色	1mmまでの長 石、石英砂粒を かなり含む	普通	
258	C・D-4土⑧		17.0	- - -		淡褐色～灰茶 色	1mm前後の白 色、灰色、透明 の砂粒を多量 に含む		
259			15.0	- - -		暗灰色	1mm未満の白 色砂粒を多く 含む	やや不良	
260	C・D-4土⑨		16.7	- - -		淡褐色	密、1mmまで の長石粒少量	良好	外面の一部にス ヌ付着
261	C・D-4土⑨		15.2	- - -		淡茶灰色	密、1mm以下 の長石、石英 砂		外面にはスヌ付 着
262	C・D-4土⑩		14.5	- - -		淡褐色	密、長石、石英、 漂母、茶褐色 等の砂粒を かなり含む		
263	C・D-4土⑧		18.6	- - -		灰褐色	密、1mm未満 の砂粒をかな り含む		
264	C・D-4土⑨		16.9	- - -		外/灰褐色 内/淡褐色	密、緻密な長 石、石英砂		外／一部スヌ付 石

「土」は土器彫り略

地図 番号	出土地点	器種	法量 cm			形態・手法の特徴	色調	胎土	被成	備考
			上径	底径	高さ					
265	C・D-4上①	實	16.3	-	-	複合口縫。比較的長い口縫部をもち、端部は軽く外方に折り曲げて、丸くおさめる	淡褐色	1mm未満の長石、雲母等の砂粒をかなり含む	良 好	
266			13.8	-	-		淡褐色	1mm未満の長石、雲母等の砂粒含む		
267	C・D-4上②		18.7	-	-		淡褐色	密、1mmまでの長石、石英粒をかなり含む		口縫外側に黒斑
268	C・D-4上③		16.8	-	-			1mm前後の長石粒をかなり含む		部ス付器一部赤味を帯びる
269	C・D-4上④		17.8	-	-		淡褐色	1mm大の白色及び暗灰褐色砂粒を多く含む		
270			29.8	-	-	複合口縫。比較的長い口縫部をもち、端部を軽く外へ折り曲げる	淡褐色(口縫 外表面焼褐色～ 白、石英粒 暗褐色)	1mmまでの長石、石英粒 1mm以下のもの含む	普 通	
271	C・D-4上⑤ C・D-4 上⑥⑦下層		15.7	3.7	25.4	複合口縫。比較的長い口縫部をもち、端部を軽く外へ折り曲げる。側面形の体部。かすかな平底	外/淡褐色～ 黒褐色 内/淡褐色	白英、長石も 1mm以下のもの 含む	良 好	外/ス付器 内/炭化物付着
272	D-4+⑧		16.9	-	29.2	口縫端部丸くおさめる。側面形の体部。かすかな平底	淡褐色	φ1mm以下の 長石、長石含む。 やや砂質	不 良	外表面ス付器
273	C・D-4土師		19.2	-	-	複合口縫。口縫端部は丸くおさめる。よく張った肩部	淡褐色	1mm前後の砂 粒を多量に含む(白色、灰色 透明)	良 好	口縫と体部外側 に一部ス付着
274	C・D-4土⑨		15.0	-	-	複合口縫。口縫端部は軽い平坦面をつくる		~1mmの長石 粒を多量に含む		体部と口縫の一 部にス付着
275	C・D-4上⑩		15.8	-	-	複合口縫。高い口縫。端部は外に軽く折り曲げる。側面形による刻文	外/淡褐色～ 灰褐色 内/淡褐色	1mm前後の砂 粒を多量に含む	普 通	外/下半にス 付着
276	C・D-4上⑪⑫		36.2	-	-	大型の壺。複合口縫。口縫上端で平坦面をつくる	淡褐色	1mm前後の砂 粒(白色、灰色 透明、灰色等) を多量に含む	良 好	口縫外側に一部 黒斑
277	C・D-4+⑬		19.2	-	-	複合口縫。比較的長い口縫部は、端部をわずかに外方に折り曲げる	淡褐色	密		
278	C・D-4+⑭		15.6	-	-		淡褐色～灰褐色	1mmまでの長 石粒をかなり含む		
279	C・D-4土⑯		17.8	-	-		淡赤灰色	1mm前後の砂 粒を多量に含む	不 良	
280	C・D-4上⑮		18.8	-	-		淡灰褐色	密、1mm以下の 砂粒をかなり含む。2~ 3mmの砂粒を 若干含む	普 通	口縫の一部と 肩部下半にス付 着
281	S D 05 土坑部		12.8	-	-	單純口縫。丸味をもった体部。外側に水平の タキ	灰赤色	1~3mmの砂 粒、暗赤色の 砂粒	良 好	
282	C・D-4土⑰		13.2	-	-	単純口縫。右上がりの タキ。内面ヘラケツ リ	灰赤色	密、2mmまでの 白色粒を含む		体部下半ス付 着

「±」は土器断りの略

拂図 番号	出土地点	器種	法量			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	高さ					
283	C・D-4十⑥	甕	-	-	-	單純口縁。右上にぎりの継かいタキ。のちハケ。口縁内ヨコハギ。体部内面ヘラケズリ	濃褐色～一部 黒褐色	白石、石英、雲母の細粒を かなり含む	良 烧	
284	C・D-4上①④ C・D-4土 D-5 黒褐下脚 D-2 黑褐	瓦質土器	-	-	-	半球形の体部。1対の平山腹角な把手。円孔をもつ。外腹は辺2～3mmの菱形のタキ。内山腹は2つ具の椭圓か。把手は上にヘラ沈線	灰色	精選されるが 微細粒を含む		
285	D-4上⑥ D-3+	甕	12.0	2.5	14.6	單純口縁。球形に近い体部。底筋は見えないが、タキで彫形か。小さい平底	淡黃褐色	白英±1mm前 後のもの目立つ。赤褐色の 粒子含む。	普 通	外／胸部最大径 以下スス付若 内／底部付近ス ス付若
286	C・D-4+⑥	釜	17.5	-	-	複合口縁。口縁筋をわ ざかに外方に折り曲げ る	淡褐色	密、1mmで の白色砂粒を 若干含む		
287	C・D-4上⑥⑨ D-4 雜灰色粘		23.5	-	-	單純口縁。開口して開 く口縁。体部外表面タ キのちハミガキ。か なりな厚底。肩内面 は口縫接合時の拍滅压 痕	外／灰褐色 （一部黒色） ～後退色 内／灰褐色～ 淡褐色	1mm前後の長 石、石英粒を かなり含む	良 烧	
288	C・D-4 十④下脚 S・D-5 土筑部 C・D-4上⑨ F-3+⑨ D-4 黑褐下脚 D-4 次褐		12.5	2.8	27.3	單純口縁。開口して開 く口縁。体部外表面タ キのちハミガキ。か なりな厚底。肩内面 は口縫接合時の拍滅压 痕	外／淡褐色 内／灰色～灰 褐色 底部黒褐色	1mm前後の暗 色、赤褐色 白色の砂粒を 含む		外／体～底部に かけてスス付 若
289	C・D-4上⑤		21.2	-	-	複合口縁。比較的長い 口縁筋をもつ	淡褐色	白石、石英、雲 母等の無機な 砂粒を含む		
290	C・D-4 上⑩⑪下脚	杯	26.5	-	-	底く彎曲して開く杯部	黃褐色	1mm前後の砂 粒を含む	普 通	
291	C・D-4+⑦		-	-	-	丸味をもつ杯部。脚部 合時の刺次痕が見える	淡灰褐色	細かい砂粒を 多量に含む	良 烧	
292	C・D-4+⑨		-	12.7	-	やや長い脚柱部。外腹 タケハケ。内面ハケ ズリ。底内面ハケメ	淡褐色	1mmまでの細 砂粒を多量に 含む	普 通	
293	C・D-4上⑨		-	13.9	-		淡褐色（一部 黒褐）	密、1mmまで の長石、石英、 雲母	良 烧	
294	C・D-4土⑥	盆 口 盆	10.3	-	-	直立する口縁部。外腹 にクシ状工具による手 行沈線	褐色	1mm前後の長 石粒を多量に 含む		
295	C・D-4 土⑦下脚	小形丸底鉢	10.0	-	-	短い口縁。やや深い 盆。外腹一部をくがく か	茶灰色	密		
296	C・D-4上⑥	钵	12.6	-	-	深めの杯部。内外腹に ヘラケズリ	淡褐色			
297	C・D-4土⑨	鼓形器台	23.9	20.8	11.0	上・下台間断的した製 品。端部を折り曲げる。 外腹ヨコナデ。上台内 面ハミガキ。下台内 面ヘラケズリ	灰色がかった 淡褐色	1mm以下の長 石、石英粒、1 ～2mmの赤色 砂粒をかなり 含む		
298	C・D-4+⑦		22.7	-	-		淡褐色	密		
299	C・D-4土⑨		22.7	-	-		淡灰褐色		普 通	

「十」は十面削り略

標図 番号	出上地点	岩種	法量 kg			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	基高					
300	C・D-4+⑤	鼓形器台	21.1	18.5	10.8	上・下台脚縮約した製品。端部を折り曲げる。 外面ヨコナナ、上台内面ヘラミガキ、下台内面ヘリケズリ	淡灰褐色	φ1mm以下の 石英、長石か なり含む	普通	器台内面に2本 線のヘラ記号
301	C・D-4上		20.0	-	-		灰褐色	白色小砂粒を 多く含む	やや不規	
302	C・D-4上⑥		21.6	-	-		薄乳色	白色、透明、茶 色の細砂を 多量に含む	普通	
303			-	-	-		外/淡桃褐色 ～暗灰褐色 内/淡褐色～ 暗灰褐色	1mmまでの長 石、石英を 含む	良好	
304			-	-	-		淡褐色	茶褐色、透明、 白色の細砂を 多量に含む		
305	C・D-4上⑦		-	19.0	..		外/灰褐色 内/淡褐色	1mmまでの白 色及び灰色の 砂粒を含む	普通	

### D E - 3 区土器窯

307	D・E-3上⑧	壺	16.1	-	23.4	複合口縁。比較的高い 口縁部。倒卵形の体部。 瓶頸的な平底	外/肌色～淡 赤褐色 内/淡灰褐色	石英、長石 φ 1mm前後のもの 多い	不良	
308	D・E-3±⑨		22.7	-	-	複合口縁。比較的高い 口縁部。端部を外方に 軽く折り曲げる	明淡褐色	1mm未満の白 色砂粒及び微 小な透明砂粒 を含む	良好	
309	E-3上⑩		23.0	-	-		淡褐色	細かい砂粒を かなり含む		
310	D・E-3上⑪		20.2	-	-			1~2mmの大 砂粒を多く含 む。4~5mm の大砂を少量		
311			16.6	-	-		橙褐色	1mm前後の砂 粒(白色透明) を多く含む	外面スス付着	
312			13.0	-	-	複合口縁。内面は腹部 から直線的に立ち上がる	乳灰色	白色、透明 局部の透明砂 粒を多く含む	普通	
313			13.5	-	-	单輪口縁。丸輪をもつ た腹部から直線的に開 く口縁部。	淡灰褐色	1mm前後の大 砂粒(白色、透 明)を多く含む	良好	
314			13.8	-	-	複合口縁。比較的低い 口縁部。端部をわずか に外方に折り曲げる	灰褐色	1mm未満の白 色砂粒が透明な 小砂粒を多く 含む	普通	
315			17.0	-	-			白色砂粒を含 む	良好	
316			23.2	..	-	複合口縁。比較的長い 口縁部。端部を外方に 折り曲げる	淡褐色	1mm未満の小 砂粒を含む		
317	E-3上⑫		16.6	-	-			1mm前後の長 石、1mmまで の石英、金雲 母多量	外面スス付着	

(土。は上蓋窯の略)

標図 番号	出土地点	器種	法量		形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底深					
318	E-3上⑥	裏	12.8	-	複合口縁。底内傾す る口縁部	淡茶褐色	1mmまでの砂 粒若干	良 好	
319	D+E-3土④		16.4	-	複合口縁。やや深い口 縁は、端部を外方に折 り曲げる	淡灰褐色	白色颗粒を 多く含む		外面の一部にス ス付着
320			15.9	-		肌灰色	微砂粒を含む (石英、長石)		
321			20.1	-	複合口縁。比較的深い 口縁は端部で平坦面を つくる	外：棕灰褐色 内：淡灰褐色	白色、透明、灰 色、茶褐色等の 微小な砂粒を 多く含む	普 通	
322	E-3土①		15.2	-		淡褐色～灰茶 褐色	1mm後の長 石多數	良 好	
323	E-3上⑥	高 口 瓶	17.2	-	丸味をもってやや深い 杯部。厚手。内外面へ ラミガキ	薄肌色	1mmまでの石 英、杏褐色、赤 色砂粒をた くさん含む		
324	E-3黒褐	脚付 口 瓶	12.4	-	小ぶりな丸味をもった 杯に中央の脚が結合す る。内外面へラミガキ	淡茶褐色	白、長石合 む、どことな く陶器のもの と上が異なる		
325	D+E-3土④	高 口 瓶	18.6	12.6	端曲をもち、やや深い 杯に中窓の脚が結合す る。外面、杯内面へラ ミガキ	淡赤褐色	石英、長石合 む、どことな く陶器のもの と上が異なる	普 通	外面・内面赤色 釉料塗布
326	D-3土		-	17.5	脚部から大きく開 く脚部へいたる。4方 透し	淡褐色～淡灰 褐色	0.5mmの小 砂粒(白色、褐 色、金色等) を多く含む	良 好	
327	E-3上⑥		-	14.1	長い脚部の脚。外面へ ラミガキ。内面シボリ メ、瓶部ハケ	淡褐色	1mmまでの細 かい砂粒をか なり内む		
328	D-3土	低 脚 口 瓶	16.0	7.4	丸味をもち、比較的深 い杯部	外：淡褐色～ 褐色 内：淡褐色	1mmまでの長 石、石英、當母 多	やや不良	脚及び杯外底部 スス付着か
329	E-3土④	小 窓 脚 口 瓶	10.7	13.4	口縁下に突起のある受 部。大きく開く脚部。 4方透し	淡灰褐色	細粒砂粒が 比較的多	良 好	外面、受部赤色 施影
330	D+E-3上④ E-3土		9.1	-	突起のある受部。中窓 の脚柱部	淡褐色	1mmまでの白 色、暗褐色の 砂粒を含む		
331	D-4 硫灰色粘 D-4 褐色粘 D-E-3土④	鼓形 脚 口 瓶	21.1	19.1	範約のすんだ上・下 部。外面ヨコハケ、上 台内面へラミガキ。下 台内面へラミガキ	肌灰色～灰褐 褐色	1~2mmの大 きな長石、石英粒 を多く含む	やや不良	
332	D+E-3土④		20.8	-		淡褐色～淡褐 褐色	1mm後の長 石、石英を多 く含む	良 好	
333	D+E-3土④		22.2	-		淡褐色	1mm後の砂 粒(白色、灰色等) を多く含む	普通～	やや不良

### F-3 区土器溜り

334	E+F-3土④	脚	14.4	-	複合口縁。全体に厚手。 肩部に波状文。体面上 半程細かいコタハケ。下半 部に近い体部	淡灰褐色	石英、長石の 細粒性含む。 比較的密	良 好	口縁部余り丁寧 に仕上げない。 体部に開成後の 空孔。外面スス 付着
-----	---------	---	------	---	---	------	--------------------------	-----	--

「上」は土器溜り略

補遺 番号	出土地点	器種	法基 km		形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径					
335	F-3上⑧	壺	16.2	-	複合口縁。比較的高い口縁部は輪郭を外方に折り曲げ、底部に内側張曲を作る。球形に近い体部	外/淡灰色 内/淡黃灰褐色	石英、長石含むが比較的多く	良好	
-			16.5	-	複合口縁。口縁部に平坦面をつくる。肩部に波状文。球形に近い体部。底部上半部にハケ。下半部からハケ	淡灰褐色			外面スヌ、内部焼化物付着。底部穿孔か。
336	E-F-3上⑥		17.1	-	複合口縁。端部を外方に折り曲げる	淡乳褐色	1mm前後の砂粒少しある。 0.5mm以下のものが多い	普通	外面一部スヌ付着
337	F-3上⑨		15.9	-		乳褐色	1mm前後の砂粒少しある。 0.5mm以下のものが多い	やや不良	
338			16.2	-	複合口縁。口縁部外方に折り曲げ半円面をつくる。肩部別文突出すが一周しない	淡黃褐色	石英、長石、金雲母の細粒含む	良好	
339	F-2+3土④		14.9	-	複合口縁。口縁部に平坦面をつくる。肩部別文突出すが一周しない	淡灰褐色	石英より1mm~ 2mmの砂粒含むが比較的多く		外面スヌ付着
340	F-2+3土⑤		14.3	-	単純口縁。端部内側に凹入し、平坦面をなす。内山筋鉢部の少し下まで至るハケを残す	桃色がかったオレンジ	鐵鉄粒多く含む 石英、赤色		
341	F-3上⑩ F-2+3土⑤		14.4	-	複合口縁。端部に平坦面をつくる。肩部に手捺文捺跡、底部に近いハケ	淡黃褐色	石英、長石の細粒含む	普通	外面スヌ付着
342	E-F-3土⑩		11.7	-	複合口縁。端部を外方に折り曲げる。肩部に内側張曲文があるが一周しない	淡褐色	石英、長石より 1mm以下のもの多い	良好	底部以降スヌ付着
343	F-3上⑩		15.0	-	複合口縁。端部を外方に折り曲げる	明るい肌色	1.5mmくらいの砂粒少々含む。 1mm以下 のもの多い	普通	
344	F-3上⑩		14.6	-	複合口縁。端部を平面とする	淡乳褐色 内面一部灰褐色	1mm前後の砂粒多い		外面スヌ付着
345	F-3上⑩		20.2	-	複合口縁。端部を外方に折り曲げる	外/淡乳褐色 内/汚れた赤褐色~灰褐色	1~1.5mmの砂粒かなり含む	やや不良	
346	F-2+3土⑩		16.2	-	複合口縁。比較的低い口縁部。端部を外方に折り曲げる	淡灰褐色	石英、長石など細粒含む やや砂質		
347	F-3上⑩		15.5	-		黃白色	全体に砂質	普通	外面にスヌ付着
348	F-2+3土⑩		18.6	-	複合口縁。比較的高い口縁部。端部は丸くおさめる。肩部に波状文	肌色	1mm未満の茶色と暗灰色。 白色が軽く多量に含む		
349	F-3上⑩		11.8	-	複合口縁。輪郭が付く。外縁を丁寧にみがいて底部にヒビ	淡灰白色	0.1mm前後の石英、長石含む		口縁内に4本線のヘラ記号
350	E-F-3上⑩	脚付小形壺	11.6	-	複合口縁。端部を外方に折り曲げる	淡灰褐色	精選され密	良好	外面スヌ付着
351	F-3上⑩	壺	12.6	-	単純口縁。突起り残株の痕跡。外縁ミカゲで光沢をもつ				

「上」は土器覆りの略

標印 番号	出土地点	器種	法量			形態・手法の特徴	色調	胎上	焼成	備考
			口径	底厚	器高					
352	E + F - 3 土⑧	壺	10.4	-	11.6	複合口縫。口縫蛇目く外へ折り曲げる。IJ縫 外面縫のヘラミガキ	淡茶褐色	石英、長石含む	良 好	
353	F - 2 + 3 土④	壺	15.3	-	-	複合口縫。端部外方に折り曲げる	明褐色	1mm程度の小 砂粒を多く含む		外山スス付着
354	F - 2 + 3 上④(中) F - 3 土⑥	壺	19.9	-	-	複合口縫。比較的高い IJ縫。端部には平坦面 をつくる。同時に波状 文	外 / 淡灰褐色 内 / 淡黄灰色	石英、長石の 細粒含む	普通	
355	F - 2 + 3 + ①	壺	15.3	-	-	複合口縫。低く内傾す る口縫。端部丸くおさ める。球形に近い体部	淡灰白色	石英、長石の 大粒を含む、砂質	不 煙	
356	F - 3 土⑩	壺	20.1	-	35.5	複合口縫。端部に平坦 面をつくる。球形に近 い体部。肩部に難な波 状文	石英、長石の 細粒含む	良 好	外山肩部に赤色 頭付着か	
357	F - 2 + 3 + ⑨	壺	19.5	-	26.3	複合口縫。大きく開き 端部を折り曲げる口縫。 底下幅に突堤。球形の 体部	外 / 淡色～乳 色 内 / 淡赤褐色 ～乳色	石英、長石の 細粒含むや日 立つ	普通	
358	F - 3 土④	壺	17.7	-	-	複合口縫。端部に平坦 面をつくる。よく張っ た体部。平底	肌色～淡褐色	石英、長石な ど細粒含む	良 好	底部穿孔か。底 部の縫合を欠く
359	E + F - 3 + ⑩	壺	20.7	-	-	單純口縫。直線的な口 縫。端部は平坦面とす る。底下幅に突堤	淡黃灰色	1～3mm人の 體色、赤褐色 を含む多く 含む		外山の一部黒褐色 、ススによる ものか
360	F - 3 土⑨	壺 IJ 壺	10.5	-	-	複合口縫。両状の口縫 部。端部丸くおさめる。 口縫外側にナタのヘラ ミガキ	淡黃褐色	0.5mm以下の 細かい砂粒多 い。ごく少量 1mm以上のもの も含む	普通	
361	F - 3 土④	壺	15.6	-	-	単純口縫。外反して立ち 上がる口縫。端部は上方 に引き上げる。外周にす かにナタミガキをこす	淡灰褐色～淡 灰褐色	1～3mmの大 きな間隔、 灰褐色、白い砂 粒を多く含む	良 好	
362	E + F - 3 + ①	小形丸底壺	10.9	-	-	偏平な体部から、内汚 して立ち上がる口縫部。 細があるものだったか。 内外表面部分的にハケメ をとどめる	外 / だいぶ板 化している うすいオレ ンジ色 内 / 紫褐色 うすいオレ ンジ色、刷 形～白褐色	1mm以下の砂 粒多く含む 石英、長石含 む		
363	F - 3 土⑨		10.5	-	-	直線的に立ち上がる口 縫部。体部外側にハケ メ	赤褐色	0.5～1mmの 砂粒ごく少量 含む	不 煙	
364	F - 3 + ⑩		8.4	-	8.7	偏平な球形の体部から 直線的に立ち上がる口 縫部	灰白色～淡灰 褐色(黒斑)	石英、長石の 細粒含む、砂質	やや不良	
365	F - 3 土⑤ F - 3 黒褐色上土壺	壺	9.9	-	-	短く直立する口縫部。 底部に波状文	褐色、暗褐 色、白色の砂 粒(1mm)を 含む	良 好	口縫及び外側に スス付着	
366	F - 3 上 ⑥(中) F - 3 黃 B + F - 2 黑褐 E + F - 2 アゲ内 E + F - 3 褐	直 口 壺	13.2	-	-	直線的に開き、高く立 ち上がる口縫部。偏平 な球形になると考えら れる体部。体部外側へ ラミガキ！底面に波状文	外 / 茶褐色 内 / 灰褐色	比較的露透さ れる。白色の 粒子(長石)を 含む	普通	外山、窓内面、 赤色塗装
367	E + F - 3 土⑨	小形丸底壺	13.7	-	-	屈曲のある口縫から、 比較的丸い体部。内 外表面へラミガキ	淡褐色	1mmの大 きな暗褐色 砂粒を多く 含む。長石、 石英が若干	良 好	

(上)は上蓋裏の略

編図 番号	出土地点	器種	重量 kg		形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成 備考			
			口径	底径							
368	F-3上⑨	盃	-	12.4	大きく開く唇部。全体に厚手。外面ヘラミガキ、内面ナデ	淡黄褐色	1~2mmの砂粒が混入する	普通			
369	F-3上⑩	底	部	-	2.2	小形品の底部。半底。	赤褐色	1~1.5mmの砂粒を含む			
370	F-3+⑨ D-4上	鉢	13.5	4.0	11.0	單純口縁。端部わずかにつまみ上げる。平底。外面ヘラミガキ。 内面ケズリのものナデ	外/淡赤褐色 内/黃褐色	細粒物がむか比較的密			
371	E+F-4上⑩ F-3 黒褐色上層	高	杯	28.3	-	人形の製品。ゆるやかに開き、やや薄い杯部	淡褐色	長石、石英、暗灰色斑等の微粒を多く含む			
372	F-3土⑨		-	10.0	-	中央の細柱部。短い脚	灰色~灰褐色	砂粒を若干含む			
373	F-2+3上⑩		21.9	-	-	ゆるやかに開き、やや深い杯部。器内外面に脚接合時の剥落痕	灰褐色	1mm以下の細かい砂粒(白、茶、灰色等)を多く含む			
374	F-3 黒褐色上層		21.1	-	-	直線的に開く浅い杯部。内面加八ヶのものナデ	淡乳色	1mmまでの砂粒(白、暗灰色、半透明)を多く含む			
375	F-3土⑩		27.9	-	-	大型の製品。ゆるやかに開くやや深い杯部	淡褐色	1mm未満の細かい砂粒を多く含む			
376	F-3+① F-3種	低	脚	杯	24.4	-	大型の製品。直線的に開く浅い杯部。外面ハケ、内面ヘラミガキ	淡褐色~淡綠褐色	1mmまでの長石、石英を多		
377	F-2+3上⑩		17.9	-	-	透曲して開くやや深い杯部。外面加八ヶのものナデ	外/淡赤褐色 ~淡綠褐色 内/淡赤褐色 ~灰褐色	0.5mm以上の砂粒を多く含む			
378	F-3土⑨⑩ F-3黒褐色		12.1	5.2	5.2	透曲して立ち上がるやや深い杯部。比較的高い脚が接合する。外面ハケ、内面ヘラミガキをとどめる	淡灰褐色~黒 石英、長石含む	外/一部黒斑			
379	F-3土⑨⑩	鼓	形	器	台	22.8	19.2	10.6	上・下台間簡約したものの。底部内面をヘラケアリする	淡赤褐色	普通
380	F-3黒褐色下層					19.8	-	-	同部内面は後に古くなつたもの。上台下面に1単位の平行線文	淡灰褐色	石英、長石、金星母含む
381	E+F-3土⑩					18.5	16.0	9.6	やや厚手。上・下台間簡約したもの	淡明褐色	1mm未満の砂粒を多く含む
382	E+F-3+⑩					-	14.2	-	下台に3方透し。焼成後、丸い穴をあける	灰褐色	1mm以下の長石、石英及び暗灰色砂粒を多く含む
383	F-3土⑩					21.5	19.6	18.8	上・下台間簡約したものの。底部内面は接合になる	淡黃褐色	石英、長石など大粒の砂粒含むが比較的密
384	F-2+3上⑩⑩					20.4	16.7	9.7	上・下台間簡約したもの	黃灰色	石英、長石の細粒混在が比較的密
385	E+F-3上⑩⑩					18.1	15.7	9.9	下台に2個の穿孔。焼成前に丸い穴をあける	淡褐色	1~2mmの大粒の砂粒多い

「上」は十進法の略

標号	出土地点	器種	法量 cm			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	高さ					
386	F - 3 + ⑧ F - 3 黒褐下層	コトコト上22	-	-	-	円筒状の体部。下端近くに1対の窓状の把手を接合する	黒色～淡褐色	約1~2mmの石英目立つ	良好	
			-	14.0	-	386とは別個体。下端口縁部、口縁付け根に1条の突筋	外 / 淡褐色 内 / 淡灰褐色	1mm未満の白色砂粒、透明砂粒を含む	普通	

### C - 3・4 区土器類

388	C - 3 + 4 + ⑥	壺	17.3	-	27.4	複合口縁。比較的高い口縁部。端部外方に折り曲げ。平坦面をつくる。倒卵形の体部	淡黄灰褐色	石英が目立つ 少しへんじ	普通	
389	C - 2 黒褐	瓦質土器	-	-	-	把手。円柱状。ハラケズリにより取外しする	外 / 黑灰色 内 / 白色	細粒物含むが 密	良好	
390	C - 3 + 4 土③	甕	19.0	10.4	21.2	複合口縁。端部外方に折り曲げ。平坦面をつくる。手平	外 / 黄褐色～ 茶褐色 内 / 黑	比較的密	普通	外面ト半ス付 石、ただし底部 には付着せず
391	C - 3 黒褐	壺	25.4	-	-	複合口縁。大きく開く口縁部。端部外方に折り曲げる	淡灰褐色	1~2mmの 長石、石英粒	良好	
392	C - 3 黒褐	高杯	-	17.3	-	短い筒状から大きく開く脚部形にいたる。4方透かし	暗灰褐色 (一部 赤褐色)	1mmまでの長 石、石英粒を 多く含む		
393	C - 3 黒褐	矮形器台	-	16.1	-	トガ輪部を水平に仕上げる	淡灰褐色	1~2mmの 白色砂を多く 含む		
394	C - 3 + 4 + ①	鉢	12.5	2.1	8.9	半球形の深い体部。短く内凹する口縁部。かすかな平底。内外面ヨコナタ。外面部ハラケズリ	淡灰褐色 既非黑色	細粒物多い (長石、石英)	普通	

### D - 5 区土器類

395	D - 5 底褐下層	壺	19.6	-	-	複合口縁。比較的高い口縁部。端部外方に折り曲げる	明灰褐色	白色小砂粒を 含む	やや不良	
396		壺	17.2	-	-	単純口縁。「く」の字に折り曲げる。端部丸くおさめる	暗灰色	1~2mmの 長石、暗灰色 及く茶褐色砂 粒を多く含む		
397		高杯	23.0	13.4	17.0	直線的に開くやや深い杯縁。中腹の側面から直線的な脚部強度。4方透かし	暗褐色 既非黑色	1~2mmの砂 粒を多く含む	普通	

### E F - 2 区土器類

398	E・F - 2 土⑤	壺	14.6	-	-	複合口縁。口縁端部でかすかな平坦面をつくる。球形の体部	淡褐色	1mm未満の砂 粒を多く含む	良好	底部ト半ス付 石
399	E・F - 2 土⑤	高杯	22.4	-	-	単純口縁。「く」の字に折り曲げる。端部丸くおさめる	淡褐色 (一部 暗灰褐色)	1mm未満の砂 粒を多く含む		
400		高杯	-	17.5	-	大きく開く脚部強度。4方透かし。外表面に細かいハラケズリ	淡赤褐色	密1mm未満の 砂粒を含む		
401	E・F - 2 土①	低脚杯	18.2	6.4	5.6	ゆるやかに立ち上がるやや深めの杯高。杯、脚部は半球に仕上がる	淡褐色	1mm未満の砂 粒多		裏内面に2本線 のへり記号

「十」は上器類の略

E F - 4 区土器調査

編目 番号	出土地点	器種	法 量 kg	口径 底径 高さ	形態・手法の特徴	色 調	胎 土	燒 成	備 考	
402	E・F-4上④	壺	17.7	- -	複合口縁。口縁端は平 坦面をつく。体部外 面上半部にヨコハケ。 下半部にタチハケ。	赤褐色	約1mm前後の 石突、長石合 むが比較的密	良 野	外面スス付着	
403			15.1	- -	複合口縁。うすく引き 出したような口縁部。 複合部の突出度低い	灰褐色	黄白、石突、灰 色砂粒をかな り含む		やや不整	
404	E・F-4土④		17.0	- -	複合口縁。口縁端をわ ずかに外方に折り曲げ る	淡褐色	赤1mmまでの 石突、石英粒、泥 斑をかなり含む	良 野	外面に薄くスス 付着	
405	E・F-4+④		14.8	- -		灰褐色	1mm前後の長 石、石英粒を かなり含む	普 通		
406	E・F-4土④⑤		16.8	- -		淡褐色～黒褐色	長石、石英粒、泥 斑の砂粒をか なり含む			
407	E・F-4上④		21.0	- -		肌色～灰褐色	1mm前後の長 石、石英粒を 多量に含む			
408	E・F-4+④⑤	壺	19.7	- -	複合口縁。端部を外方 に折り曲げ、平坦面を つくる。肩部に波状文	淡褐色～褐褐色	1mmまでの長 石、石英粒を かなり含む	良 野		
409	E・F-4+④⑤	低 脚 杯	16.7	- -	ゆるやかに立ち上がり、外 やや深い杯底。脚部2 穴の穿孔	淡褐色 ～肌色 内 / 淡褐色 ～肌色	1mmまでの長 石、石英粒を 多量に含む。 1～2mmの長 石粒若干		やや不整	
410	F-4土⑤	ミニア鉢	7.3	4.0	5.5	口縁に手づくね痕。平 底	肌色	鐵砂粒を含む	良 野	
411	E・F-4土④	鉢	12.5	4.7	6.3	平底からわずかに内側 して立ち上がる。外側 右にガラガラのタタキ。底 部も同様	淡褐色	摩耗した黒色 あざき色の砂 粒含む	普 通	
412		台	8.6	8.9	9.0	中空の両面から上下に 強く広がる。内外面想 い合わせ。上台内面擦拭 のハケ	オレンジがか った灰白色	摩耗した砂粒 含む	良 野	

G - 6 区

413	G-6 黒褐	壺	13.9	5.3	31.1	里手口縁。平底。肩部 に2～3mmの黒色の擦 耗部、底部、底部 に剥落した角錐目 立つが密	赤褐色～淡褐色	良 野	外面、口縁内面 に2～3mmの黒色の擦 耗部、底部、底部 に剥落した角錐目 立つが密
-----	--------	---	------	-----	------	---	---------	-----	--

H - 2 + 3 区土器調査

414	H-2+3上	壺	15.5	-	-	上方にくり上げた口縁 口縁に3～4条の凹線 凹線は内傾する	淡褐色	1mmの白色 及び透明な砂 粒を含む	良 野
415	H-3土		17.1	-	-		灰褐色	1mm前後の小 砂粒(白色)を 含む	

「上」は十器調査の略

標号番号	出土地点	器種	法量 cm		形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径					
416	II-2+3上+	壺	15.9	-	くり上げた口縁に3条の凹線。肩部にハラグリによる2段の刺突	肌色	半透明の小砂粒を含む	灰	
417			12.2	-	口縁に4条の凹線。口縁2穴の穿孔	淡褐色	1mm前後の砂粒(白)、透明、半透明を含む		口縁部内外面に赤色焼形
418		壺	12.6	-	外方に折り曲げた單柄口縁。端部に平坦面をつくる	外/黒褐色 内/淡褐色	1mm大の砂粒を含む		
419			15.1	-	高くくり上げた口縁外に6条の腹凹線。口縁内面にラミガキ	外/黑褐色 内/淡褐色～褐色	白色及び透明な小砂粒(1mm)を含む		スヌ付着
420	II-3下脇		21.1	-	高くくり上げた口縁外に5条の腹凹線。同部にも同様の凹線による波状紋	肌色	1mm前後の砂粒(灰色、透明、茶色、白色)を多く含む		
421	H-2+3土⑨		19.0	-	口縁に腹凹線。体部に焼成後の穿孔	淡茶褐色～暗褐色	1mm大の白色砂粒を含む		
422	H-2+3上脇		25.7	-	口縁に日版による平行凹線。上半はナゲで削す	淡肌色	白色、肌色の小砂粒を含む		
423	日-2+3排水路 黑色土		22.4	-	口縁に腹凹線。同部に刻突による列点文	淡褐色～暗褐色	1mm大の砂粒を含む(半透明、白、金色)		スヌ付着
424	H-2上		22.4	-	口縁に日版による平行凹線。口縁内面に穿孔	淡褐色～灰褐色	1mm大の白色砂粒を含む		
425		壺	13.1	-	くり上げた口縁外に6条の腹凹線。肩部外側タハケのうち、へら括きの腹凹線	外/灰褐色 内/暗灰褐色	1mm大の砂粒(白色、茶色、褐色、光沢のある油膜等)を多く含む		
426	H-3土		14.9	-	単純口縁。口縁端に2個1対の円形浮文	乳褐色(スヌによって大部分は黒褐色)	1~2mm大の半透明砂粒を含む		スヌ付着
427	H-6サブトレ		15.0	-	口縁に其筋による平行凹線のちナゲ	淡褐色	白色砂粒を含む		
428	H-2+3排水路 黑色土		19.2	-	II縫外面に3条の凹線。窓状の頸部内面にはシボリメ	肌色	白色及び半透明の小砂粒を含む		
429	II-2+3上脇		32.5	-	口縁外縁に2条の凹線。口縁内に5条、頸部下に4条のラグラス線。肩部にクサ状工具による列点	淡肌色 断面三層	白色小砂粒を多く含む		
430	II-3下脇	瓶	7.7	-	平底。外面ハケ、内面へラケズリのちナゲ	外/乳白色 (一部淡褐色) 内/灰褐色	1mm大の砂粒(白色、半透明等)を多く含む		
431	H-2+3土		8.4	-	平底。外面へラケズリ、内面へラケズリ	乳褐色 底部一層	1~2mm大の砂粒を多く含む		
432	II-2+		4.2	-	上げ紙模様の平底。内面へラケズリ	外/淡赤褐色 内/淡褐色	1mm前後の砂粒(半透明、白色)を多く含む		
433	II-3下脇		8.6	-	平底。外面ハケ、内面へラケズリ	外/暗褐色 内/灰褐色	1mm前後の砂粒(白色及び透明形)を多く含む		

\*上+は十唇痕り略

神田 番号	出土地点	器種	法量 km			形態・手法の特徴	色調	胎土	構成 備考	
			口径	底径	器高					
434	H-3下層	碗	1	-	7.7	-	上げ底気味の平底。内 面ハラケザリ	棕褐色～暗褐色	1mm以上の石粒 (白色、黒色) を多く含む	良好 スス付着
435	H-2+3上	高杯	か	-	20.2	-	直線的な脚部。底部 で平坦面をつくる。内 外面ハラケのちハラ ミガキ	肌色	密、白色小細 孔を含む	-
436		鉢形器台	15.7	-	-	-	上台外縁に貝殻製縫に よる平行底縫。内外面 丁寧なハラミガキ	淡灰褐色～暗 灰褐色	密、1mm以上 の石粒(白色) を多く含む	-
437			-	-	30.2	-	下台外縁に貝殻によ る平行底縫。外面ハラ ミガキ、内面ナダ	淡灰褐色	1mm以上の石粒 (白色、黒色) を多く含む	-

### H-5区土器履り

438	H-5上	座	17.0	-	-	複合口縫。薄く引き出 したような比較的高い 口縫部。底部は丸くお さめるものが多い	淡灰色	0.5~1mmの 石粒を含む砂 質	不良
439			20.1	-	-		淡褐色	密	良好
440	H-5中①		19.3	-	-		淡灰色、一部 淡灰褐色	やや粗、空氣 孔含む	やや良 一部不良
441	H-5上		16.6	-	-		淡褐色	粗1~2mmの 石粒、不規則 の砂粒を多量に 含む	やや不良 口縫外縁の一部 スス付着
442			-	-	-		淡灰褐色	密、1.5mm厚 度地石英比較 的多	不良
443	H-5上②		15.4	-	-			やや密	普通
444	H-5土		17.2	-	-	外 / 淡褐色～ 暗褐色 内 / 淡褐色～ 暗赤褐色	1mmまでの 石粒、石英粒全 多量に含む	1mmまでの 石粒、石英粒全 多量に含む	やや不良 スス付着
445	H-5中②		16.7	-	-		灰褐色	長石目立つ、 石英少量	普通
446			16.5	-	-		淡褐色～淡灰 褐色	長石、石英の 細粒を多量に 含む	一部不良
447	H-5上		31.8	-	-	複合口縫。薄く引き出 した比較的高い口縫部。 底部に平坦面	淡灰色～淡褐 色	やや粗らか 以下の大石目 立つ	良好
448			24.6	-	-	複合口縫。薄く引き出 した比較的高い口縫部。	淡灰褐色	やや粗3mmの 砂粒あり (一部不良)	やや不良
449		金	17.5	-	-	複合口縫。薄く引き出 した比較的高い口縫部。 全体に凹凸	外 / 赤味を帯 びた暗茶褐色 内 / 暗灰色～ 淡褐色	1mmまでの反 白、石英を多 量に含む	やや不良 ~不良
450			19.6	-	-	複合口縫。直立する短 い口縫。全体に凹凸	内 / 暗褐色 外 / 暗褐色	1mm以下の反 白、石英を多 量に含む	やや不良
451	H-5土		19.9	-	-	複合口縫。直立に近 い薄く引き出したような 口縫部。局部で張る	外 / 暗褐色 内 / 灰白色	右尖、長石の 砂粒多い。砂 質	-

「十」は土器裏の略

標高 番号	出上地点	岩種 11種 選別 器高	法量 kg		形態・手法の特徴	色調	結晶・焼成	備考
			外表面	内面				
452	H-5土⑦	蝶形器台 28.7	-	-	外面ヨコナデ、内面へ ラミガキ	暗褐色	φ1mm未溝の 石英、長石含 むかず	良好
453	H-5土⑧⑨		-	16.6	外面ヨコナデ、内面へ ラケズリ	淡灰白色	1mmまでの長 石、石英粒	普通
454	H-5上	高杯	-	13.9	-	長い凸状の脚部	淡褐色	長石、石英
455	H-5土④⑤⑥	斐	16.7	-	単純口縁。体形外表面 いいヶ。粘土結合痕が みえる	外/淡褐色 内/灰褐色	長石、石英多 い	スス付着
456	H-5土⑤		16.7	-	単純口縁。口縁端を軽 くつまみ上げる。体形 外表面右上がりのタキ のうち粗いハケ。内面 ナデ	外/暗赤褐色 内/暗褐色 ～淡赤褐色	2mmまでの白 色、無灰色の 砂れをかなり 含む	
457			15.7	-	単純口縁。口縁端を軽 くつまみ上げる。体形 外表面右上がりのタキ のうち粗いハケ。内面 ナデ	外/暗赤褐色 内/暗褐色 ～暗赤褐色	1mm以下の長 石、1-2mm の灰色砂粒、 1-2mmの 灰色砂粒が多 数に含む	
458	H-5上⑥		15.5	-	単純口縁。体形外表面 上上がりのやや細いタ キ。内面ナデ	外/淡褐色 内/淡灰色	φ1-2mmの 大粒の砂粒 多く含むか否	良好
459			14.4	-	単純口縁。体形外表面 上上がりの粗いタキ。 内面粗いハケ	淡褐色	1mm以下の長 石、系縫合 物を含む	口縫外面にスス
460	H-5上 H-5上⑥		14.6	-	単純口縁。体形外表面 上上がりのタキ。内面 ハケのちナデ	外/淡褐色 内/淡褐色	長石(1-2 mm)目立つ、 石英	スス付着
461	H-5土③④⑤ G-II-5種		13.9	-	単純口縁。口縁端軽く つまみ上げる。体形外 表面右上がりのタキの もの、粗いハケ。内面 ヘラケズリのちハケ	淡黄灰色	大粒の砂粒含 む、青灰色の 粒子(φ1)～ 2mm)のもの 目立つ	普通 外面スス付着
462	H-5上①④		14.8	-	単純口縁。口縁端軽く つまみ上げる。体形外 表面右上がりのタキの もの、粗いハケ。内面 ヘラケズリのちハケ		細砂粒含む	
463	H-5上⑦		16.1	-	単純口縁。口縁端軽く つまみ上げる。体形内 外面ハケ	淡赤褐色～暗 色	長石、石英、茶 褐色の砂粒を かなり含む	不良～ やや不良
464	H-5土⑧		14.9	-	単純口縁。口縁は大き く外反する。体形外表面 右上がりのタキのの ち、粗いハケ。内面粗 いハケ	外/黑色 内/黄褐色がか った灰白色	長石砂粒含む 茶色の砂粒含 む	良好 外面スス付着
465	II-5土⑥		19.2	-	単純口縁。短く開く口 縁。体形外表面右上 がりのタキのの ち、粗いハケ。内面粗 いハケ	淡黃褐色	φ1-2mmの 摩耗した砂粒 含む、灰色の 円錐多い	普通 外面スス付着
466	II-5+		28.6	-	単純口縁。口縁端に3 条の花巻。外底タキ のちハケ。内面ハケ	淡褐色	密、大粒の砂 粒含む	
467	H-5土⑥		14.9	-	単純口縁。体形外表面 上上がりのタキのの ちハケ。内面ハケ	外/淡褐色～ 黑色 内/淡褐色	密、長石粒及 び褐色砂粒少 量	良好 スス付着

「土」は上層部の略

標識番号	出上地点	器種	法量 km		形態・手法の特徴	色調	粘土	焼成	備考
			口径	底深					
468	H-5+.	甌	13.4	-	単純口縁。体部外面右上がりのタッキのち縦かいハケ、内面ナデ	外/赤褐色 内/淡褐色	1mm前後の砂粒含む。砂質	やや不良	スス付着
					単純口縁。体部外面右上がりのタッキ、内面ハケ	外/褐褐色 内/褐褐色～赤褐色			
469	H-5+.	甌	15.1	-	単純口縁。体部外面右上がりのタッキ、内面ハケ	外/褐褐色 内/褐褐色～赤褐色	1~4mmの砂粒をかなり含む	普通	口縁部の外面と内面の一部にスス付着
					単純口縁。口縁周縁をつまみ上げる。体部内面ハラケズリ	淡褐色			
470	H-5+⑤	甌	13.3	-	単純口縁。口縁周縁をつまみ上げる。体部内面ハラケズリ	淡褐色	灰石、石英を含む	良好	口縁部の外面と内面の一部にスス付着
					体部外面粗いハケ、内面粗いハケ	褐褐色～暗灰色			
471	H-5+.	甌	-	-	体部外面水平の川いタッキ。下部はタッキをなして消す。内面粗いハケ	外/淡褐色～黒褐色 内/淡褐色	密、灰石、石英を含む	普通	良好
					単純口縁。口縁端丸くおさめる。口縁内面ハケ	淡褐色			
472	H-5+⑥	甌	-	-	単純口縁。口縁端丸くおさめる。口縁内面ハケ	外/淡褐色～黒褐色 内/淡褐色	若干	普通	スス付着
					単純口縁。口縁端丸くおさめる。口縁内面ハケ	淡褐色			
473	H-5+.	甌	17.9	-	単純口縁。口縁端丸くおさめる。口縁内面ハケ	淡褐色	茶褐色及び暗灰色の砂粒をかなり含む	普通	一部スス付着
					単純口縁。口縁端丸くおさめる。口縁内面ハケ	淡褐色			
474	H-5+.	甌	16.3	-	単純口縁。口縁端丸くおさめる。口縁内面ハケ	外/淡褐色～黒褐色 内/淡褐色	1~3mmの茶褐色及び褐色砂粒を多量に含む	普通	スス付着
					単純口縁。口縁端丸くおさめる。口縁内面ハケ	淡褐色			
475	H-5+⑧⑨	甌	14.5	-	単純口縁。口縁端丸くおさめる。口縁内面ハケ	外/淡褐色～黒褐色 内/淡褐色	1~2mmの灰石及び茶褐色砂粒を若干含む	普通	スス付着
					単純口縁。口縁端丸くおさめる。口縁内面ハケ	淡褐色			
476	H-5+.	甌	15.4	-	単純口縁。口縁端丸くおさめる。口縁内面ハケ	外/淡褐色～黒褐色 内/淡褐色	1~2mmの茶褐色砂粒を若干含む	普通	良好
					単純口縁。口縁端丸くおさめる。口縁内面ハケ	淡褐色			
477	H-5±⑩	甌	-	-	体部外面右上がりのタッキのちハケ。内面ハケ	外/淡褐色～黒褐色 内/淡褐色	1mm前後の茶褐色砂粒を含む	普通	スス付着
					体部外面右上がりのタッキ、内面粗いハケ	淡褐色			
478	H-5+⑪	甌	-	-	体部内外粗いハケ	外/淡褐色 内/淡灰白色	長石及び茶褐色砂粒をかなり含む	普通	スス付着
					体部外面右上がりのタッキ、内面粗いハケ	淡褐色			
479	H-5±⑫	甌	-	-	体部外面右上がりのタッキ、内面ハラケズリ	淡褐色	長石、石英を含む	普通	スス付着
					体部外面右上がりのタッキ、内面ナデ	淡褐色			
480	H-5±⑬	甌	13.6	-	単純口縁。体部外面右上がりのタッキ、内面ハラケズリ	淡褐色	石英多い。やや砂質	普通	口縁～腰の一部にスス付着
					単純口縁。体部外面右上がりのタッキ、内面ナデ	淡褐色			
481	H-5±.	甌	10.6	-	単純口縁。体部外面右上がりのタッキのちハケ、内面ハケ	淡褐色	1mm前後の白色、茶褐色砂粒	普通	口縁～腰の一部にスス付着
					単純口縁。体部外面右上がりのタッキのち縦かいハケ。内面ナデ	淡褐色～一部淡褐色			
482	H-5+⑭	甌	-	-	単純口縁。体部外面右上がりのタッキのちハケ	淡褐色	1~2mmの砂粒を含む(石灰)やや粗い	やや不良	スス付着
					単純口縁。体部外面右上がりのタッキのちナデ	淡褐色			
483	H-5±⑮	甌	12.1	-	複合口縁。わざかに凹曲で斜く立ち上がる口縁。体部内外粗いハケのちナデ	外/淡褐色～黒褐色 内/淡褐色	1mm前後の茶褐色砂粒、長石、石英をかなり含む	普通	スス付着
					単純口縁。体部外面右上がりのタッキ、内面ハケ	淡褐色と灰褐色			
484	H-5±.	甌	9.8	-	単純口縁。体部外面右上がりのタッキ、内面ハケ	淡褐色と灰褐色	長石を含む	部不良	スス付着
					単純口縁。口縁。II縁。体部外面右上がりのタッキ。体部外面タッキのちハケ、内面ハケのちナデ	外/淡茶褐色～黒褐色 内/淡茶褐色			
485	H-5±	甌	10.8	-	単純口縁。II縁。体部外面右上がりのタッキ。体部外面タッキのちハケ、内面ハケのちナデ	外/淡茶褐色～黒褐色 内/淡茶褐色	密、1~2mmの白色、茶褐色砂粒を少量化	良好	スス付着

「土」は十箇限りの略

標本 番号	出土地点	岩種	法量 cm			形態・手法の特徴	色調	鉱土	焼成	備考
			上層	底層	基層					
486	H-5 土⑧	塊	12.2	-	-	準圓口縫。体部外面へラミガキ	淡褐色	密、長石若干 含む	良好	
487	H-5 上⑨	小 塊	8.8	-	-	球形の体部からなるやかなカーブで外縫部にいたる。内外面ナデ	淡褐色～褐灰 褐色及く暗灰 色の砂粒を含む	1 mm前後の 褐色	普通	
488	H-5 土⑩	塊	-	-	-	体部外面右上がりのタキ。部分的にハケ。内面ナデ	淡灰褐色	1 mm前後の 淡褐色砂粒 をかなり含む	良好	
489	H-5 上		-	-	-	体部外面右上がりの相 いタキ。内面ケズリ のうちナデ	1 mm前後の 砂粒含む			
490	H-5 +⑪		-	-	-	外面下半へラケズリ。 内面ナデ、部分的にハ ケ	淡褐色	やや粗、長石 色砂粒	スス付着	
491	H-5 +	底 部	4.0	-	-	平底。外面右上がりの タキ。内面粗いハケ	2 mmまでの短 石英含む、砂質			
492			-	5.4	-	平底。外面ナデ。内面 ハケ	外 / 次褐色～ 黒褐色 内 / 灰褐色	2 mmまでの短 石英、赤色、白 色砂粒を多量 に含む	普通	スス付着
493			-	3.6	-	平底。外側底部付近タ キ、以上ハケ。内面 粗頭痕、ハケ	外 / 灰褐色 内 / 案褐色～ 黑褐色	基褐色、黒褐色 の砂粒（1 ～2 mm）を多 量に含む	良好	
494	H-5 土⑫		-	4.8	-	平底。外面タキのの ちチテハケ。内面ハケ	外 / 淡赤褐色 ～黑褐色 内 / 灰褐色			
495	H-5 上⑬		-	3.9	-	半底。外面へラケズリ。 内面ナデ。底部山凹に 導入された粘土塊が断 面に見える	淡灰褐色	1～2 mmの 小石（鐵屑し たもの）、1 mm前後の石 英		外側スス付着
496	H-5 上	鉢	9.6	-	-	端部を折り曲げただけ の折り口縫。球形の体 部。外面下半にハケ	後灰色	元石及び不 規則の砂粒 (1～2 mm) を含む	普通	
497			-	-	-	端部を折り曲げただけ の折り口縫。半球形の 体部。上げ底の底部。 内面ナデ	外 / 淡赤褐色 ～灰褐色 内 / 赤灰色～ 淡赤灰色	3 mmまでの長 石粒及び暗灰 色砂粒をな り含む	やや不良	
498	H-5 土⑭	底 部	-	3.3	-	不安定な平底。内外面 ナデ	外 / 灰黄色～ 暗褐色 内 / 灰黄色 ～暗褐色	密、長石、鈣 若干、石英少 量	普通	
499	H-5 上⑮	塊 か	10.0	-	-	直線的に立ち上がる口 縫形。内外面ヘミガ キ	乳白色	1 mm程度の 長石、石英、あ ざき色の砂粒 した様子	良好	
500	H-5 上⑯	高 杯 か	-	8.9	-	小ぶりな瓣輪形。円孔 の透し。外面へラミガ キ、内面ナデ	淡褐色	密		

#### D-4 区上層

501	D-4 灰褐色粘土	塊	14.5	-	複合口縫。比較的浅 い口縫部。端部を外方に 折り曲げる。倒卵形の 体部	外 / 淡褐色 内 / 增灰褐色	顯著な長石、 石英をたくさん 含む	良好	外 / 一面にスス 付着
502			16.2	-	-	複合口縫。比較的浅 い口縫部。端部下をな でてアクリットをつけ る	淡灰褐色	1～3 mmの砂 粒をたくさん 含む	体部下半にスス 付着

「上」は上表面の所

検出番号	出土地点	器種	法量 kg			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	高さ					
503	D-4褐色粘土	壺	22.5	-	-	複合口縁。口縁端を外方に折り曲げて平坦面をつくる	肌灰色	細かい砂粒(白、灰色、茶色)をたくさん含む	やや不良	
504			17.2	-	-		外 / 淡灰褐色 (-濃褐色) 内 / 淡褐色	他、細かい長石粒若干含む	良好	
505	D-4灰褐色粘土		14.7	-	-		外 / 淡褐色 内 / 肌色	細かい長石、石英、褐色砂粒をたくさん含む		
506			17.8	-	-	複合口縁。口縁端を外方に折り曲げる	灰褐色	細かい長石、石英砂粒をたくさん含む	普通	外面の一部にスス付着
507			16.4	-	-		淡灰褐色	1~2mmの長石、石英	不良	外面の一部褐色(スス?)
508			14.4	-	-		淡褐色	1mm前後の砂粒を多く含む		
509			16.0	-	-	複合口縁。口縁端を外方に折り曲げる。体部外面ハケ、内面へラグアリ	淡褐色	1mmまでの長石、石英砂粒をかなり含む	良好	
510			15.2	-	-	複合口縁。比較的高い口縁端は端部にかすかな平坦面をつくる	淡灰褐色	細かい砂粒をたくさん含む		
511	D-4褐色粘土		15.6	-	-		肌灰色	他、1~2mmの砂粒をかなり含む		口縁の一部と体部下半にスス付着
512	D-4灰褐色粘土		14.7	-	-	單純口縁。口縁端部はわずかに内側に凹りする	灰褐色	白色、少砂粒を多く含む		
513		壺	22.5	-	-	複合口縁。高い口縁端は端部向外方に折り曲げ、その上面に平坦面をつくる。端部にハケ原体による羽状文	淡褐色	細かい長石、石英及び淡灰色砂粒をたくさん含む		
514			19.0	-	-	複合口縁。高い口縁端は端部丸くおさめる	淡褐色			
515	壺 II	壺	10.6	-	15.4	タガ状の複合口縁端から直立に近く立ち上がる口縁。端部は扁平な体部	乳白色	約1mm前の石英、長石	普通	
516	D-4褐色粘土		10.5	-	-		淡褐色	細かい長石、石英砂粒をたくさん含む	良好	
517	鼓形壺		22.0	-	-	縮約化が進んだ製品。上台端は水平にひる	茶灰色	1mmまでの長石、石英、暗灰色砂粒をかなり含む		
518	C-4褐色粘土 D-3黒褐色 D-4褐色粘土		23.3	20.9	11.7	縮約化が進んだ製品。筒状内部は模様となる	黄褐色(内面縮約=黒褐色部分多し)	1mm前後の長石、石英砂粒を多く含む		
519	D-4灰褐色粘土		-	-	-	筒部へ丁合部片。外側ヨコナギ、内面へラグアリ	淡褐色	1~2mmの砂粒を含む		
520		杯	14.0	6.7	4.5	杯形。脚接合部を削り取っており、杯として再利用したものか。内外面ナデ	淡黃褐色	約1mm前の石英多数		

銘柄 番号	出土地点	器種	法量 cm			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	高さ					
521	D-4灰褐色	高杯	18.2	-	-	ゆるやかに広がる口縁。底部を外方に折り曲げる	肌灰色	1mm以下の長石、石英粒、滑灰岩色、茶褐色の砂粒をかなり含む	良好	
522	-	-	-	-	-	小ぶりでやや深い杯形。外・淡褐色 内外面ともヘラミガキをすこしとどめる	内・淡褐色	1mmまでの長石、石英、雲母を含む	やや不良	
523	C-3黒褐	-	-	17.4	-	低い脚。底部は大きく広がる。4方透し	赤みがかったオレンジ	墨妙物多い、石英、長石	良好	
524	D-4褐色灰色粘	-	-	-	-	ゆるやかに広がる脚部。外側へラミガキ。内側へラケズリ。ハケ	灰褐色	1-2mmの茶褐色、暗灰色の砂粒をたくさん含む		
525	他脚	杯	-	7.8	-	外方に大きく広がる脚。淡褐色 内外面ヨコナデ	内・淡褐色	1mmまでの長石、石英、難灰岩を含む		

### その他の地点

526	B-2壁	素	34.5	-	-	大きく広がる口縁。底部に3条の凹線。口縁内に4条の凹線	外・淡褐色 内・褐色	細かい長石、石英、雲母を含む	良好	
527	E-2ピット	-	24.7	-	-	大きく広がる口縁。上方にくり上げ、底部に3条の凹線	淡褐色	1mm前後の砂粒を多く含む		
528	E-P-2 黒褐色土	高杯	か	-	12.8	-	脚部面に3条の凹線。全体に厚手	外・乳褐色 内・黑色	1-2mmの砂粒を含む	やや不良
529	E-3壁	素	12.7	-	-	単純口縁。短い口縁。体部外側へラケズリ。内側へラケズリのちナダ	外・淡褐色 内・淡褐色	素	良好	外・口縫外面にスス
530	-	-	16.5	-	-	単純口縁。口縫端に平坦面をつくる。体部外側へラケズリ。内側へラケズリのちナダ。休部内面へラケズリ	淡褐色	素、1mm以下の長石、石英、暗茶色砂粒を含む		
531	E-2ベルト内	底	部	-	4.5	-	不安定な平底。外側ナダ。内側帯幅注目の中ナダ	褐色	素、小砂粒少量	
532	E-3壁	高	杯	17.6	-	-	水平な底面から立ち上がり、やや深い杯形	淡茶褐色	精選されてい	赤色顔料塗装
533	-	-	-	11.3	-	-	脚柱差かで開口して閉じる脚部。休部の穴に鉛注入して接着	淡褐色	素、1mm大の塊の一部黒色 少量	
534	E-2ベルト内	脚付	碗	9.8	-	-	小ぶりで深い杯形。休部内面へラミガキ	淡褐色	素、1mm大の 白砂粒を含む	
535	E-3壁	脚付	甕	か	-	低い手づくねの脚が付く。休部内面へラケズリ	素	素	赤色顔料塗布か	
536	P-3壁	捷	14.8	-	-	單純口縁。U脚筋をわずかに内側につまみ上げる。球状の休部	淡灰褐色	長石の砂粒含む	普通	
537	-	素	28.1	-	-	複合口縁。大型品。底面に立ち上がる口縁は上端部に平坦面をつくる	淡黃褐色	0.5mm前後の砂粒多い。1mmくらいのものもみられる	良好	

測定番号	出土地点	器種	法量 cm			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			II径	底径	高さ					
538	F-3 SX 02東	上製坊輪座	1.8	4.0	2.2	中心孔径 0.8 cm。端部に1対の斜めの穿孔。 その他にも1個の小孔がある。底面内凹みになる	淡褐色	白色、暗灰色、 底面/灰色	良 好	現存重量 28 g
539	E-F-4 緑灰色粘	小 瓶	8.2	-	8.7	小ぶりな体部から短く立ち上がる口縁部。手	淡褐色	1 mm前後の長石、石英粒を多く含む		(I)緑外面の一部と体形。最大ほどより下は黒褐色ススによるものか
540	F-3 西	高 杯	-	10.2	-	ラッパ状に聞く瓶部。内面シボリメ、粘土層の積上げがみえる	淡褐色	1 mm前後の砂粒多い	青 過	
541		楕 か	7.6	-	-	小ぶりで深い杯形。口縁部は内凹して立ち上がる。外側ハマキ。 内面ハケののちヘラミガキ	外/暗灰色褐色 内/灰褐色	白、微細粒を含む	良 好	
542	F-4 緑灰色粘	ふいご剥口	-	-	-	孔径 1.2~3.0 cm。二段的な焼成を受け、色調が3段階に変化している	淡褐色~暗灰色 褐色~暗赤褐色	白色小砂粒を含む		
543	A-4 千(⑤)	高 杯	16.0	-	-	斜放进から腰をもつ型 曲を杯で開く。端部を外側に折り曲げる。内 外側ハケののちナダ。内外面に縮文	淡褐色(褐色)	薄砂較粘適さ れた胎土		
544	B-3 黒褐		21.3	-	-		暗褐色	非常に粘質さ れていて。右 要含む、微砂 粒含む		
545	B-5 緑灰色粘	小彫丸底座	6.0	-	7.2	扁平な体部から短い 縦部にいたる	茶褐色	1 mm未満の反 白粒を含む		内面に茶褐色の 付着物。薄か
546	B-4 上(⑥)	蓋	22.3	-	-	複合口縁。高いII縁部 は端部を外に折り上げ る。端部から両部位にか けて3段のハケ痕部に よる削歴	黄褐色	φ 1 mm前後の 石英、やや目立つ		
547	B-4 上(⑦)	盤	8.8	2.2	11.7	單純口縁。かすかな平 面から細長いV字形。 端部外側削歴。底は右 上がりのタキキ。中段 は左上がりのタキキ。 内面ナダ。粘土粗粒上 げが見える	黄褐色 下半赤褐色	φ 3~4 mmの 砂粒含むが比 較的よししま る。赤褐色の 粒子含む		トボス付着
548	H-2+3 排水路 黒色上		13.5	-	-	偏平な体部。上部にく り上げた口縁には4条 の弦紋。体部外側ハケ。 内面ハケケズリ	灰白褐色	直径 1 mmの 砂粒(1.3.暗灰 色、茶褐色)を含 む		スヌ付着
549	西壁排水路		15.2	-	-	単純口縁。口縁端部を 上方にわざわざ引き上 げる。体部外側ハケ 内面ナダ。	赤褐色~茶褐色	1~3 mmの大 きな砂粒(1.3.暗灰 色、茶褐色)を 多く含む。5 mm~1 cm及び ぶぶ粒を含む	やや軟質 (摩耗がすす んでいる)	
550	東壁排水路		13.4	-	-	複合口縁。I縁は短く 直立する。肩部に波状 文	乳灰色~淡水 灰褐色	1 mm未満の砂 粒(1.3.透明 等)を多く含む	良 好	外側にスヌ付着
551		杯 か	16.3	-	-	丸い杯部。端部は外に 折り曲げる。外側ハケ。 内面ケズリののちナダ か。薄手	暗灰色	1 mm未満の砂 粒(1.3.透明 等)を多く含む		

「上」は上基層の略

標名 番号	出土地点	器種	法量			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底深	高さ					
552	北壁沿	鉢	12.4	-	5.6	丸味をもった体部。端部丸くおさめる。内面底部ユビナデ	淡黄褐色～灰褐色	1～2mmの大砂粒を多く含む(赤褐色、暗灰色、白色等)	やや軟質	
553	東壁排水路	低脚杯か	-	-	-	小ぶりな深い杯部。内外面ナデ	灰褐色～褐色	密、微細粒を含む	良 好	内外面赤色顔料を塗布するか
554	北壁排水路	蓋	4.0	7.7	11.8	ラッパ状の蓋全体に凹凸状の犯手がつく。外側内面でラグズリ。貫通孔(径0.8cm)あり	淡灰褐色～灰褐色	1mm程度の大砂粒や、灰褐色砂粒を多く含む		

## 2 区

555	G 1 黒褐	甕	17.8	-	-	複合口縁。比較的高い口縁。底部は丸くおさめる	暗紫褐色	白色微細粒を含む	やや不良	
556			19.0	-	-	單純口縁。指形をわずかに内側に肥厚させる。厚手	淡茶褐色	1mm程度の白色微細粒を多く含む	良 好	
557			17.4	-	-	單純口縁。端面で平坦面をつくる	白灰色小砂粒を含む			
558		壺	16.2	-	-	單純口縁。薄く、高く立ち上がる口縁。外側ヘラミガキ、内面ナデ	外/淡褐色 内/灰褐色	1mm程度の妙粒(白、青灰)を含む		
559		鉢形器台	-	-	-	上台～脚部。比較的長い間部をもつもの。上台上半に貝殻腹縫による平行線紋。内面ヘラミガキ	灰褐色	1mm程度の妙粒(白、半透明)を若干含む		
560	G 2 黒褐	甕	15.6	-	-	複合口縁。口縁端部は丸くおさめる。肩部にクレハツ工具による波状文	明褐色	1mm程度の白色及び透明砂粒を含む	一部軟質	
561		高杯	か	-	-	平らな杯底部から外側立ち上がる体部。外側にはクレハツ工具による波状文	淡茶褐色	白色、透明、黑色(光沢あり)の妙粒を含む	やや軟質	
562	G 2 × G 3 中情	小形丸底甕	8.8	-	8.1	球形に近い体部に比較的低い口縁部が接合する。外側ナデ、一部ハケ。体部内面ラグズリ	外/淡肌色 内/淡肌色～黒灰色	密、1mm程度の妙粒を含む	普 通	

# 図 版



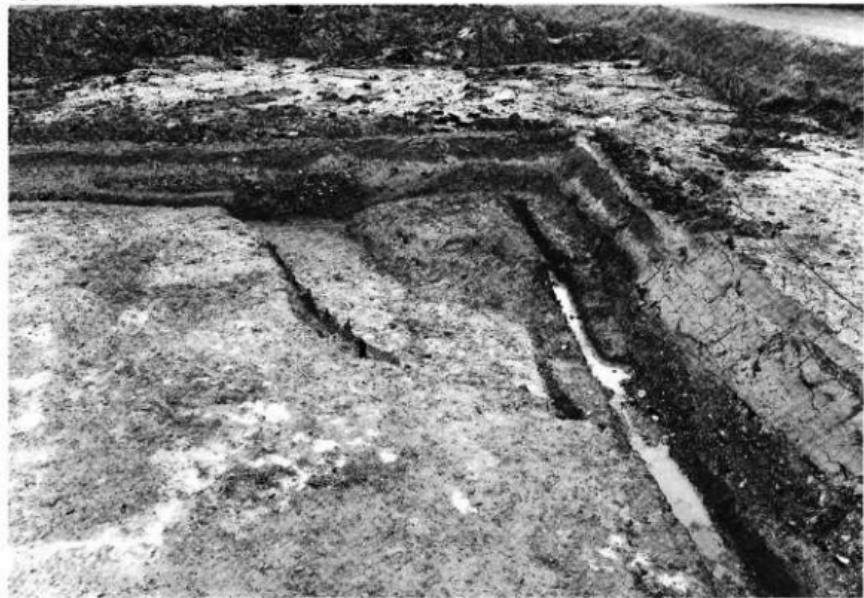


遺跡周辺の航空写真（白丸が南講武草田遺跡）



南講武草田遺跡 1区全景（南西から）

図版 2



SD 01 上層水路（南西から）



SD 01 下層水路（南西から）

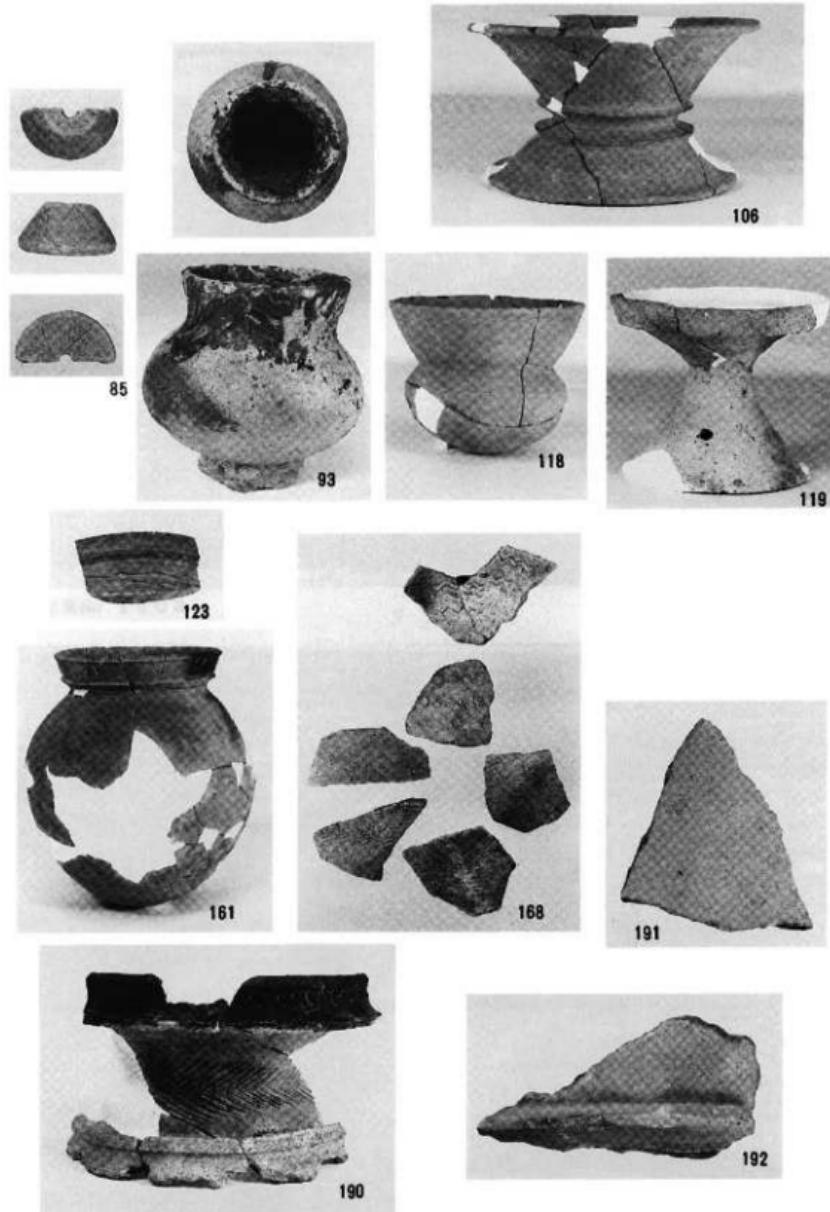


S D 0 2 (南東から)

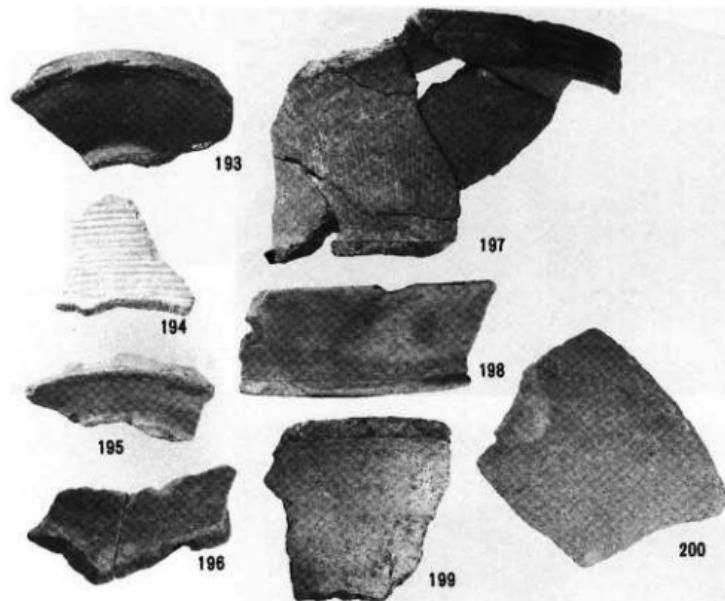


S D 0 3 (北西から)

図版 4



SD 01~03 出土遺物

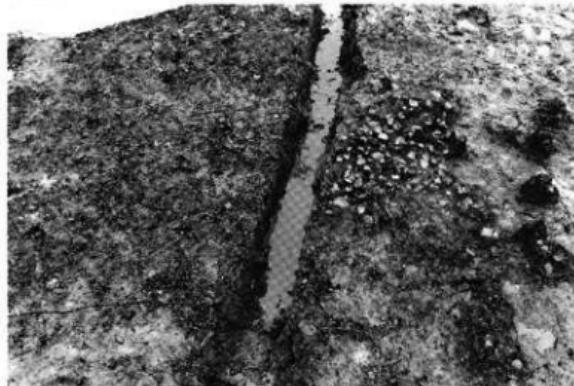


吉備系遺物



S X 01・03 (北西から)

図版 6



S X 0 3 上面  
遺物出土状態（北西から）



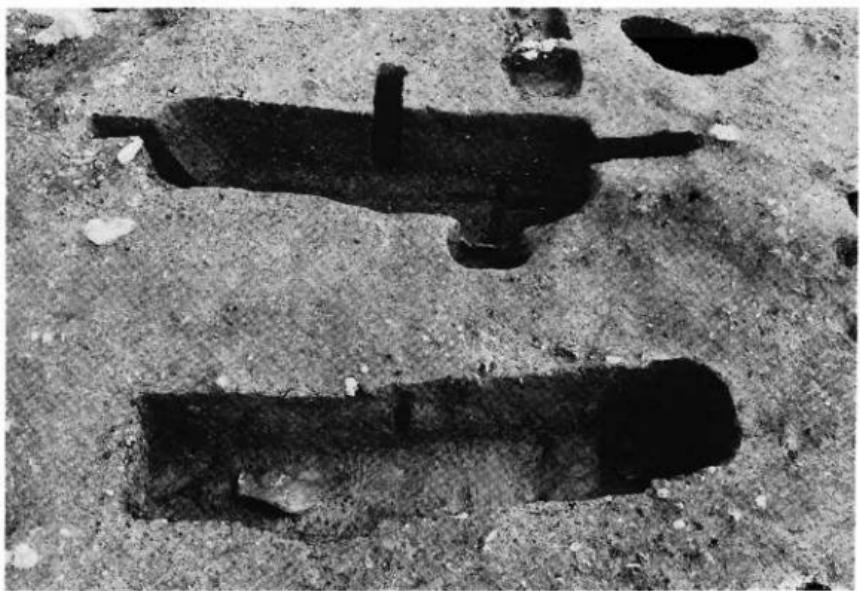
S X 0 1 北端部（南から）



S X 0 3 (南東から)



S X 0 4 (南から)



S X 0 5 (奥) • S X 0 8 (手前) (北から)

図版 8



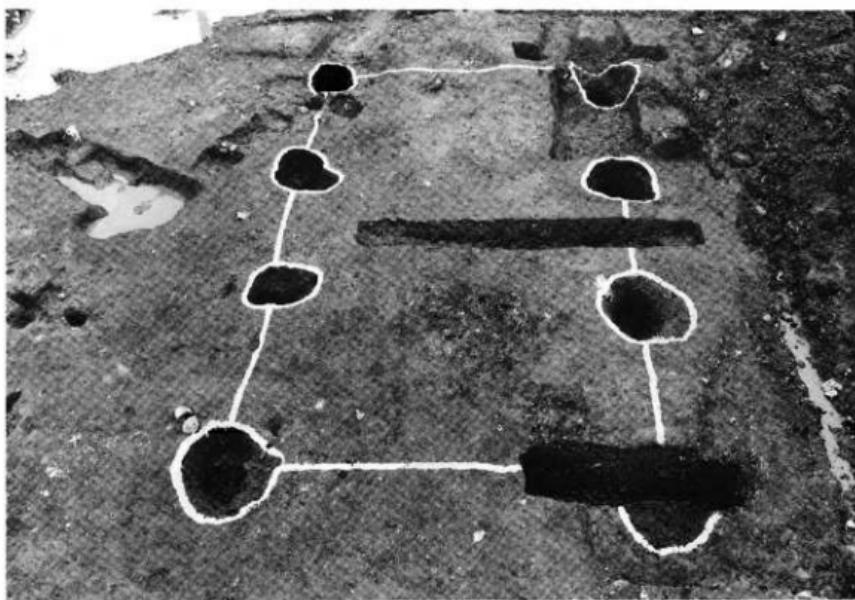
S X 0 6 (奥) • S X 0 7 (手前) (北東から)



S X 0 9 (北西から)

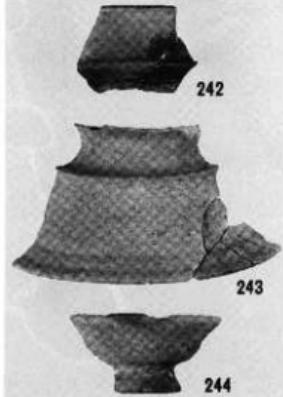
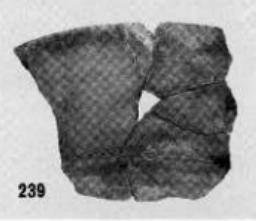
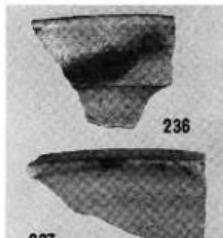
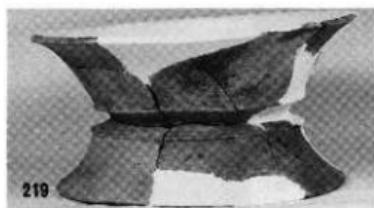
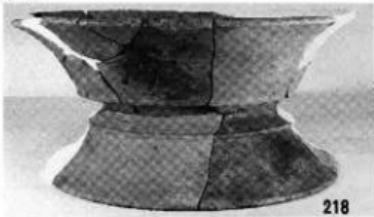


S X 10 出土状況（南東から）

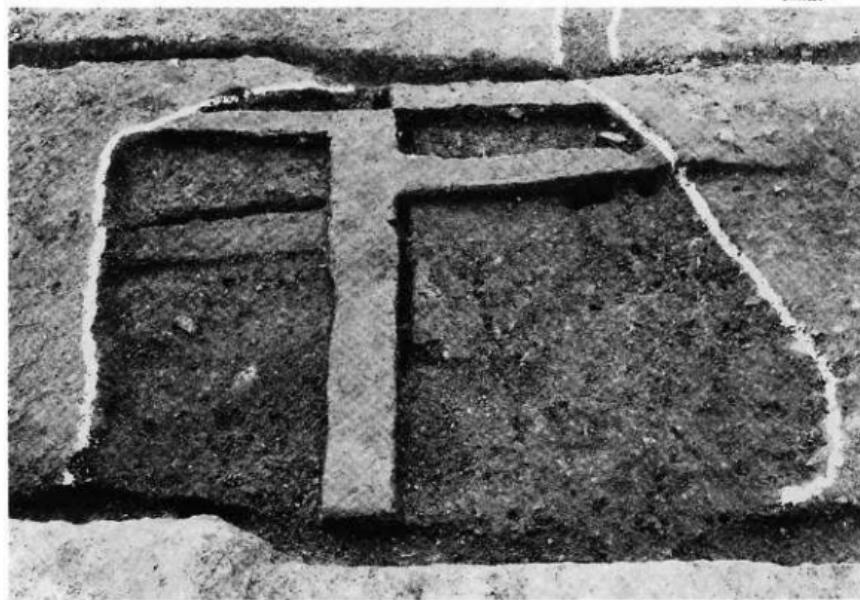


S B 0 1 (北西から)

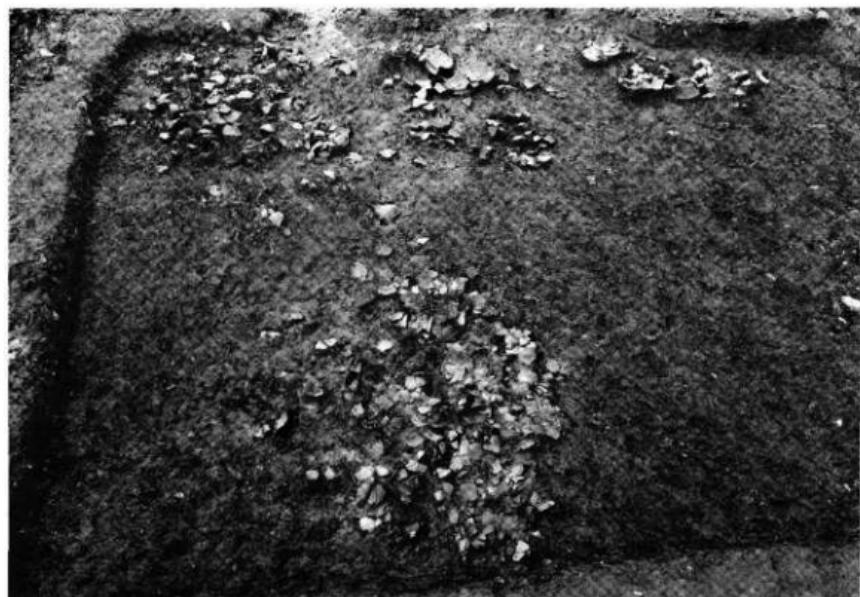
図版 10



出土遺物 (SX03; 218・219, SX06; 229～232, SX08; 236～238, SX09, 239・240,  
SB01; 242～244)



SB 02 (北西から)



DE-3 区土器漬り出土状況 (南東から)

図版 12



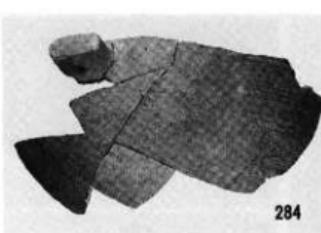
F - 3 区土器溜り出土状況（北西から）



E F - 3 区土器溜り出土状況（北東から）



271



284



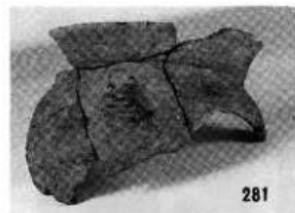
274



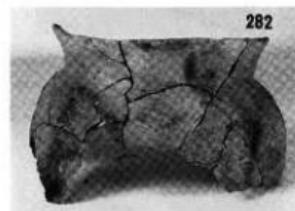
285



288



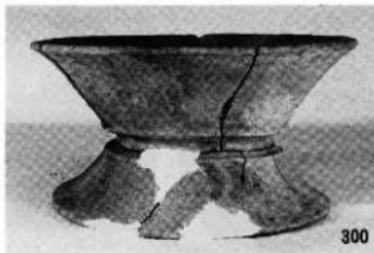
281



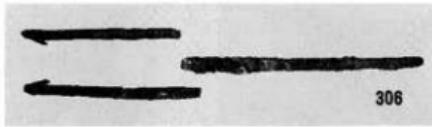
282



283

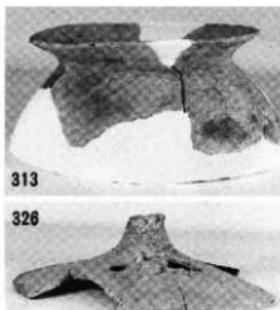


300

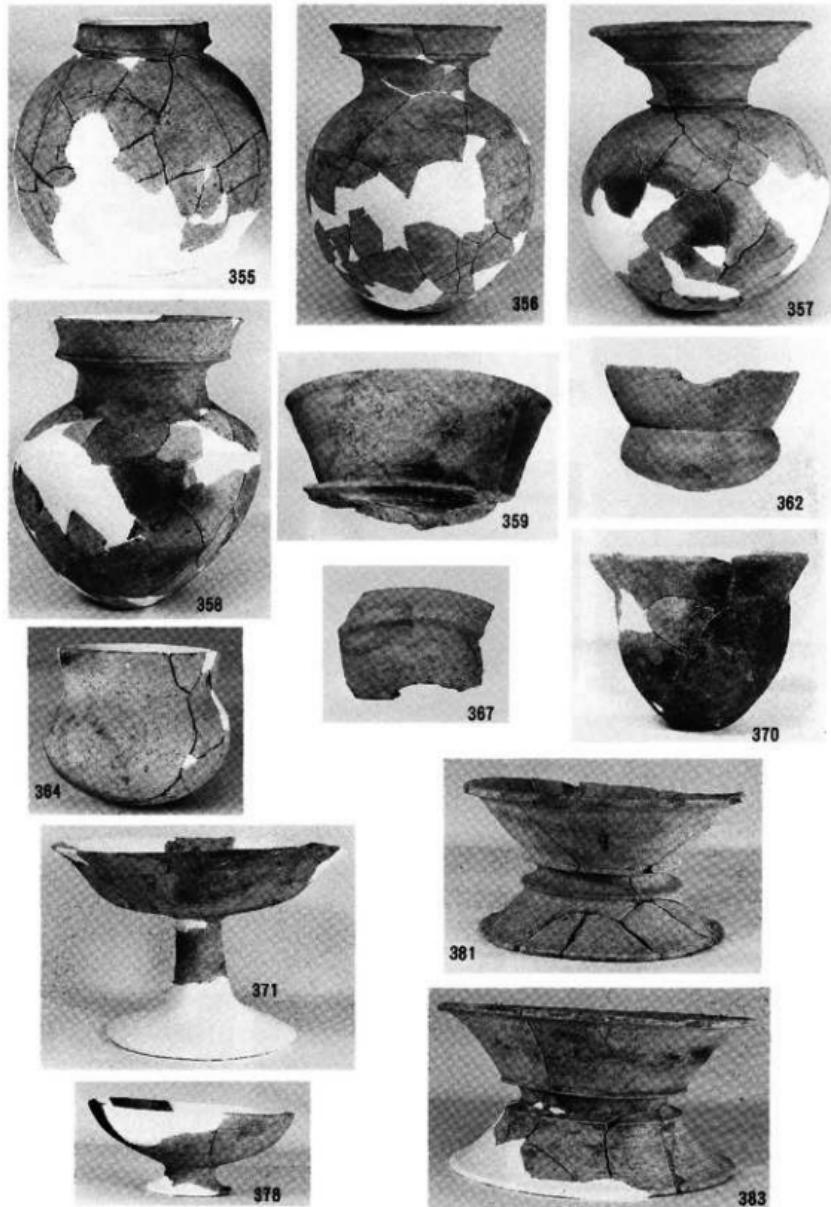


306

図版 14

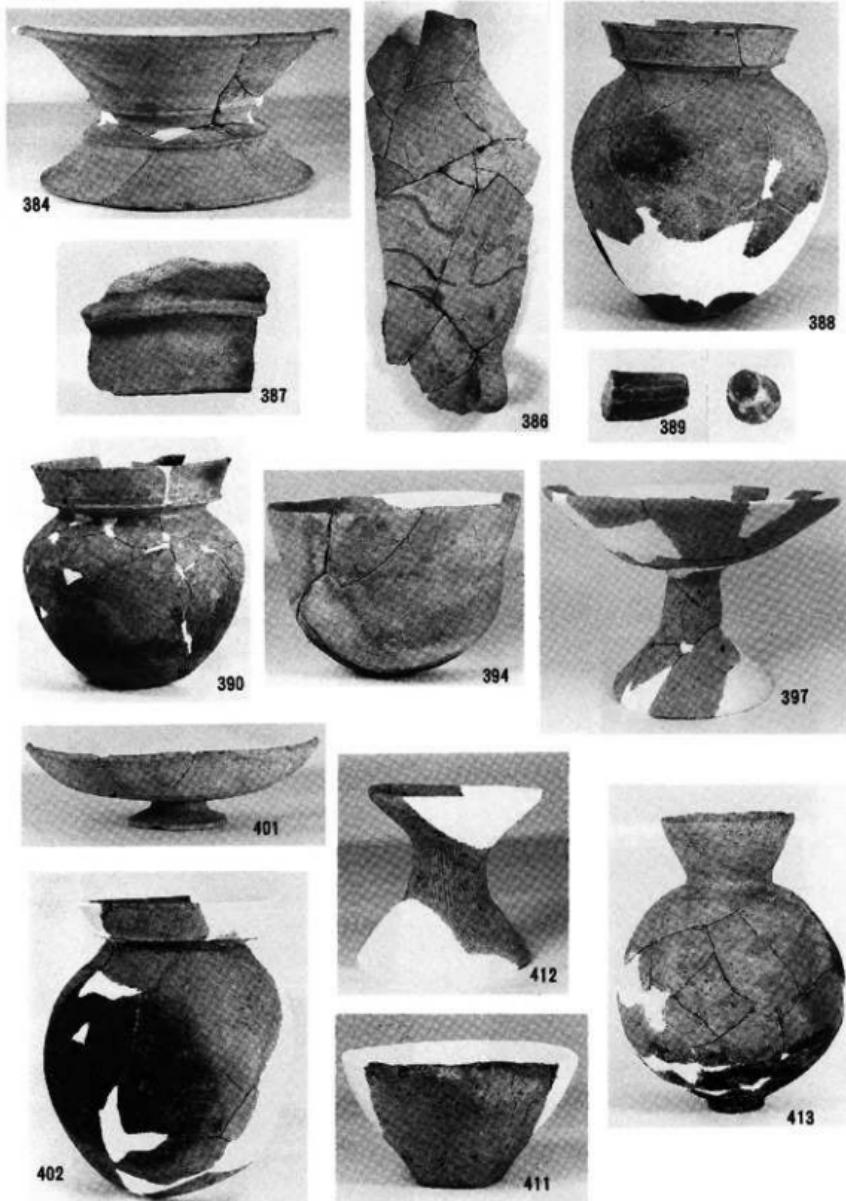


DE - 3区土器刷り (307 ~ 329), F - 3区土器刷り出土遺物



F - 3 区土器漬り出土遺物

圖版 16



出土遺物 (F-3 : 384 ~ 387, C-3・4 : 388 ~ 394, D-5 : 397, EF-2 : 401, EF-4 : 402 ~ 412, G-6 : 413)

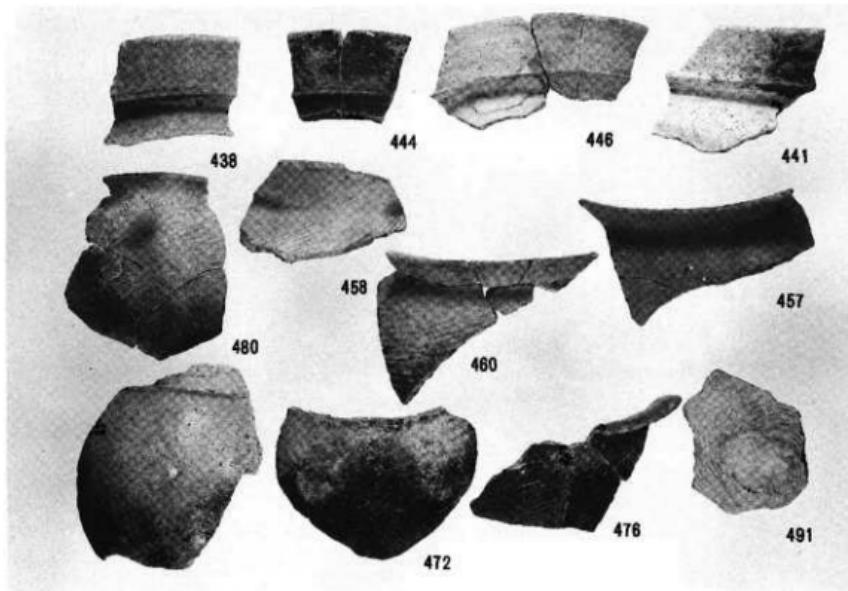
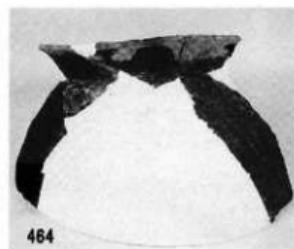
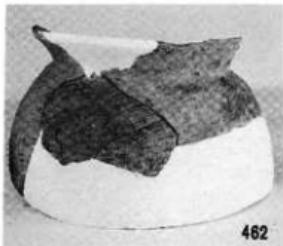


H-5 区土器溜り出土状況（南西から）



H-5 区土器溜り出土状況（北東から）

図版 18

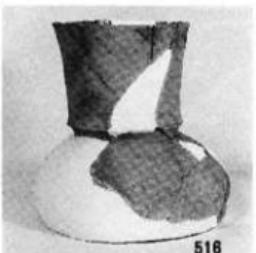


H - 5 区土器滴り出土遺物

図版 19



515



516



536



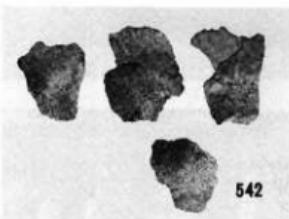
547



538

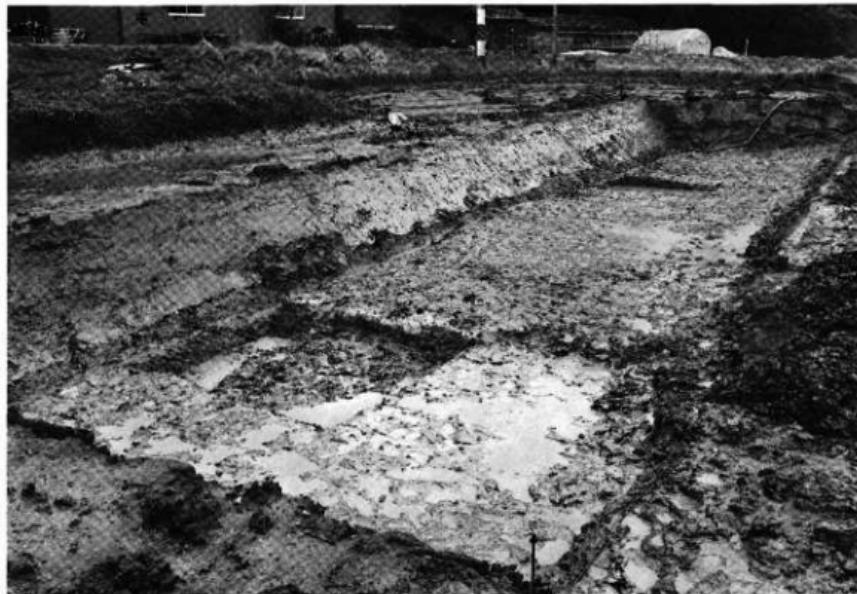


545



542

D-4区上層（515・516），その他の地点（536～547）出土遺物



第2調査区（北から）

図版 20



調査風景



現地説明会



調査参加者

講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5

南講武草田遺跡

1992年3月

1997年5月増刷

発行 鹿島町教育委員会

島根県八束郡鹿島町大字佐陀本郷640-1

印刷 (株) 谷 口 印 刷

松江市母衣町89番地